

---

# いつか きっと

水嶋ゆり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いつか きつと

### 【Nコード】

N4897E

### 【作者名】

水嶋ゆり

### 【あらすじ】

普通のサラリーマンである笹崎良はふとしたことがきっかけで奇妙な経験をする。その経験はいずれ彼の人生に大きな影響を及ぼすのだ。

## プロローグ

それを初めて身体で感じたのは今から半年ほど前のことだった。彼。笹崎。良は東京に住む28歳のごく普通のサラリーマン。ところがあることがきっかけで大変な経験をすることになるのだ。そのあることとは・・・

今から半年前の九月の事。会社の同僚達とアフター5を楽しもうとある居酒屋で焼酎の水割りを2〜3杯飲んだところで突然頭の中が真っ白になり、手足が痺れ、耳鳴りがしてきた。酔ったわけではない。元来彼は田舎育ちということもあり、小さい頃から水代わりにどぶろくを飲まされていたため、酒には滅法強いのだ。

（なんなんだ。これは！）

周囲の物音が何一つ聞こえない。だが両目ははつきり彼等の行動を捉えている。

（一体なんなんだ！）

時間にすればほんの20〜30秒程度だったに違いない。次の瞬間突然周囲の音が聞こえだし、痺れも治まった。その時間が彼には何十分にも思えたが、同僚の会話には全く途切れたところがない。さっきの話の続きなのだ。

（何だったんだろう？）

そう思いつつ珍しく酔ったのか、と思い直しその夜は終わった。その後しばらくはその奇妙な感じは現れなかったために彼はすっかりそのことを忘れていた。

それから半年後の今宵、またそれを感じた。今回は前回のものよりも長く、更に悪いことには目の前が真っ暗になった。たとえば夜でも街中はライトが煌々（こうこう）と輝き、車のライトもある。完全に真っ暗になることなど有り得ないのだ。ところが帰宅途中の彼をまたあの感覚が襲ったのだ。と、その時、<sup>かす</sup>微かに頭の中に響い

てくる声がした。じつと耳を凝らすとそれは『助けて』と言っているようだった。それは何度も何度も言っていた。『誰だ!』彼は声に出して叫んだが、それは彼自身が思っただけで実際は頭の中で響いただけだった。しかし声の主には届いたらしく、

『早く来て!』

と返事が返ってきた。それに答えるように彼は続けた、

『どこへ来いと言ってるんだ!お前は一体誰なんだ!』  
すると、

『鼓島。鼓島。』

2 回程返答があつてプツツと突然声は聞こえなくなった。同時に彼の身体は元通りになった。同様に帰宅途中のサラリーマンが不思議そうに彼の顔を見ていたので、長い時間突っ立ったままだたのだろうと推測できた。

「ああ、すみません。何でもないんです。」

そのサラリーマンに下手な言い訳をすると彼は一目散にアパートに帰った。

着替えをするのもそこそこにすぐパソコンに向かい、“鼓島”という名前を検索した。少し間があつたが、たった1件ヒットするものがあつた。急いで開いてみた。

鼓島くつづみじま> 東京都下に属し、島の形が和楽器の鼓の形に似ているところから

『鼓島』と呼ばれる。島の周囲150キロメートル。山と海に囲ま  
れた人口20

0人程度の小さな島である。住民は漁業と農業を主に

生活の糧としており、殆ど自給自足の生活である。云々。

「東京都下?・・・へえ。自給自足ねえ。・・・な、何だつてえ!..」

鼓島に関する記事を読んでいた彼は、最後の文章を見てひっくり返

るほど驚いた。

しかし今から約60年前、海底火山の爆発により島そのものが消滅

現在はその正確な位置すら特定できない。

「島が消えた？な、何なんだ！じゃあれは・・・あの声は一体？」  
その時パソコンのディスプレイがパツと強い光を放ち、彼の身体全体を包み込んだ。

次の瞬間、彼の身体そのものが消えていた。あとは何も変わらなかったような独身男の部屋があった。

## 第2話

ピチャ。水滴が顔に当たり“冷たい。”と感じ目が覚めた。覚めたといっても辺りは薄暗い。しかしヒソヒソ話が聞こえるところからすると無人ではなさそうだ。

「あ！気が付いた。みんな！気が付いたよ！」

子供の声だ。するとガサガサと音がして周囲に人が集まってきた。

「良かったなあ。」

皆口々に同じ事を言っている。

（何が良かったんだ！オレはパソコンを見ていたんだぞ！）

怒鳴りそうになったところで意識がはつきりしてきた。自分を覗き込んでいる人々の格好が変なのだ。大座布団のようなものを頭から被り、着ているものはツギハギだらけ。それもかなり汚れていて、おまけに身体からは異臭を放っているのだ。彼、笹崎 良は勢いよく起き上がった。途端に後頭部に鋭い痛みが走った。

「イツ！」

「さつき石にぶつけたんだよ。それにしてもどうしてあんなところに倒れていたの？B29が来たら大変だったのに。」

さつきの子供だ。・・・え？ 今何て言った？B29？え？

「君！今B29って言った？」

「うん。聞こえない？あの音。さつき空襲警報がなったからみんな防空壕に逃げるところだったんだ。その途中でお兄さんを見つけたんだよ。それでみんなでこの中に運んだんだ。お兄さん、どこから来たの？名前は？」

「ぼくくうごう？くうしゅうけいほうだつて？一体何の話だ？オレはドラマのロケ地に来ちまったのか？」

頭の中がグラグラする。オレはどうなっちまったんだ！

「お兄さんの言っている意味が分らないよ。頭をぶつけたせいでおかしくなったんじゃないの？」

「おかしくって？じゃ、一体今はいつで、ここはどこなんだ！」

「やっぱり変だよ。いい？今日は昭和20年3月1日でここは鼓島の防空壕だよ。」

頭巾を取ったその子は丸刈り頭の男の子だった。

「鼓島？え？昭和20年だってえ！！君はオレをからかっているのか！オレはさつきまで東京の自分のアパートにいたんだぞ！」

「東京？お兄さん、東京から来たの？どうやって？今は船も通っていないんだよ。B29がしょっちゅう来るから危なくて漁船も出せないんだ。」

（オレは一体どうしちゃったんだ。悪い夢でも見ているのか？鼓島のことを知りたくてパソコンを見ていたら急に変な感触が襲ってきた気がついたら60年も前の鼓島にいるなんて！）

すっかり混乱してしまった良は頭を抱えてしまった。それをどう勘違いしたのか少年は慰めるように言葉をかけた。

「お兄さん、頭を打ってどうにかなったんだね？僕は佐々木 勝一。戦争に勝つようにつて父さんがつけてくれたんだ。今は中学に通ってるんだ。と言つても戦争に勝つまでは学校よりも勤労奉仕の方が大事なんだ。兵隊さんが戦っているから僕らは陰で応援しなくちゃいけないんだ。大日本帝国は絶対連合軍になんか負けないぞ！」

勝一少年は突然立ち上がると“勝つて来るぞと勇ましくう”と歌い出した。するとそれに呼応するかのように中にいた全員が少年の後に続けとばかりに合唱し始めた。頭が混乱している上に大合唱を聞かされた良は再び気を失った。

### 第3話

ピピピピ。ああ、何年ぶりだろう。鳥のさえずりで目覚めるなんて。

次に良が目を覚ましたのは太陽が燦燦と輝く日中だった。何もかも一夜の夢だったのだろうと目を擦りながら瞬<sup>したた</sup>くと、そこはやはり昨夜の防空壕の中だった。ああ、あれは夢ではなかったのか。オレは何かの力で終戦間近の鼓島に引き寄せられタイムスリップしてしまったのか・・・しかもあのHPでは鼓島は海底火山の爆発で消滅するのだ。いつ・・・明確な答えが記載されていなかったので時期がわからない。何気なく上着のポケットに手を入れてみると携帯電話があった。見れば電池は充分にあるようだ。短縮ボタンを押し、ダメ元で掛けてみた。プルルル。5回ほど呼び出し音が聞こえ、懐かしい声がした。

「良ちゃん？どこにいるの？さっきから何回も電話しているのにどうしたのよ！」

電話の相手は幼馴染みの吉川綾子である。実家が近く、幼少の頃彼女の両親が他界したことから、良の両親が後見人となって面倒をみてきた。そういった関係で良と綾子はこれまで何度となくお互いを支え合ってきた仲だった。

「綾子か。良かった。説明している暇はないんだ。とにかくオレの言う通り動いてくれ。どんな手を使ってもいいから鼓島つていう島について調べて欲しいんだ。こっちから電話すると電池がなくなるから結果が判ったらお前の方からかけてくれ。いいな！なるべく早くだ。じゃ、切るぞ！」

それだけ言つと良は電話を切った。60年の月日を隔てても何故か理由はわからないが、携帯は通じるということがわかった。とにかく連絡手段は確保できた。

ふと横を見ると、勝一と見慣れぬおさげ髪の女の子が良の行動



をじつと見つめていた。

「勝一君・・・だっけ？・・・どうしたの？」

「・・・それ何？」

「これ？携帯だよ。」

「ケイタイ？ケイタイって何？」

「電話だ。持ち運びできる電話さ。」

「電話？嘘だ。電話はそんな形じゃないよ。僕、村長さんのところで見たけどそんな形じゃなかった。何かのおもちゃだろう？」

「おもちゃ？・・・じゃあないけど・・・そうか。見たことがないんだね。電話がこうなったのはほんの数年前だからね。信じられないのも仕方ないか。・・・ところでこの女の子は誰なの？」

「僕の姉ちゃんだよ。一子っていうんだ。最初にお兄さんを見つけたのが僕の姉ちゃんなんだ。」

一子は紹介されると恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「一子です。勝一があなたが気付いたと知らせに来たので、傷の手当をしようと思って来てみました。どうですか？気分、悪いですか？」

そう言いながら一子は良の頭の傷を調べた。

「・・・ありがとう。君は手つきがいいね。」

「そりゃそうさ。姉ちゃんは看護婦志望だもの。立派な看護婦になつて兵隊さんのケガを治すんだもんね！」

「そうか。君なら立派な看護婦さんになれるよ。絶対大丈夫だ。」

良の誉め言葉に一子の顔は一層赤くなった。

「ところで　ここには女の子がいらないけど、どうしてなんだい？」

「何言ってるんだい。当たり前じゃないか。男女七歳にして席を同じふせず。だよ。夕べからお兄さん変だよ。女の人は別の防空壕にいるに決まってるじゃないか。」

「ああ、なるほどね。」

「それよりお兄さんの名前なんていうの？夕べ聞いたんだけど全然

僕の話聞こえてないみたいだった。」

「ああ、ごめんよ。オレは優良の優・・・じゃ。」

「あ！優だね？良じゃ成績優秀じゃないもの。僕はね、いつも良と乙ばかりなんだ。丙と丁を取らなきゃいいと思ってるんだけど、姉ちゃんはそのじゃダメだと言っんだ。一生懸命勉強して良い学校へ入れと怒るんだ。これからは勉強する子に敵わないってね。でも僕は立派な兵隊になるのが夢なんだ。士官学校に入って憎いアメリカをやっつけてやるんだ！」

「そうか。でも姉さんの言う通りだぞ。いいか、ここだけの話だ。絶対誰にも言うなよ。この戦争は8月で終わる。それも日本が負けるんだ。」

勝一！落ち着け！信じられないかもしれないが、オレは今から60年後の未来から来たんだ。夕べはオレもパニックってて事情を把握できなかったが、さっき目が覚めてやっとな事情が飲み込めた。オレはタイムトラベルしてしまったんだ。何かの力がオレをここへ連れて来たんだ。」

「ひ・非国民！！敵国語を使うばかりかおかしな事言いやがって！助けるんじゃないかった！おーい！みんな・・・ぐ！・・・」

他の人を呼ぼうとした勝一の口を一子が塞いだ。

「静かにしなさい勝一！いい！神社の巫女さんの話を忘れたの？！」

「巫女さんの話？」

「はい。今から半年ばかり前のことです。島の巫女さんが突然私達に向かつて奇妙な話をしたんです。1年以内に大変なことが起こる。しかし案ずることはない。遠方より助け人が現れる。その者の言動は不可思議な事ばかりだが、決して軽んずべからず、と。私達は何のことだかわかりませんでした。あなたの出現でその意味がわかりました。遠方というのは距離の事ではなかったのですね。時間を隔てることなどあり得ないと思いますが、現にあなたを見たら納得しないわけにはいきません。あなたが救世主なんですね？」

「ちょ・ちよつと待ってくれ！オレが救世主？んなわけないだろう！オレは平凡なサラリーマンだぜ。そんな大それたことできつこな

いよ!」

一子の手を振り払うと良は防空壕を出ようとした。その時地鳴りのようなゴゴゴゴという不気味な音が響いてきた。

「B29よ!早く中に入って!」

一子の声を吹き消すようにその巨大な物体は姿を現し、バリバリという轟音をさせた。爆弾が落とされたのだ。

## 第4話

ようやく辺りが静かになった。時計を見ると2時間程経過していた。外に出てみると風景が変わっている。草木は焼かれ、土さえも黒く変色しているのだ。一体これは何なんだ！

「これが戦争なのよ。」

冷静が一子のひと言が良の胸に染みた。

「マジかよ・・・」

「え？何て言ったの？」

「こんな事って・・・」

放心状態の良の腕を取り、一子はもう一方の手で勝一の襟を掴みさつさと歩き出した。

「姉ちゃん、どこ行くんだよ！」

「黙って！巫女さんのところへ行くのよ！」

ずんずん歩く一子と勝一に引かれ、良の足も歩調を合わせる形になった。

歩く道すがら、ずっと良は焼け野原になった景色を信じられない面持ちで眺めていた。初めて見る景色にも関わらず、何故かやり切れない気持ちになった。

神社に着くと、中は閑散としており、一子の声が良く通った。

やがて一子の同年代位の女の子が出てきた。資格好からするとこの子が巫女らしい。巫女といえば老婆をイメージしていた良は意外に感じた。

「優さん。こちらが巫女の絹代さんです。」

「一子ちゃん。オレの名前間違ってるよ。オレは優じゃなくて優良の方。さつきは勝一の剣幕に圧倒されて否定できなかったけど、オレは良。わかった？」

「あら！すみません。もう！勝一ったら早合点で。いつもそうなん

です。」

するとそれまで黙っていた絹代が突然良に抱きつき泣き出した。啞然とする3人。

「ど・どうしたの？絹代ちゃん！！」

慌てた一子が良から絹代を引き離した。

「絹代ちゃん？」

訳が解からず戸惑う良に一子が言った。

「私達・・・同級生なんです。絹代ちゃん！離れて！」

なおも抱きついたまま離れない絹代を必死で止める一子。

「ど・同級生？ははは・・・なるほどね。・・・いいよ、一子ちゃん。

とりあえず絹代ちゃんの気の済むまでこのままでいてその後、話を聞いてみようよ。ね？絹代ちゃん。」

「・・・待ってた。あたし。あなたを待ってたの。呼んでた

らきつと来てくれるって信じてた。あなたはあたしたちを助けられる唯一の人よ。」

突然絹代が言い出した。

「え？それってどういう意味？良さんがあたし達を助けてくれるってどういうことなの？」

一子の必死の問いかけにやっと正気を取り戻した絹代が話しだした。「・・・一子ちゃん。半年前にあたしが言った事覚えてる？一年以内に大変な事が起こるって。あれは本当の事よ。この島全体に危機が迫っているの。それが何なのかはわからない。それによってかなりの人が死ぬの。でも大丈夫。この人のお陰で助かる人もいるからだからね、この人の言う事を疑わないで。お願い。一子ちゃん！」良を見つめる絹代の目は尊敬と憧れに溢れていた。しかし当の良にとっては筋道の通らない話しにしか聞こえなかった。

「ま・待ってくれよ。オレはさつきも言っただけけど・・・」

そう意気込んだところで腹の虫がグーツと鳴った。考えてみれば夕べから何も食べていなかったのだ。

「フフフ。朝ごはんがまだみたいね。待ってて。何もなければ芋

くらいならあつたと思つね。」  
絹代はそう言いながら奥へ引つ込んだ。

## 第5話

絹代がいなくなった途端、勝一がブツブツ言い出した。

「こんな非国民に何ができるって言うんだ。戦争が8月で終わる？ それも大日本帝国が負けるなんて言う奴のどこを信じるって言うんだ！」

「勝一、落ち着くんだ。確かに君の時代の人達にはオレの言う事全てがウソに聞こえるだろう。だがな、これは本当の事なんだ。けどそんな事大きな声で言ってみる。もしかしたら歴史が変わるかもしれないんだぞ。だから内緒だって言ったんだ。」

ああ、そうさ。日本はアメリカ軍に原爆を落とされたことで完全降伏するんだ。終戦の日は8月15日。原爆投下は8月6日の広島と9日の長崎だ。よく覚えておくんだな。      だがオレがこの島の救世主だなんて一体どうこうことなんだろう・・・」

良の話は一子・勝一2人の姉弟にとってある意味予言のように聞こえた。21世紀に生きる良にとっては歴史で習った周知の事実でもこの2人にとっては未来の出来事なのだ。すぐに信じるという方が無理なのかもしれない。

「じゃ、日本はどうなるんだ！僕は絶対信じないぞ！日本が負けるなんて！」

いきり立つ勝一にふかし芋を数本手に持った絹代が言った。

「勝ちゃん。この人の言う事は本当よ。このまま戦争を続けても戦況は悪くなる一方だわ。新聞やラジオでは勝利を収めて進軍し続ける兵隊さんを励まそう。なんて言ってるけど、本当は南方に行った人達全員が玉砕し続けているのよ。それを軍は秘密にしているんだわ。」

「絹代ちゃん・・・どうしてそんな事知ってるの？」

「・・・あなた達。秘密守れる？（と3人の顔を見渡して）・・・じゃ、こっち来て。」

絹代が先頭になり行き着いた先は、神社の裏山にある小さな祠みだった。誰にも見られないように木の枝や葉っぱで隠してあったため、それとわかる者でなければそこに祠みがあるとは全く気付かないだろう。



## 第6話

絹代が観音開きの扉を両手で押すと、ギツギツと音がしてそれは開いた。目が暗さに慣れてくると1人の男がケガをして横たわっているのが目に入った。その男を認識した途端、良達は思わず絶句した。なんとその男は金髪で青い瞳を持っていたからだ。その男もギョツとしたようだったが絹代の姿を見つけると安心したように再び横になった。

「大丈夫よ。この人達はあたしの友達なの。」

絹代の日本語はどうかその男に通じるらしかったが、すかさず良が英語で話しかけると、男は気でも狂ったかのように休む間もなく喋りだした。なんの取柄もない普通のサラリーマンだった良の唯一の特技といえば、英語を日常的に話せることだった。これは彼の祖父の教育方針で、“英語を日常会話として扱えないようではこれからの世の中は生きていけん!”というのが口癖で、彼の母親も同様に教育されていた。そのお陰で今、こうして外国人と意志の疎通が図れるのだ。それをポカンと口を開けて見ていた3人に対し、この青年との会話を要約して聞かせた。

「名前はウィリアム・カーペンター。アメリカの水兵だそうだ。南方に2年程駐留していたが、今回上層部の命令で日本に来る途中甲板から海に落ちてこの島に流れ着いたらしい。南方の様子を絹代ちゃんに伝えたが伝わったかどうか心配だと気にしていたから大丈夫だと伝えておいたよ。彼はケガが直り次第、軍に戻りたいと言っている。どうだい？」

その言葉にサツと一子が反応し、ウィリアムの容態を診た。

「……このぶんならあと一週間もすれば大丈夫よ。」

良がそれを通訳すると、ウィリアムはホッとしたようにため息を漏らした。その目には涙が滲んでいる。なにやらポツリと呟いた。

「敵国の自分を助けてくれてありがとう。と言ってるよ。」

ウィリアムにつられて一子と絹代の2人もお互いを抱き締めて泣いた。しかし勝一だけは敵意をあらわにしている。その後、彼等はウィリアムの容態を案じつつ、神社に戻った。

## 第7話

さて、良から意味不明の電話を受けた綾子である。鼓島なんて聞いたこともない彼女は、とりあえずHPを開いてみることにした。小学校の教諭である彼女はパソコンなるものは一応使えるのだ。しかしあくまでも一応である。今日が平日ということもあり、ちよつと学校のパソコンを拝借した。

良がやったと同じように“鼓島”で検索するとたった一件ヒットした。それを読むと更にわからなくなってしまった。消滅した島を調べる。だなんて一体どういう見なのかしら。良とてここまでは調べたに違いないのだ。要はここからどうしたのかを聞きたいのだらう。小さい頃から一緒に育ってきた綾子には良の言いたい事が手に取るようにわかるのだ。

HP上でこれ以上情報が得られないと知ると、今度は何でも相談できる校長の宮下に聞いてみることにした。幸い宮下は校長室に在室しており、綾子の来室を快く迎えた。

「どうかしましたか？真剣な顔付きで。」

「先生。先生は歴史に造詣が深くていらっしゃるのですよね？」

「歴史？ええ、まあ。しかし造詣が深い、とまではいきませんよ。それが何か？」

「先生は鼓島という島をご存知ですか？」

「つつみじま？・・・いいえ。知りませんねえ。私は地理には疎いんですよ。」

「いいえ。今から60年前に海底火山の爆発でその存在そのものが消滅してしまった島です。東京都下だったそうですが。」

「60年前ですか？うん。やはり私にはわかりませんねえ・・・  
・・そうだ！私の知人に地学を専攻していた人がいます。その人に照会してみしょう。」

言うが早いか宮下はデスクの受話器を取り、メモを見ながら番号を

ブッシュした。

呼び出し音が数回鳴ると目当ての人物が出たらしく宮下の顔が綻はじんだ。

「やあ、しばらく。宮下だよ。うん、うん。いやあこつちもさつぱりだよ。・・・ああ。ん？ああ。早速なんだがねえ、君。60年前に海底火山の爆発で消滅してしまった鼓島という島を知ってるかね？そうそう・・・え？知ってる？・・・ああ、そうらしい。東京都下に属していたそうだ。君、その島について知ってる事を何でもいいからなるべく詳しく教えてくれないか？ああ・・・ん？文献がある？え？・・・サラ・カーペンターという女性記者が書いたもの？既に亡くなっているのか。え？貸してくれるのか？おお！それは都合が好い。わかった。それはありがたい。では後ほど・・・」

宮下は受話器を置くと綾子に向かってVサインを見せた。

「いや、彼は高木というんだがね。外出する用事があるからついでにこつちに寄って文献を持って来てくれるそうだよ。良かったね。」

ところで急にどうしたんだね？60年も前に無くなってしまうた島の事を知りたいだなんて。」

「すみません。実は私にもわからないんです。突然調べてくれと言われて・・・」

段々語尾が小さくなる綾子を見て宮下は、

「ははあ。例の彼だね？しかし君達は面白い関係だねえ。幼馴染みとは聞いていたけれど、恋人同士というわけでもないようだし。かと言って単なる友人というわけでもない。私等のような年代の者には理解できんよ。」

「すみません・・・」

「いやいや、責めているんじゃないよ。誤解しないでくれたまえ。でもね、こういうことは回りがヤキモキしているうちはどうにもならんものだよ。いずれ君達の間もはつきりする時がくるよ。」

どれ。高木の好物のコーヒーを入れる準備でもするか。あ、いや結構。こう見えてね、私はコーヒーを入れるのが上手いんだ。

高木が来たら呼ぶからそれまで待っていて下さい。」

「はい。よろしくお願いいたします。」

丁寧に頭を下げると綾子は職員室へ戻った。

## 第8話

神社に戻って来た途端、勝一の怒りが爆発した。理由は敵国の兵隊を助けた拳句<sup>かくま</sup>匿った絹代とその兵隊と平気な顔で敵国語を喋る良に対してである。あまりの怒りに勝一の体は震え、今にも2人に飛び掛りそうな剣幕である。一子と絹代はただオロオロするばかり。だが良だけは平然とした顔で勝一の怒りを受け止めていた。

やがて勝一に興奮が少し収まった頃合いを見計らって良が口を開いた。

「勝一。お前の言い分はわかった。確かに小さい頃からアメリカが敵だと教えられてきたお前にはオレや絹代ちゃんの行ないは許せないだろう。だが、人は肌の色や言葉で憎み合ったらダメなんだ。現にドイツやイタリアは日本の同盟国だろう？アメリカとイギリスだって同じだ。お前は日本の地図とアメリカの地図を見比べたことがあるか？戦争で奪い取った国は除いて元々の日本の領土を考えるんだ。国の面積1つとってみてもアメリカやイギリスに対して日本がしている戦争がいかに無謀なことかわかるだろう。いいか、10日には東京が空襲に遭う。文字通り火の海になるんだ。よく覚えておくんだ。この世で一番大切なのは他人を思いやる気持ちだ。そこから人の命の尊さと慈悲の心が生まれる。決して外国人だからと敵視してはいけない。」

「東京が空襲に？本当なの！」

一子と絹代の2人はその言葉に仰天したようだ。

「ああ。ここは離島だから空襲は受けないかもしれないが、今朝のような単発的な攻撃はこれからも覚悟しておかなければならないよ。」

「ウソだ！お前の言うことなんか誰が信じるもんか！大ばかやろう！！」

しかしそのことで再び怒りがぶり返した勝一は床柱を思い切り蹴飛

ばす<sup>ば</sup>と泣きながら走り去った。

## 第9話

「綾子先生。校長先生がお呼びよ。」

待っていた呼び出しがあつたのは、次の時限が終わった後だった。待っている間中、綾子の頭の中はそのことばかりで授業は殆ど上の空だった。

ドキドキしながら校長室のドアをノックした。

「どうぞ。」

の声で中に入ると、宮下ともう1人の男性がいた。この人が高木だと紹介されたが、高木は綾子が想像していた地学の学者とはかなりかけ離れていた。綾子のイメージは牛乳瓶の底のようなメガネをかけ、ヨレヨレの背広に皺だらけのワイシャツ姿で、いつ風呂に入ったかわからないような異臭を放った人種だった。ところが目の前にいる高木という学者は、年こそ宮下と同じくらいだが、その他の点では全く異なっていた。宮下が中肉中背なのに対し、高木は背も高くスーツはアルマーニで、腕時計は落ち着いた感じのロレックスだ。ひと言で言うならロマンズグレーである。これでは綾子でなくともポツとなるに相違ない。

「どうしたのかね？高木がハンサムなので驚いたのではないかな？」ズバリ言い当てられて益々赤面する綾子。

「ハハハハ。どうやら凶星だったようだね。しかし残念だが高木には奥さんも子供もいるんだよ。君があと25年早く生まれていたなら状況は違っていたかも知れないがね。」

宮下の軽口も今の綾子には全く通じない。穴があつたら入りたい気分だ。

「おいおい宮下。こんなに若くて綺麗なお嬢さんをからかつちやいかんよ。失礼しました。私が高木です。何でも鼓島の事が知りたいとか。」

外見を裏打ちするようなバリトンに綾子は挨拶も忘れ何度も頷いた。



「宮下から電話を貰ってすぐにカーペンター女史が書いた回顧録を思い出しましてね。外出のついでといつては申し訳なかったが持参しました。彼女は既に故人なのですが、ご主人の口述と日記をもとに執筆し、彼の死亡を機に出版したもののらしいです。その中で鼓島に関する箇所がありました。ご主人のウィリアム・カーペンター氏が南方から日本に来る途中、乗っていた軍艦から誤って海に落ち、運良く流れ着いたのが鼓島だったそうです。ここからは実際あなたの目で読んで下さい。ただ不思議なことが1つあるのですが、その中で氏の命を救った人物の1人というのがその時代にそぐわない様子だった。という箇所なんです。ま、よろしければその本はあなたに進呈いたしますよ。あ、いやいや気にしないで下さい。私はもう一冊持っているから。読んでいただける方がいるならその本も嬉しいでしょう。」

お！もうこんな時間か。では私はこれで失礼するよ。何か発見したら是非お知らせ下さい。宮下。美味しいコーヒーをありがとう。じゃ、綾子さん。今度またお会いしましょう。」綾子が礼を言う間もなく甘い余韻を残し高木は帰っていった。

「綾子先生。どうしました？まあね、あいつを見たら余程の人じゃない限り女性はクラクラしますよ。昔からそうでしたからね。・おっと、これは失礼しました。高木も言っていましたが何かの役に立つたら是非私にも知らせて下さいね。」

「はい。校長先生、ありがとうございました。」  
ようやく言葉が出るようになった綾子はそれだけ言うと、本を大事そうに抱え校長室を辞した。あとは放課後を首を長くして待つばかりだった。

## 第10話

「オレは今でも信じられないって言うか、これが現実だなんて思いたくないんだ。心の中じゃ元の場所に戻れないんじゃないかっていう不安で一杯だ。一刻も早く帰りたい。でもどうやったらいいのかわからない。こんな事ウソだろ？って叫びたい気持ちで張り裂けそうなんだ。逃げ出したい！これが本音さ。でも今のままじゃ、勝一があんな風じゃどうしようもないだろう？勝一があんな風になつてしまったのはオレが原因だし。何とかしないとたとえ帰れたとしても心残りだ。帰るに帰れないよ。・・・ すまない。一子ちゃんと絹代ちゃんにこんな愚痴を言つても始まらないのにね。」

現実を直視できないのはオレの方さ。そんなオレが言うのもおかしいけれど、オレを信じて欲しい。オレは決して君達を混乱させようとして日本が負けると言つた訳じゃないんだ。これは事実なんだ！あと5ヵ月後。日本は終戦を迎える。もう少しの辛抱だ。」

必死に訴える良に、一子と絹代は深く頷いた。

「日本はその後どうなるの？」

一子の素朴な疑問に良はどこまで答えるべきか迷つた。良のひと言が彼女達の未来を変える恐れがあるからだ。

「ねえ！どうなるの？私達はどうなるの？！」

「大丈夫だよ。日本は今、アメリカに負けるけれど60年後はアメリカに経済力で対抗できるくらいになるよ。君達の子供や孫の時代には明るい未来が待っている。」

良は現代の日本が抱えている諸問題をここで言うのは控えた。ただでさえ明日の命もわからない彼女達に未来も同じようなものとは言えなかったからだ。せめて希望だけは持たせてやりたかった。その言葉に安心したのか2人はホッとした表情になつた。今は辛く悲しい世の中だが、自分達の子孫は幸せになれる。それがせめてもの救いだつた。

「ありがとう。良さん。あなたはやっぱり私達に救世主よ。勝一のことなんか気にしないで。今にケロツとして現れるから。お腹が空くとすぐ怒るのよあの子は。あら！もうこんな時間？早く帰って夕ご飯の支度しなくっちゃ！良さん、あんな防空壕で申し訳ないけれど、あそこに今晚も寝ていただけるかしら？」

え？またあそこで寝るの？と冗談交じりの本音が口をついて出そうになったが、なんとか思い止まった。この子たちにとってあそこが生き延びるための唯一の場所なのだ。軽々しい言葉は控えなければならぬ。

その時ずっと沈黙を守っていた絹代がラッキーな提案をした。

「ここで良かったらいつまでも泊まっていいいわよ。私のお父さん、神主だから困っている人は助けなければいけないの。芋で悪いんだけど食べ物はあるし。ね？そうして下さない？」

思いがけない申し出に一子には悪いと思いつつ良は嬉しくなった。

どんな所でも土の上で寝るより数段ましだ。

「そ・そうね。そのほうが私も安心だわ。」

なぜか一子は素直に受け入れた。

「じゃあ決まりねっ！」

その後一子は2人に別れを告げ、もと来た道を帰って行った。

「一子ちゃんの家ね、両親が空襲で死んでしまって、勝一君と2人叔父さんの家に厄介になっているの。だから本当は良さんを連れて行きたいんだけどできないのよ。わかってやってね？」

その後姿を見送りながら絹代が呟いた。そういう事だったのか。と、今更ながらこの時代の悲惨さを痛感する良だった。

## 第11話

「さあ中に入りましょう。父に紹介するわ。」

呆然としていた良は、絹代に声をかけられ現実に戻った。絹代に促され家の中に入ると、彼女の父であり神主の守野 正吉が夕方のお勤めを終えて茶の間に戻って来た。正吉は丸刈りにこそなっていないが、神に仕えているだけあって柔和な顔付きをしていた。絹代が良を紹介しようとするのと正吉は小さい島のことから前置きして、既に島に入った正体不明の男、つまり良の存在は知っていたと言った。そして物のない時代だが困っている時はお互い様、と快く良の宿泊を許可してくれた。絹代がこのところもうすぐ救世主が現れるとしきりに訴えていたが、あなたの事だったのか。絹代は巫女としては非凡なものを持つているものの、その予言のような話を完全に信じてはいなかった。まさか現実を起ころうとは努々（ゆめゆめ）思わなかったと付け加えた。

『助けて。』『鼓島。』という必死の声を聞いたと良が説明すると、更に正吉は絹代は何度も呼びかけていたが、最後の呼びかけで返答があり、鼓島と叫んだあと気を失ったと教えてくれた。

「こうなったらいつまでも居てくれて構わないから鼓島を救って下さらんか。なに、誰が何を言おうとわしゃ平気だよ。母さんも昔は優秀な巫女だったから絹代の言っていることは承知している。良さん。この通り、頼みます。この島を救って下さい！」

手をつちり握られた上に真剣な顔付きで頼まれ、良には返す言葉が見つからなかった。

## 第12話

放課後。綾子は例の本を抱え、ふと気になって良のアパートへ立ち寄った。すると玄関先に良の同僚である結城 淳一が立っていた。

「結城さん？どうしたんですか？」

「あ！綾子さん！ どうしたもこうしたもないですよ。笹崎はどうしたんですか？今日無断で会社を休んだんですよ。課長、カンカンで凄かったです。夕べオレが一緒だったって課長知ってるもんだから、しつこく聞かれてホント困ってしまっただけ。綾子さん、知ってますか？あいつ。全然連絡取れなくて・・・」

その口調から結城の困惑が伺えた。しかし綾子にも良の消息がわからない。今朝偶然電話がかかってきて鼓島のことについて調べて欲しい。と頼まれたきりその後全く連絡がないのだ。急に心配になった綾子は合鍵で鍵を開け、結城と共に中に入った。

中はいつもの通り、少々散らかったままの良の部屋だった。違ったのはコートが脱ぎっぱなしになっていたことだった。普段、身の回りのことには無頓着な良も仕事着のスーツやコートは大事にしており、脱いだらすぐハンガーにかけるとして習慣としていた。心細いからと近くにアパートを借りていた綾子は週に1度、良の部屋を掃除しに来ていたのだが、コートが脱ぎっぱなしになっていたのはこれが初めてだった。

「変ね。良ちゃん、コートはいつもきちんとはンガーに掛けていたのに・・・それにスーツがないなんて。」

「鼓島？何だ、これ。」

パソコンを開いた結城が声を上げた。良は帰宅するとすぐパソコンを開くという習慣を結城は知っていたので、部屋に入るとすぐスィッチを入れたのだった。

「え？・・・ああ、良ちゃんが調べていた海底火山の爆発で沈んで

しまった島の事だわ。」

「はい？おかしいな。あいつ、昨日までは調べ物をしているなんてひと言も言わなかったのに。急にどうしたんだろ。」

「そうね。言われてみれば変だわ。私にもそんな事一度も言ったことはなかった。今朝急に電話を掛けてきて、理由は言えないが大至急調べてくれって言って勝手に電話を切っちゃったの。ああああ！考えたら腹が立ってきた！！なんでこんなことで私が悩まなくっちゃいけないのよ！！ントにもう！！」

綾子の態度の変わりように慌てた結城は挨拶もそこそに何かわかったら知らせて欲しいと言い残し、足早に部屋を出て行った。残された綾子は一人愚痴をこぼしていたが、突然例の本を思い出し、コタツのスイッチを入れると深々と中に入り早速ほんのページを捲った。3月とはいえ、まだまだ東京は寒いのである。

## 第13話

原題名はわからないが、訳名は『私の海軍時代』作者はウィリアム・カーペンター。表紙にそう記載されていた。目次らしきものはなく、年代順、日付順にその時々、彼が体験した事、感じた事などが綴られていた。初めから読んでいた綾子は目当てとするページにたどり着くと突然食い入るように読み出した。それまではただページを繰っているという感じだったのだが、真剣に活字を追いついたのだ。その頁にはこう記されていた。

『1945年 1月25日

私の乗った軍艦はガダルカナルから一路、日本へ向けて出航した。日本への総攻撃に向けて偵察のために行くのだ。謂わば斥候隊である。しかし一朝事件<sup>こと</sup>あらばすぐにでも応戦できる体制は整えてある。そして我々はもう1つ。そのほかに極秘任務も背負っている。空は快晴。船出には最適の日である。』

『1945年 1月30日

いよいよ日本海域に入った。ここはK I I H A N N T O H沖だと友人の航海士が言っていた。目指す場所はもうすぐだ。それにしても海ばかりで退屈だ。カードにも飽きてきた。何か面白いことはないだろうか。』

『1945年 2月5日（後にキネヨに聞いた）

突然の頭痛で目が覚めた。ここは一体どこだろう？ふと見ると断髪頭の少女が自分をじっと見つめている。「× \*」何か言っている。そのしぐさから想像すると、大丈夫か？と聞いているようだ。微かに頷くと安心したように額に乗せた布切れを水に浸しまた乗せてくれた。ひんやりしてとても気持ちがいい。しかしここは一体どこなんだろう？少し前の記憶を辿ってみる。自分は退屈しのぎに甲板に出て、舳先<sup>へんき</sup>に立って目的地に近いことを確認していた。ところが同じように退屈していた水兵が、甲板でレスリングを始めた。面

白がって見ていた私は、転がってきた1人の水兵にぶつかり海へ・  
・落ちたのだ。その後の記憶は全くない。気付いたらこの薄暗い部  
屋のようなところに寝かされていた。しかも落ちた時に背中をぶつ  
けたらしくケガをしていた。その少女はケガの治療をしてくれた上  
に、熱が出たときにはずっと看病をしてくれていたのだ。熱でうな  
されていた中でもそのことはしっかりと認識していた。「ありがと  
う。」声に出して感謝の気持ちを表した。だが彼女には全く通じて  
いない。両手を合わせて再度言ってみた。すると今度は通じたら  
しい。彼女の顔に笑顔が浮かんだ。「\* x +」彼女が言った。今  
度は私がわからない。何とか自分の意思を伝えようと彼女も手振り  
でやっている。しかしそれが不可能だと知るや、フツとため息をつ  
いた。「キネヨ。」突然彼女は自分を指差して言った。どうやら彼  
女の名前らしい。「ビル。」私も答えた。初めて言葉だけで通じた。  
そんな単純な事に異常なまでに感動した私達は声を上げて笑った。

ズキツと頭に痛みが走った。すぐに彼女、キネヨはまた心配そ  
うな表情になり、私の頭を撫でながら何かを言った。多分安静にし  
ている、という意味なのだろうが、この先どうなるのか不安に仕方  
がない。』

『1945年 2月18日

私のケガは考えていたより重く、毎日キネヨが手当てをしに来て  
くれるのだが、彼女は来る度にすまなそうな顔をする。多分充分な  
薬がないことを気にしているのだろう。いつも薬草を持つてくるか  
らだ。名前はわからないが、確かにその薬草は傷に対して効果を発  
揮しているような気がする。しかし若い彼女には不服らしい。もっ  
と良い薬さえあったなら・・・ということなのだろう。手当てをし  
た後、決まって同じ言葉を繰り返すのだ。意味はわからないが、1  
0日も聞けば覚えてしまう。“HONTONI KIKUNOKA  
SHIRA?”毎日言うものだから今日は彼女が言い出しそうなタ  
イミングを計って私も一緒に言ってみた。初め、キョトンとした顔  
をした彼女だったが、お互い顔を見合わせまた声を上げて笑った。



もしかしたら完全とは言わないまでも意思の疎通が図れるかもしれない。ふと一筋の光が差したような気がした。』

## 第14話

『1945年 3月1日

私は今日という日を生涯忘れないだろう。なぜなら、やっと自分の意思を自分の国の言葉で話せる相手を見つけたからだ。いや、見つけたという表現は間違いだ。キネヨが連れて来てくれた友人の1人が偶然にも英語を話せたのだ。それもカタコトではなく、流暢な英語だ。彼の名前は“RYO”と言った。彼の説明でこの島の名前が“TUZUMIJIMA”ということを知った。嬉しくなった私は早口でこれまでの経緯を話した。すると“RYO”は完全に理解したように見えた。だがあとの2人。（やはりキネヨが連れて来たのだが）姉弟は私をじつと睨み、今にも飛び掛りそうな形相をしていた。もつとも姉の方は私がケガを負っていると聞かされるとすぐ傷の具合をみてくれた。彼女の診立てでは間もなく快復するだろうとのこと、その後は好意的に接してくれた。看護婦になるのが夢だそうだが、彼女なら人種を問わない良い看護婦になるだろう。ところが、弟の方は終始私を睨み続け、結局ひと言も語らず帰って行った。キネヨには申し訳ないが、ケガの如何に関わらず、早目にここを引き払った方が良さそうだ。』

『1945年 3月5日

これまで親身になって世話をしてくれた杵よに何も言わず出て来てしまった事に申し訳ない思いで一杯だが、彼等が来た翌日私はあの小屋を出た。身を潜めながら海岸に出ると、非常時の連絡方法である秘密の狼煙<sup>のろし</sup>を島民に見つからないように上げた。

翌日になって小さな船が私の待つ砂浜近くにやって来た。乗っていたのはあの日甲板で私にぶつかった水兵と、もう1人は私の友人のアレックスだった。私達は抱き合って再会を喜び合った。もうダメだろうという者も中にはいたらしいが、彼等2人だけはビルは絶対に死なないと今日まで探し続けてくれていたのだ。

急ぎその船に乗り母船に乗った。戻ってから2日後にこの日記を書いている。落ち着いてみるとやはりキネヨのことが思い出された。申し訳ないことをしたと後悔している。この埋め合わせは必ずしようと思う。』

『1945年 3月11日

非常に悲しい事件だ。わが国にとっては小さな石が落ちたような事だが、これほどのことになるうとは！東京が我が軍の攻撃で火の海と化しているのだ。大勢の人達が死に、家は焼かれている事だろう。私のような者でさえ想像できるのだから、上層部の人達はより詳細に知っている事だろう。しかも私達はそれ以上のことをこれからやろうとしているのだ。』

綾子はそこで一息ついた。というよりもその後は突然1945年8月6日。つまり広島に原爆投下された日になっていたからだ。た。 “ RYO ” って一体誰？まさか、そんなはずないわ！心配になった綾子はすぐ携帯を取り出し良の短縮番号を押した。プルルル・・ほーら、通じるじゃない。何かの事情で良ちゃんは今帰宅しないだけなのよ。そうなのよ。自分に言い聞かせながら綾子は良の応答を待った。しかし結果は・・・『電源が入ってないか、かかりません。』機械的な声が空しく聞こえただけだった。何故？どうして？綾子は良を想って泣いた。泣きながら日記の続きを読んだ。

## 第15話

絹代の家に厄介になって2日目。良は綾子の事になり電話をかけた。プルルプルル。2度呼び出し音がなったところで聞き慣れた懐かしい声が聞こえてきた。しかしその第一声は、

「良ちゃん！今どこにいるの！ずっと電話かけ続けているのにどうして電源入れとかないの！」

いきなり怒鳴られた。

「電源？入れといたぞ。お前こそ何だ！全然連絡・・・あ、いや悪い。それより事情は帰ってから・・・帰って？ オレってもしかしたら・・・帰れるのか？」

「何言ってるのよ！それより今どこにいるの！」

「あ？ああ。信じられないだろうが、オレは今60年前の鼓島にいる。突然タイムスリップしちまったらしいんだ。それより頼んでいた事調べてくれたか？」

「タイムスリップウ？！私をからかっているの？いい加減にしてよね！早く帰って来てよ。みんな心配してるんだから！」

「帰りたくても帰れないんだ！それより早く鼓島の事を教えてくれ！」

突如“ RYO ”の文字が綾子の脳裏を過<sup>よぎ</sup>った。まさかそんな事が！半信半疑のまま綾子は手元近くに置いてあった日記を掻い摘んで読んだ。あの後3月11日以降の出来事に関する限り鼓島についての記載はなかった。但し、とんでもないことが起きて鼓島が消滅したと結果のみが書いてあるだけだった。それから“ RYO ”なる人物について少し記載があった。日本人らしいがとても流暢な英語を話し、今の時代とは異なる風体をしていた。長髪で着ている服も流行のものとはかなり違っている。何より驚いたのはその身長である。私は170CMそこそこだが彼は私よりも10CMは高いだろうと思われた。今の日本人は痩せて小さくいつも飢えている、というの

が私の先入観だったが（実際キネコ達はそうだった）“ RYO ”は全く違う。あれはきちんと食事を摂っている身体だ。とにかく全てにおいて不思議な男だった……。

その箇所にくると良はとても興味を覚えたようで、ウィリアムには昨日会ったと言った。そして“ RYO ”というのはオレのことだ、と付け加えた。

「何ですって！じゃ本当に今良ちゃんは60年前にいるの？そんな事であるの？こんなに近くに声が聞こえるのに？……」

最後は涙声になる綾子。元来彼女は気が優しく泣き虫だったのだ。

「泣くな！全く！どうしてお前って奴はすぐに泣くんだ！オレの方が泣きたい気分だったのに！いいか、この携帯も間もなく使えなくなる。だからこれが最後の連絡だと思つてよく聞くん。いつ戻れるか分らないからな。いいか、適当な理由をつけてオレの会社に退職願を出してくれ。それから……帰ったら……」

そこで突然電話が切れた。

「良ちゃん？良ちゃん！どうしたの！ねえ！」

通話口に向かつて泣きながら綾子は叫んだ。再度短縮番号を押した結果はいつも通りだった。

「良ちゃん。帰ったら？その後は何て言おうとしたの？」

まさかそんなはずはないと否定していた事が現実だったとは！綾子は電話握り締めたまま泣き崩れた。

## 第16話

（大変な事が起きる？一体何だろう。）

綾子との会話は突然の電池切れで終わってしまった。しかしその前の内容が気になった。確かに海底火山の爆発で島は沈む。しかし火山の爆発は自然現象だ。その現象以前にそれに関する記述があるのは不自然だ。もっとも出版するに当たって日にちを遡って付け加えた、ということはあったかもしれない。多分そうなのだろう。1人考え事に没頭していた良は絹代の声で我に帰った。

「大変よ！ビルがないの！早く来て！！」

引つ張られるように昨日の祠に行くと、確かにウイリアムの姿はなかった。寢床は綺麗に片付けられ昨日まで人がいたという痕跡すらなかった。しかし隅の方に文字が書かれていた。傍によつて目を凝らすと、ウイリアムが書いた絹代宛の深い感謝の気持ちと、直接会つてその事を伝えられない詫びの文だった。

「まだケガも直っていないのになぜなのよ！」

良から和訳を聞いた絹代は悔し涙を浮かべた。だが良にはウイリアムの気持ち的理解できた。恐らく勝一が存在が彼をそういう行動に走らせたのだろう。勝一はウイリアムを敵国の人間としか見ていなかったし、今にも飛び掛りそうな形相をしていたからだ。ウイリアムは勝一の口から自分の存在が漏れるのを恐れ、自ら姿を消したに違いない。

「そんな・・・」

口では信じられないといった風だったが、絹代も納得するものがあったようだ。

文章はまだ続いていた。10日後には東京上空から爆弾が落とされ、その後も各地で爆撃の被害に遭うだろう。この島もいつそうなるかわからないから気をつけて欲しい。最後に助けてもらったお礼は必ずする。と締めくくつてあった。

「何ですって！東京が？・・・どうしてそんな大変な事をビルが知っているの？」

「それがアメリカなんだ。一介の水兵でさえその事を知っている。その懐の大きさがアメリカなんだよ。日本はそういう国と戦っているんだ。分ったかい？日本がアメリカに負けた理由が。」

「・・・でも。この事はオレと君の2人だけの秘密にしよう。下手に騒ぐとパニック、いや、大騒ぎになるからね。黙っていたほうがいい。東京が空襲に遭うのは変えられない事実なんだから。」

良はショックを受けた絹代を促し祠を出た。

## 第17話

勝一は祠ほこりの外で良と絹代の会話を一部始終聞いていた。昨日神社を飛び出した後、駐在所に駆け込もうとその前まで行つて立ち止まつてしまった。“人間はみな同じ。肌の色で区別してはならない。大切なのは他人を思いやる気持ちと人の命。”良の言葉を思い出したからだ。

「勝一じゃねえか。どうした？」

駐在の大島に話しかけられるまでそこに立っていた。

「あ・・・何でもねえ。」

そう言つてまた勝一はどこかへ駆け出した。しかしそのまま叔父の家に帰りたくなかつた彼は、フラフラと島中を歩いた。夜になつて眠くなると絹代の家、つまり神社の境内で野宿をした。野宿には慣れつこだ。悪さをして叱られそうになるといつも大地を布団に満天の星を眺めながら眠つた。境内はよく使わせてもらっているから真つ暗でも何がどこにあるかすっかり熟知している。そうして朝を迎えた。

朝になつて良が起きてきた。するとまたあのおもちやを取り出し、耳にあてて間もなく喋りだした。喋っているのはアヤコという女性らしい。話し方からするとただの友達ではないようだ。時々相あい槌づちを打つところからするとあれはおもちやではなく、本当に電話なのだろうか。だが電話というものは、壁に付いていて箱の横にある棒をグルグル回し、交換手が出たところで送話口に向かつて相手の番号を言い、一旦切つて電話のベルが鳴るのを待っているものだ。

そうだ！あいつはオレがここにいるのを知っていておびき出すためにあんな芝居をしているんだ。その手に乗るオレじゃないぞ！改めて意気込む勝一の耳に絹代の慌てた声が飛び込んできた（ビルがない？そうら見ろ！あの米兵は俺達に恐れをなして逃げ出したんだ。ざまあみやがれ！）内心ほくそ笑んだ勝一だったが、



好奇心も沸いてきた。2人の後を付けると祠の陰に隠れ、その会話を盗み聞きた。

（東京が空襲に遭う?!）

確かに良はそう言った。昨日も同じことを言った。本当なのだろうか。こうしてはいられない。誰か大人の人に知らせなければ！再び彼は走った。走って駐在所の前にたどり着くと、今度は躊躇なく中に飛び込んだ。

「た・た・たいへんだ！と・とうきょうが空襲に遭う！」

息も切れ切れに叫んだ。

「どうしたんだ。勝一。姉さんが探しとったぞ。また何かやらかしたんだろ。あんまり姉さんに心配かけるんじゃないぞ。」

大島は勝一の言葉を端から無視した。

「そんなことどうでもいいんだ！大変なんだ！東京が米軍にやられるんだ！早く何とかして！」

「ば・ばか者！！何を言うのかと思えば。いいか、勝一。今、大日本帝国は南方で大勝利を収めている最中なんだ。デタラメを言う子供だからといって容赦せんぞ。さあさあ姉さんが待っている。早く家に帰りなさい。」

大島は勝一の訴えに耳を傾けるどころか返って襟を掴み、駐在所の外につまみ出した。

「本当なんだよ！ウソじゃないんだ！」

「勝一！いい加減にせんと本当に怒るぞ。叔父さんにも言わなくちやいけなくなる。さあそんなことにならないうちにさっさと帰れ。」

大島は取り付く島もなく勝一を追いつ出した。しかしその事が後になつて大変な騒ぎになろうとは2人とも想像すらできなかったのだ。

## 第18話

神社に戻って来た2人を一子が待っていた。また勝一がいなくなったのだと言う。しかし絹代の反応はいま一つはつきりしない。いつもならすぐ一緒になって探してくれるのに今日は何故かおかしい。どうしたのかと尋ねると、絹代は良に目配せをした。

「実は・・・ビルがいなくなったんだ。」

「え？あの人？でもあの人ケガしてるじゃない。あんな身体でどこに行っただって言うの？」

「恐らくは・・・自分の存在を知られなくなっただろう。だから俺達に会った後すぐ姿を消した・・・」

「でも・・・どこへ？」

「大丈夫。ビルはちゃんと自分のいるべき場所へ戻ったよ。」

綾子にその後のウィリアムの消息を聞いていた良は2人にその事実を説明した。

「そう・・・じゃ、ビルは助かったのね。・・・良かった。」

ホツと胸を撫で下ろす2人。ところが次の2人の言葉に良は啞然とした。

「あやこって誰？良さんとどういう関係？」

女の子は1つの問題が解決するとまた新しい疑問が湧くものらしい。しかし・・・困った・・・今までは綾子との関係を聞かれても単なる幼馴染みと言えば良かった。実際良は以前、綾子意外の女性との結婚を考えたことがあった。だが結局別れた。最後の決め手となるものがなかったのだ。ところが今、この時代にやって来て改めて自分と彼女との関係を考えてみると、単なる幼馴染み以上であったことに気付かされた。それを気付かせてくれたのが一子と絹代の素朴な疑問だった。

「どうなの？」

2人はまた口を揃えた。

「単なる幼馴染みさ。」

良はいつも口にするセリフをいつもの口調で言った。つもりだった。「ウソ。今の言い方は単なる幼馴染みという感じじゃなかったわ。恋人。そうでしょう？それも結婚間近かの。キヤー！！」  
加えて何故か女の子というものはいつの世も想像力はたくましく出来ているようだ。

「オレが学校で習った歴史のイメージと今の君達とはかなりギャップがあるね。」

話題を変えるつもりはなかったが、ふと気になって良は言った。

「いめーじ？ぎゃつぷ？どういう意味？それって敵国語でしょう？ダメよ。そんな言葉使っちゃ。使ったら駐在さんに連行されるわよ。駐在さんならまだいいけど、憲兵に捕まったらスパイと見なされて拷問に掛けられるんですって。だから気をつけないといけないわ。いい？」  
と言っても、この島には憲兵なんていないけどね。」

一子と絹代にかかったらどっちが年上か判らなくなりそうだ。

「でも、その意味はなに？」

「イメージは印象。ギャップは相違。つまり違いだね。オレの受けた授業では戦時下の日本は娯楽はもちろん、恋愛沙汰もご法度だった。欲しがりません、勝つまでは。の精神が根付いていたというものだったんだけど、実際は違うんだね。」

「うふふふ。いやだわ。確かに表向きはそうだけど。ねえ。」

意味深長な笑いをする2人。

「つまり。本音と建前は違うつて大昔から決まってるじゃないの。」

ねえ！

「あはははは！なるほどね！ってことはオレらとあんまり変わらないってことか！」

「良さんの言っている意味が判らないけど、つまりそういうことなのよ。ねえ！」

「じゃさ、聞くけど。君達は好きな歌手とか俳優はいるの？」

「私は断然長谷部 一夫！」

名前を口にしただけでうつとりする一子。

「私は何て言ったって上杉健よ。」

同様に絹代の目もうつとりする。

「ハセベカズオって誰？でも上杉健は知ってるよ。加藤雄一の父親だろ？」

「カトウユウイチ？知らないわ。それよりも長谷部一夫を知らないなんて変よ。あんなにステキな人なのにい。」

「仕方ないだろ。オレらはせいぜい加藤雄一世代なんだから。そう  
だ。加藤雄一の歌を歌ってあげるよ。・・・そうだな。・・・うん、  
やっぱり加藤雄一といえはやっぱりこれしかないな。曲名は“君の  
ために捧げる歌” いい？・・・あれ？どうしたの。一子ちゃん  
顔が赤いよ。」

「だって・・・そんな歌詞。恥ずかしくて聴いてられないんだもの。」

外見もおとなしそうな一子はやはり内面もそうらし。巫女なんてやっていて、いかにも私は何も知りません顔の絹代の方がはるかに進んでいるようだ。

「ああそうか。ごめん、ごめん。やっぱり君達にはまだ無理のようだね。」

「良さん。その歌であやこさんに結婚を申し込んだのね？そうなんでしょう？」

ヤバッ！話が戻ってしまった。そう思った時には遅かった。結局2人の追及を免れることができなくなっていた。

「仕方ないな・・・どうしてもってなら話すけど・・・オレと彼女は本当にそういう仲じゃなかったんだ。単なる幼馴染み。家が近くてあいつの両親が早く亡くなったからオレン家で後見人みたいなことをしていたんだ。ただそれだけさ。」

「でも　今は違う。そうでしょう？」

絹代は勘が鋭い。やはり巫女という特殊な能力を持った賜物か。

「ああ。ここに來てまだ数日しか経っていないのにあいつの存在が

日に日に大きくなっていくんだ。もし帰ることができたならその時は君達の希望通り、はつきりと自分の気持ちを伝えるよ。でもまず帰ることが出来るかどうかが問題だ。」

最後の言葉は2人の胸にやけに淋しそうに響いた。

## 第19話

翌日の月曜日。綾子は学校を休んだ。風邪を引いて熱があるという名目だ。しかし実際は良が勤める会社に辞表を出すためと、主のいないアパートを空<sup>から</sup>にしておくわけにはいかないのです、少しの間良のアパートに居を構えるための準備をするのである。但し、良の許可なく引越しをするわけにはいかないため、綾子は自分の荷物を半分だけ運び込んだ。いつまでになるかわからないが、良が戻って来たら自分が出て行けば済む事だし、それに戻って来た時に自分のいる場所に生活感があれば少しは安心するだろうと考えての決断だった。元々彼の部屋は生活できるような食器類等や家具は最低限しか置いていなかったため、綾子の荷物が入ってやっと人並みな部屋になった。

その夜。突然の退職願に驚いた結城がアパートに訪ねてきた。応対に出た綾子を見るなりびくくりしたような顔つきになったが、特に不思議がることもなく用件を切り出した。玄関先で話すのもどうかと中に招き入れると更に驚いたようだった。

「あ・ああ。そういう事になったんですね？僕もね、その方が良いと前から思ってたんですよ。何人かの女性と付き合ったけど、笹崎に合う女性は綾子さんしかないってね。そうですね。」

1人納得する結城。

「あの。結城さん？良ちゃんの事でいらしたんじゃない……」

「ああ！そうだった！一体どうしたんです？一昨日<sup>おとこい</sup>の今日でしょう。あいつから何か言ってきたんじゃないですか？」

「ええ。今は帰れない。会社に迷惑はかけられないから辞表を出してくれて言われて出して来たんです。課長さんもこれ以上無断で休むならそうしてもらおうと考えていたみたいで……丁度良かったんです。ここも良ちゃんが帰って来るまでの間、時々泊まりに来ようと思っただけで、帰って来たら元に戻ります。」

「え？そんな面倒なことしないでこのままずっといればいいじゃないですか。」

「それじゃケジメがつかないでしょう。私達は単なる幼馴染みというだけですから。」

「そんな。あいつ気付いていないんですよ。綾子さんの大切さを。けど、ホントの話、あいつ今どこにいるんですか？綾子さん知ってるんでしょう？どこなんです？オレ、行って連れ戻して来ますから。」

「ありがとうございます。結城さんにそう言っていたかと良ちゃんもきつと嬉しいと思います。」

突然綾子は何を思い出したのか涙声になった。

「あ、オレ何か悪い事言いましたか？綾子さんを泣かせるつもりなかったんだけど・・・困ったな。どうすればいいんだろう。」

オロオロする結城に綾子はあなたのせいではないと謝った。

「あ、いや。オレの方こそすんません。でもあいつ、どこに行っただろう。綾子さんが行けないならマジでオレ迎えに行きますから。」

「いいえ。誰も行くことのできない所なんです。多分この世で良ちゃんしか行けない・・・」

不思議なことを言う綾子に良を捜しに行くと思気込んでいた結城の動作が止まった。

「どういう意味です？」

「あ、ごめんなさい。今は私にも上手く説明できないんです。いづれ良ちゃんの口から説明してくれと思います。」

悲しそうな表情でそう言われては結城もそれ以上追及することが出来なくなつたようだ。

「そう・・・なんですか・・・じゃ何か判つたらすぐ知らせて下さい。これからもオレ、ヤツの友達ですから。」

「はい。ありがとうございます。」

結城の肩を落として帰る姿を見つめる綾子の顔はそれ以上に暗かつ

た。



## 第20話

この世に来てから数日後。そろそろ着ているものを洗濯したくなつた良は、絹代の父、正吉の服を拝借し自分の服を洗つた。もちろん洗濯板を使い、固形石鹼で洗うのである。それまで良は洗濯というものは洗濯機がやってくれるものだと思つていたので、いざ自分の手で洗うとなると全く勝手が分らなかつた。そこで一から絹代に教えてもらうことになつた。初めに衣服を濡らし、板にあてがい石鹼を擦りつけゴシゴシ洗う。一つ1つ丁寧に洗うのだ。昔の人は大変なことを普通にやっていたんだなあ。と率直な感想を口にする。と、絹代は普段通りの事をしているのにそんなに感心する良の方がおかしい、変だ。と言つた。

洗濯をしたことがないならお勝手仕事もしたことがないだろうと、絹代は面白がつて食事の支度も教えようとした。ところがそれは母、正枝のひと言であえなく撃沈してしまつた。台所に男を入れるとは何たること！というのである。そこで良は初めてお勝手<sup>〃</sup>台所であることを知つた。しかも台所は女の仕事場であり、男がみだりに立ち入つてはいけない場所だということも初めて知つた。現代「良が言うところの」では、男が家事一切をやり、女が外で仕事をする。所謂主夫も増えているのだ。その事を言うと、正枝は女の仕事放棄だ！と烈火の如く怒つた。助けてくれえ！とばかりに外に逃げると、プーンとなにやらクサイ臭いがする。正吉が木のバケツから何かを掬<sup>すく</sup>つて畑に撒いていた。正枝に怒鳴られ逃げてきた事も忘れ、その中味の正体を聞くと“こえ”だと正吉が教えてくれた。

「こえ？こえつて何ですか？それにクサイですね。何です？」

「本当にわからんのかね？一般的な言い方をすると、小便とフンだよ。こつやつて畑に撒いて肥料にする。君の世界でもやっているだろう？」

「うわっ！こんなもん肥料にならないでしょう！！肥料は化学肥料

ってオレの田舎でも昔から決まってる！！うわっ！くっさ！！」

小便とフンと聞いて良は3メートルくらい後ろに飛んでしまった。

その足元に正吉はわざとフンをばら撒いた。

「うっううっわ~~~~！！やめてくれ~~~~！！冗談じゃないよお！！全く！！」

尻尾を巻いて逃げ出す良の後ろからアハハハと高笑いする正吉の聲が聞こえた。

その笑い声がまるで合図だったかのように突然空襲警報が鳴った。慌てて防空頭巾を被り防空壕へ逃げ込む。正吉も持っていた長柄杓ひしゃくを投げ捨てて壕へ飛び込んだ。すると間もなく米軍の飛行機が姿を現し、バリバリという爆音と共に砲弾が放たれた。文字通りアッという間の出来事だった。

2時間後。空襲警報解除のサイレンが鳴り、壕から出た良はその惨状に体が凍りついた。逃げ遅れた島民が砲弾に当たりただの肉片と化していたのだ。この時代は一瞬の遅れが命取りになるのだ。ついさっきまでの長閑さのどかさは何だったのだろうと、改めて戦争の恐ろしさを痛感する良だった。後は肉片となった者の肉親と思われる年寄りがそれ（・・・）を胸に抱き締め大声で泣いていた。

## 第21話

偶然ラジオ放送を聴いていた駐在所の大島は突然大声を挙げた。  
「な・なんだとお！と・ときようがB29の焼夷弾にやられて壊滅したあ？！な・なんてこった！こりゃ村長さんに知らせにやあ！」  
手に触れた物を引っ掴むと大島は村長宅に駆け込んだ。

「そ・村長！今のラジオ放送を聴かれましたか！」

大島の怒鳴り声にやや落ち着きを欠いたような表情で村長の上村が奥から出てきた。その顔付きからやはり放送を聴いていた様子が窺えた。

「おお。大島か。あんたも聴いとったか！一体何がなんだかさっぱりわからん。ついこの間は特攻隊が華々しく活躍しと言ったばかりじゃというに。」

もちろんこの頃の一般庶民には、日本がミッドウエーでの敗戦に始まりガダルカナル島、サイパン島、レイテ島の主な南方の戦いに負け続け、その拳句ほとんどの兵士が名誉の戦死を遂げていたことは知らされていなかった。1945年の3月には沖縄本島に米軍が上陸。その後の戦いで兵士及び島民合わせて20万人超の人命が失われた。その後も米軍は勢力を増大させ、東京空襲を行なう中継基地として硫黄島を占領、兵士2万人が亡くなっていた。それゆえ上村や大島が仰天したのも無理はない。ところが大島が急に顔を強張らせ、何やら上村に耳打ちすると上村の顔付きが変わった。

「ここに連れて来るんだ！」

強い口調で命令すると、上村は屋敷の中へ引込んだ。至上命令を受けた大島は、来た道を転がるように取って帰った。

## 第22話

「誰に聞いたんじゃ！黙つとると子供だからと容赦せんぞ！」

「し・知らねえ！オレ、知らねえ！」

既に何杯もバケツの水を掛けられびしょ濡れになりながら勝一は叫んだ。

「聞けばお前は変な男を拾ったというじゃないか。あいつは敵国のスパイなんじゃないのか！」

村長に良いところを見せようと必死の大島は特高並みに声を張り上げた。

「大島。そのくらいにしておけ。・・・いいか、勝一。さっきラジオ放送を聴いておったら昨日東京がB29の爆撃を受けて壊滅状態にあるそうなのじゃ。大島の話だとお前は数日前にその事を知っておったというじゃないか。悪いようにはせんからその話もう少し詳しく話しちゃくれんかの。お前が拾った男はどんな奴だ？」

柔和な顔付きでやんわりとした言い方とは裏腹に、蛇のような目つきでじつと見つめられ勝一の体がすくんだ。確かに良は変な男だ。おもちゃの箱を持っていて、これは電話だと言い張るし、8月に日本は負ける。東京も空襲に遭って被害を被る？言語道断！そんな事は日本国民にあるまじき言動だ。しかしそれでも勝一は良を売るようなことはできないと思った。一瞬でも友達だと思った人間を裏切るようなことはできなかった。増してその存在すら知られていないウィリアムの事を明かすことは絶対できない。そう自分に言い聞かせた。

そのかたくなな表情に上村は大島に向かって顎をしゃくった。するとどこから出したのか、大島の右手には竹刀があり、勝一目がけて力の限り振り下ろした。

「ギャー！！！」

村長宅一杯に響き渡るかと思われるほどの勝一の叫び声。

「大丈夫だ。ここは特殊な加工が施されている部屋だからな。お前の声は一切外には漏れないんだよ。フフフフ。」

含み笑いをする上村に、さすがの大島も冷水を浴びせられたように背筋に悪寒が走った。しかし今更後には引けない。引くわけにはいかなかった。

再び上村が顎をしゃくった。大島の手は機械的に竹刀を振るった。洋服の上からでも背中中の皮膚が破け、血が滲んできたのがわかる。数発目には勝一の意識が遠のいた。それでも上村の責め苦はおさまらない。再びバケツの水を頭から浴びせた。一瞬勝一の意識は戻った。しかし大の大人でも耐えられそうにない拷問に、たかだか15歳の少年が耐えられる筈がない。それがわかると勝一をそのままに上村と大島は部屋を出た。そこは1つの部屋だと思われていたが、庭に建てられた土蔵だったのだ。

## 第23話

勤労奉仕を終えて帰宅した一子は、勝から勝一が巡査に連れて行かれたことを聞かされるとすぐその足で駐在所に走った。

大島巡査は丁度、外出から戻ったところのようで、濡れ手ぬぐいで顔を拭いていた。

「駐在さん！」

一子の呼びかけに大島はギョツとしたように振り返った。

「な・なんだ！ ああ、一子か。な・なにか用か。」

「勝一が！勝一が何かしたんですか！」

「勝一？いや。何もしらんよ。」

「叔父さんが勝一が駐在さんに連れて行かれたと言ったんです！」

「あ？ ああ。確かに本官が勝一を連れて行つたよ。ただし、聞きたいことがあつただけで勝一は何も悪さはしらんが。あの子は・・・それよりも一子。お前たちが拾つたあの男は一体何者だ？」

「あの男？」

「ほれ。お前達が助けて神社に世話になつとるあの男だ。」

「良さんのこと？良さんがどうかしたの？」

良の名前を口にした途端、なぜか一子の顔は赤らんだ。しかし大島はそれに気付かず、親しげに一子の肩をポンポンと叩いた。

「おお！その良という男だ。聞けばおかしな事を言つとるとか。一体何を言つたんだ？」

「何つて別に・・・例えばどんな事？」

「例えば？・・・そうだな。例えば、東京が空襲に遭うとか。そういった事だよ。」

「え？！東京が？どうなつたの？どうなつたのよ！」

大島の胸元をグイグイ引っ張り食って掛かる一子に、さすがの大島もタジタジになった。

「か・かずこ！お前は女のくせに仮にも警察官の儂に何をするか！」

「あ！ご・ごめんなさい。で・でも。それって本当のことなの？」

「口答えしないでいい！お前は本官の質問にだけ答えればいいんだ！」

「は・はい。」

「今一度聞く。その良という男。変わったことを言わなかったか！」

「い・いいえ！何にも言いません！」

「何か隠しているのではあるまいな！」

「いいえ！どうして私が駐在さんに隠し事をしなくてはいけないんですか？」

「口答えをするなど言っただろう！本当に知らんのだな！」

「はい！」

「そうか。わかった。では帰れ。」

大島は手で追い払うように一子を外に出した。

「駐在さん！勝一は！」

「ここに連れて来る途中逃げられたわ。全くすばしっこい奴だ。一子。勝一が帰ったらすぐ連れて来るんだ。いいね！」

それを最後に大島はぴしゃりと扉を閉めた。一子は一人、駐在所の前に取り残された。

## 第24話

バシャ！バケツの水が掛けられ、勝一の目が薄っすらと開いた。寒さで体がブルブル震える。

「寒いかな勝一？この毛布を掛けてやってもいいんだぞ。ほうら。」

おっとと。その前にお前が知っていることを正直に言っただ。東京の空襲はいつ、誰に聞いたんだ？」

何度となく上村の口から繰り返される同じ詰問。だが僅かに残された勝一の正義感が、良とビル、2人の名を口にするな！と叫んでいた。

「し・・・しら・・・ねえ・・・」

「そうか。わかった。・・・おお！そうだった！1つ言っておくがね、私は昔、柔道をやっておつてね。得意技は関節外しだったんだよ。・・・言っている意味がわかるかね？わからんか？私がちよつとその気になればお前を肩輪にすることだってできるという意味だよ。・・・やってみようか？」

そう言つと上村はニコニコ笑いながらろうつじて正気を保っている勝一の右足を取りゆつくりと捻った。ギギギギ。ゴリッ！突然気味の悪い音が部屋中に響いた。

「ギャッ！！！」

その叫び声と共に勝一は一瞬目を大きく見開き、その直後再び気を失った。上村が手を離すと、勝一の右足がゴトンと大きな音を立てて床に落ちた。しかしその足は勝一の体とは全く別の、あらぬ方向を向いていた。

「まったく。素直に吐けばこんなことにならずに済んだものを。手間を取らせおつて。・・・まあ、仕方がない。明日大島に始末させよう。」

いまいましそうに呟きながらペツとつばを吐き、何事もなかったように上村は土蔵を後にした。



## 第25話

翌朝早く。上村から使いの者が極秘で大島のもとを訪れ、至急村長宅に来るように告げた。何だろうと思いつつ大島は身近なところにあつた服を着て村長宅の門をくぐった。

上村は大様に構えていたが大島の姿を見ると小走りに近寄ってきた。そして大島の耳にコソコソと何か囁くと自分はサッサと中へ入ってしまった。その後は顔を見せることはなかった。

一方重大な使命を科せられた大島は、がつくりと肩を落とした。しかし村長の命令は天の声と同じこと・・・重い足を引きずるようにあの土蔵の扉を開け、一步足を踏み入れると腰を抜かすほどに驚いた。勝一の体は九の字に曲がつていた・・・にもかかわらず右足が全く逆の方向を向いていたからだ。しかも正氣に戻っていた勝一は痛さの余り、顔が腫れるほど泣いていたのだ。泣くといつても声も出ない状態のまま、ただ涙が顔中を濡らしていたと表現した方が合っていた。その光景を見た大島は勝一が不憫でならなくなった。上村の命令とは、土蔵の中にあるモノを人知れず始末しろ。というものだった。しかし小さい頃から知っている勝一の哀れな姿に大島の心は乱れた。そつと抱き起こし、背中におぶって誰にも見咎められないように村長宅を出た。だが、誰かが見ていたとしても、上村の家で起こった出来事に口を出すような者などいるはずもなかった。

「勝一。おっちゃんが悪かった。堪忍。堪忍な。」

お経のように呟きながら大島は海辺に向かった。公に助けることはできないため、ひとまず海辺の松林に勝一を隠し、一子を呼ぼうと考えたのだ。

「勝一。ここで待つてろ。今すぐ姉ちゃんを呼んで来るからな！」  
泣きながら林の中に勝一の体を横たえると大島は何度も振り返りながら去って行った。

辺りが元の静けさを取り戻した頃。勝一のいるところから少し離れた場所に2つの人影がぬっと現われた。周囲に目を配り、小声で何やら話しながら勝一に近づいた。1人が勝一の体をそっと抱き起こすと耳元に何か囁いた。微かに目を開けた勝一の瞳がその姿を捉えると、どこにそんな力が残っていたのかと驚くほど強い力でその腕を跳ね除けた。

「お・お・おまえは！」

必死に抵抗する勝一を2人は楽々と抑え、大きな布袋に押し込むと、再び周囲を見渡しながらかどこへともなく消え去った。

それから30分後。大島からの知らせを受けた一子がこっそり指示された場所に来た頃には、呼べど叫べど勝一の姿が現れる事はなかった。

## 第26話

「お待たせいたしました。村長さんが直々に神社にいらっしゃるとは一体どんなご用件でしょう。」

「いや、神主さん。用というのは他でもない。お宅で世話をしている男の件なんじやが。・・・ありや一体何者なんだね？どこの馬の骨なんだ？」

思いがけず上村の訪問を受け正吉は戸惑った。今まで直接上村が神社を訪ねて来たことなどなかったからだ。おまけにその用件というのが良のことだったので更に驚いた。

「は？ああ、良さんのことですか。あの人は馬の骨なんかじゃありませんよ。私の友人の息子さんでね、東京から疎開して来たんです。なんでも赤紙が来て入隊する直前にここに異常が見つかって免除になったそうなんです。しかし親としても華々しく送り出した手前、隣近所に顔向けできないということで、空気のいいこの島で養生がてら時を稼がせて欲しいと頼まれてうちで預かることにしたんです。それが何か？」

正吉は自分の胸に手を当てて良が肺病であるらしいことを暗にほめかした。当時結核はまだ不治の病であり、一旦罹患するとあとは死ぬのを待つばかり。と思われていた。しかも他人に伝染するのだから尚更始末が悪い。それを聞いた上村の態度が極端に軟化した。

「そ・そうか。あんたも大変じゃな。病氣持ちの息子を預からにやならんとは。」

「こんな時代ですからね。出来る事は何でもやりますよ。特に友人の頼みとあらばね。それに私の仕事は神に仕えることですから、どんな人にも平等に接するのが当たり前です。何とも思っておりませんよ。」

「難儀なことじゃな。しかしその男がもし何かしようとしたならすぐ知らせて欲しい。宜しいかな？」

「何か、と言いますと？」

「何かは何かだ！分ったな！」

じろりと睨みつけ上村は出されたお茶に手も付けず、肩をいからせて帰って行った。

## 第27話

勝一が行方不明になってから1週間が経った。その間、一子は絹代と共にいつB29が襲ってくるかもしれない恐怖の中、海辺の松林周辺をしらみつぶしに捜し歩いた。しかしその行方は杳としてわからなかった。

更に1週間が経ち、何かにとり憑かれたようにただ1人の人を捜し求めて歩く一子の姿は、村人の目には戦時下の中であってさえ異様な光景に映っていた。事実、村人の近くを通るときの一子は何やらブツブツひとり言を言っていたし、目が合うと“勝一！帰って来たんだね！”と叫び、誰彼構わず引っぱって連れて行こうとしていた。決して暴れるわけではないが、これではいつどうなるかわからない。と村人の相談を受けた上村は、叔父の勝と図って落ち着くまで彼女の身柄を村長宅で預かることにした。一子が入れられたのは勝一が監禁されていたあの土蔵だったが、その後一子を見た者は誰一人いなかった。

良が姿を消してから1ヶ月が経った頃。綾子が良の部屋を掃除していると、ひょっこり良の母、京子が訪ねてきた。

「お・おばさん！どうして？」

事情を知らせていなかったことに気付いた綾子は必要以上に動揺した。

「あら。綾ちゃん。来ちゃいけなかった？」

「い・いえ。」

益々動揺する綾子。

「良は？出かけてるの？」

京子の声はいつも屈託がない。

「は・はい。」

「どうしたの？顔色悪いわよ。」

「い・いえ。何でもありません。それよりどうしたんですか？何か急用でも？」

「急用ってわけじゃないんだけど。こっちに来る用事があったからついでに寄ってみたのよ。それにしても綾ちゃん、いつも掃除してくれてるの？」

「い・いいえ。いつもってわけじゃないんです。週に一度くらいです。あとは良ちゃんが自分でやっているみたいです。」

「あの子が？あの子にやらせたら片付けるどころか逆にゴミだらけになるわよ。あ！もしかしたら炊事とか洗濯もやらせてるの？」

「はい・・・ついからですから。」

「んまあ！全くとんでもない子ね！綾ちゃん迷惑かけてごめんなさいね。会ったらキツク言っておくわ。このままじゃ綾ちゃん一生お嫁に行けなくなるわよ。あの子も早くいい人見つけて結婚して欲しいわ。」

京子の最後の言葉は綾子の胸にグサリと響いた。京子は暗に綾子は良の嫁に相応しくない、いわば眼中にないということを入めかしていたのだ。まあ仕方ない、と綾子は思い直した。自分は両親を早くに亡くし、笹崎家の世話になっていたのだ。そんな娘を嫁に貰う道理がない。いずれにしても良と自分の間柄は幼馴染という域を出ていないのだ。そんな希望を持つのが変なのだ。綾子は小さくため息をつく、さり気なく話題を変えた。

「ところでおばさん。鼓島ってご存知ですか？」

「つつみじま？ さあ。聞いたことがあるようなないような・・・で、そのつつみじまがどうかしたの？」

「良ちゃん、今そこに行ってるんです。」

「あら！出張だったの？それならそうと早く言ってくれば良かったのに。 あら！もうこんな時間！本当はね、婦人会の人達とこれからはとバスに乗ってニューハーフショーを見に行くのよッ！東京魅惑のナイトなんとかってコースなの！お互いお父さん達には内

緒なのよ！じゃあねっ！」

京子は綾子が出したお茶に目もくれず、嵐の如く去って行った。時間になると10分程度の出来事だったが、ルンルン気分の京子の後姿を見送った後、誰に憚ることなく綾子は大きなため息をついた。

## 第28話

「最近一子ちゃんの姿を見かけないけどどうかしたの？」

正吉が尊重についた善意のウソが原因で、外を自由に歩けなくなつた良が心配そうに絹代に聞いた。

「そうなのよ。私も一子ちゃんの家に行つて叔父さんに聞いたんだけど、勝一君がいなくなつてから一子ちゃん、少し変になつていたの。それで村長さんの紹介でどこかの療養所に入れられたらしいわ。叔父さんもその名前は知らないと言つてたわ。でも私、叔父さんウソついていと思うのよ。私のカンがそう言つてるの。一子ちゃんはまだ多分、座敷牢のような所に入れられてる！そう思うわ。でもあの家はそんなに大きくないからどこか違う所ね。」

「どこかつて？」

「はあ。それが分からないから問題なんだわ。ねえ良さんはどう思う？」

「うーん。そうだなあ。オレには君のような優れた感覚はないから当てずっぽうで言うしかないけど。オレも叔父さんがクサイと思うよ。」

「くさい？そうねえ。叔父さんお風呂に入つてないから確かに臭うけど・・・どうして臭いつて分るの？」

「ハハハハハ。くさいつていうのはそういう意味じゃないよ。怪しいつていう意味さ。俺らの時代じゃ普通に使う言葉さ。」

「あら？そうなの。良さんの時代つていろんな言葉があるのね。私も行つてみたいな。」

夢見るような目つきで宙を見る絹代。

「きつと行けるよ。この戦争が終わつたら急速に日本は躍進する。10年の間に飛躍的な進歩を遂げるんだ。だから絶対に負けちゃダメだ。君の将来はこの戦争を無事乗り切るかどうかで決まってくる。」



先は見えてるんだ。分かるね？一子ちゃんと勝一は大丈夫だ。だから君もすっかり生き抜くんだ。いいね！」

良の激励の言葉に深く頷く絹代。

「ところで母屋にラジオはあるかい？」

「え？ラジオ？あると思うけど。それがどうかしたの？」

「今日本がどういう放送をしているか知りたいんだ。もう3月も終わりだろう。東京に爆弾が落とされてから半月が経った今、どんなふうに情報が流されているかを知りたい。もし良かったらここに持つて来てくれないか。ほら、オレは今動けないだろう。一応病人つてことになってるからさ。」

茶目っ気たっぷりにウインクしてみせる良。こんな表情を見たら綾子は悲しむに違いない。なぜなら良は綾子の前ではそんな顔を見せたことがなかったからだ。そのウインクに顔を赤らめる絹代。

「だ・ダメよ！そんな事。」

「え？何がダメなんだい？」

「で・電波が弱くつて。ウチはなかなか入らないのよ。・母屋でようやく聞ける程度なのよ。だからここでは無理だわ。」

「そうかあ。じゃ君が聞いて知らせてくれ。なるべく新しいニュースをね。」

「にゅーす？それはどういう意味？」

「ああごめん。報道ということさ。」

「報道ね。分ったわ。少し待ってて。」

絹代が出て行くと良は今にも泣き出しそうな空を見上げ、フーッと息を吐いた。一体オレはこの先どうなるんだろう。ふとそんな想いが脳裏をよぎった。

## 第29話

ジジジジ。真剣な顔付きでラジオの選局つまみをひねる絹代に正吉が声をかけた。

「どうしたんだい。お前が聞きたいような番組は何もやってないよ。」

「・・・・・・」

「絹代。耳がないのかい？」

「・・・・ごめんなさい。少し静かにしてもらえませんか。今重要な報道を聞こうと思ってるんです。」

「報道？今2時半だからその時間帯じゃないよ。それで何が知りたんだい？さっき聞いたので良ければ教えるよ。」

「え？本当ですか？・・・・すみません。お父さんが聞いたもので良いので教えてください。良さんが知りたがっているの。なるべく新しい内容のものをお願いします。」

「そうか。じゃ私から直接伝えよう。」

「え？ダメよ。私が頼まれたのだから私の口から言わなきゃいけないんです。」

「・・・・絹代。その事で言うておかねばならないことがある。いいから座りなさい。いいかね。良さんはいずれ自分の住む世界に帰る人だ。それがどこか私は知らない。だがここでないことは明らかだ。いくらお前があの人を好いても叶わぬことなんだよ。確かにお前の呼びかけに応じて来てくれた人だから、お前の言う通り私達はあの人を信じ行動しようと考えている。だがそれだけのことだ。いずれいなくなる人だ。深入りだけはしないでくれ。それに村の人達の目もある。神社の娘は得体の知れない男を引っ張り込んでいると噂になり始めているのをお前も聞いただろう。こんなご時世だ。みんなが飢えている時に、巫女のお前が人の口に上るような行いだけはしないで欲しい。分かるね。分かったならこれからはなるべく

離れに行くのは控えなさい。食事はお母さんが持つて行くから。いいね。」

思ってもみなかった父、正吉からの苦言に絹代は啞然となった。今まで全てにおいて理解のある父親だと思ってきた正吉が、友達の親と何ら変わらなかったことにショックを受けたのだ。おまけに私が良さんを好き？そんな事あるわけない・・・じゃ・・・ない？ 思い当たる節がいくつか脳裡に浮かんた。それに良はこのまますつとここにいるものだといつしか考えるようになっていたことも事実だ。良とのが村人達の噂になっていることは知っていた。といつても絹代は自分の両親だけはそんなことを気にするような低俗な人種だと思っていなかった。しかし世の中はそうではなかったのだ。大人は汚い！私はそんな大人にはなりたくない！だが、一家の当主である父親は絶対だ。絹代は泣きたくなくなる気持ちをぐっと抑え、自室に引き下がった。

### 第30話

「良さん。入っても宜しいかな？」

神妙な正吉の声。

「はい。どうぞ。」

サツと障子を開けて入る正吉の顔付きがいつもと違うように見えた。正吉は良が勧めた座布団に座るとすぐ用件を切り出した。

「絹代から聞きました。報道の何を知りたいのですか？」

「ああその事です。お父さんの様子から何を聞かれるのかとビクビクしましたよ。ええ、そうなんです。今日の戦況をラジオでどう報道しているのか知りたいと絹代ちゃんに頼みました。ラジオを貸してくれと頼んだら、ここは電波が弱いから無理だと言われたのでそうお願いしたんですが、それが何か？」

「そうでしたか。それであの子は必死になってラジオを聴いていたのか。・・・良さん。1つ言っておかねばならないことがあります。」

「な・なんですか？改まって。」

「絹代は巫女である以前に私のたった一人の子供です。その娘にあらぬ噂を立てられては困るのです。巫女とはいえこの神社を存続していくためには跡継ぎが必要です。婿の来てがなくなるようなことは極力避けなければならぬのです。」

良の目をじつと見つめる正吉だが、当の良にはその意味がさっぱり理解できない。

「おっしゃっている意味が分りませんが。」

「そうですか。ならば単刀直入に言います。これからは絹代が1人の時には娘に近づかないで貰いたい。村の人からあなたと娘がどうにかなっている。とあからさまな表現で言われました。あなたははずれ自分の場所に戻る人です。娘に変な期待を持たせないで欲しいのです。あなたがそういう類たぐいの人でないことはわかっています。し

かし村の人はそうは思わない。なるべく噂になるような事態は極力避けたいのです。解かって頂けるでしょうか？」

「……驚きました。お父さんから言われるまで僕はそんな事など考えた事もなかった。……わかりました。これから絹代ちゃんに用事がある時はお父さんかお母さんを通します。それなら良いですか？」

良は驚きに表情を隠せなかった。食料が無くても明日の命が分らなくても、人として穏やかに暮らせるこの時代が羨ましいと思い始めていたのに、今ほど自分の住んでいた21世紀が恋しいと感じずにはいられなかった。ああ、帰りたい！心底そう思った。だが……帰れないのだ。

その後、正吉がラジオから流れたニュースについて喋っていたが、良の頭の中には何一つ残らなかった。ただ大日本帝国は特攻隊の活躍により、勝って勝って勝ちまくる、と言っているのだけが耳に残った。

その夜から良は本当の病人のようになってしまった。食事にも手を付けず、部屋の中からつかえ棒をして布団を頭から被り、誰が声を掛けても返事さえしなくなった。

さすがの正吉も困り果て、絹代に何とかしてくれと頼んだ。ところが絹代が離れに行つて声を掛けてみても相変わらず部屋の中は静まり返ったままだ。こうなつた以上は良自ら部屋を出るまで静観するしかないという結論に達した。

### 第31話

守野家の人々がやきもきしながら時をすごすこと3日。ようやく良がフラフラと幽霊の如く離れから出てきた。良をちよつと年の離れた弟のように感じていた正枝は、飛びつくようにかたわらに寄りその体を支え、母屋に連れて来た。その光景を見た正吉も涙を流し喜んだ。

絹代は勤労奉仕から帰宅後、その知らせを聞くやすぐ良の元に駆けつけた。だが良の態度が以前と180度変わっていたことにひどく傷ついた。絹代に対して妙によそよそしいのだ。冷たいというのではなく、当たり障りのない会話しかない。という意味だ。笑顔なのだが以前とは違う。絹代はそう感じた。部屋に籠もった理由を聞いてもただ静かに微笑むだけ。仕方なく両親に聞いたが、やはり良はその理由を言わなかったらしい。そういうわけでその件に関して深く詮索することは止めようということになり、正吉以下、守野家の人々からは二度とその話題が出ることはなかった。

一旦起き上がる意思が働くと若い良はめきめきと体力を取り戻した。芋だけの食事ではあるが食えないよりはましだ。出された芋を毎回ペロリと平らげ、神社の仕事も手伝ったおかげで以前より筋肉が付いたように思えた。

そんなある日。良はふとあの祠ほらに足を向けた。散歩がてら行ってみることにしたのだ。

ギギギギ。相変わらず気味の悪い音だ。中に入ってみるとあの日のままの状態だ。ビルがいなくなったと絹代が知らせに来て一緒に来た時と全く同じだった。変わったのはホコリが積もったのと蜘蛛の巣がやたらに増えたことだろうか。何もないのを確認すると良は祠を出た。

そのとき草ぼうぼうの茂みの中から良を呼び声がした。初め空耳だ

ろうと気にしなかったが、何度も呼ばれているような気がしてふとあたりを見回すと、そこに1人の米兵が腰を低くして自分の方を見ていた。目を凝らして見ると顔に肉が付いて少し太ったような感じだが、紛れもなくそれはウィリアム・カーペンターその人だった。

「ビル？ビルじゃないか？！」

思わず日本語で言ってしまい、改めて英語で言い直した。

「リョウ！」

2人は1ヶ月ぶりの対面に我を忘れて抱き合った。

「一体どうしたんだ！心配したんだぞ！あんな書置きだけでいなくなるなんて！」

「ごめんさい。ワタシ、ワルイ事しまシタ。みなさんにシンパイかけてしまって・・・」

「そうだよ！　ってあれ？ビル。君、日本語が話せるのか？」

確かにビルは日本語を話した。カタコトではあるが立派な日本語だった。

「ハイ。あるシトにオシエてもらいました。そのシトの事でハナシ・アリマス。だからワタシずっとアナタがここ来るの、マツテました。イッショに来てクタサイ。」

ビルは良の返事も待たず、中腰のまま早足で歩き出した。つられて良も同じ姿勢で歩き出した。

それから30分後。ビルと良は周囲に注意を払い、身を隠しながら遠回りをして海岸に出た。ここで太陽が沈むのを待とうとビルが言った。村人に見つからないように身を潜め、良にも同じようにするよう付け加えた。

話し声が漏れるのを警戒し、ずっと無言のまま2人は暗くなるのをひたすら待った。やがて完全に陽が落ちると待っていたかのように一艘の小船が近づいてきて2人の前方に止まった。漕いでいたのはビルと同じ米兵だ。暗黙の了解でビルは良を促しその船に乗った。

スルスルと海面を滑るように船は沖に向かって進んでいく。時間的にどのくらい経ったのかわからないが突然船が止まった。する

と3人からかなり離れた場所の海面がムクムクと盛り上がり、真っ黒な潜水艦が浮き上がったのだ。あまりのことに良は言葉を失った。しかし2人の米兵は予定通りといった表情で少しづつその大きな物体に船を近づけた。

手が届く位まで近づくと、おもむろにハッチが開き、中からまた違った米兵が顔を出した。早くしろ、と言っていているようだ。3人は素早くそれに乗り換えた。船はどうなる？その質問にビルは小さな無線機を見せスイッチを押した。

「小型の時限爆弾です。10分くらいであの船は海に沈むでしょう。ですから気になさらないで。」

日本語の表現が難しいのかビルは英語で答えた。

「何だって！そんな簡単に・・・」

「大丈夫です。あなたを送り届ける船はまた充分にありますから。」「良が戻れない事を心配していると勘違いしたビルは安心させるように言った。

それから2人はどんどん奥へ進み、あるドアの前で止まった。どうしたんだ？と問いたげな表情をする良にビルは無言のままドアを軽くノックした。すると中から今にも消えそうな声で応答があった。

静かにドアを開けるビル。そのあとから続いた良は中の人物を見た刹那、全身に戦慄が走るのを感じた。



### 第32話

「か・かずこ・ちゃん？」

狭いベッドに寝かされ、体中包帯だらけの人物はあの一子だったのだ。一子も入って来たのが良だとわかると、傷だらけの身体を必死に起こし、両手を広げ近づいた良の胸にしがみつわんわん泣き出した。

「い・いたいこれは・・・」

「それは私から説明しましょう。」

良の後ろに控えていたビルが口を挟み、これまでのいきさつを話し始めた。

勝一 の消息が分らなくなり一時錯乱状態に陥った一子は、転地療養と称し村長宅に預けられた。まず最初に入れられたのは蔵のような部屋で、灯りも乏しくおよそ病人が落ち着けるような場所とは言い難いところだった。夢うつつの中で一子は誰かが中に入ってくるのを見たが、それが村長と駐在の大島だということに気付くまでかなりの時間を要した。

「村長・・・さん？ 駐在さんも。どうして？」

恐る恐る訊ねる一子に2人は薄ら笑いを浮かべた。

「お前は狂ったのだよ一子。だからね、ここから出て行ってもらわなきゃならん。いいね？」

「村長さん？ 私・狂ってなんかいません！ 勝一がいなくなってますと捜してて、それで・・・」

最後の言葉は涙で途切れた。

「勝一？ おお！ そうじゃな。で？ 見つかったのかな？」

そう言つて一子を見下ろす上村の目に、一子は冷水を浴びせられた気がした。思わず首を横に振る。

「そうかそうか。それは心配じゃろうて。」

言葉もおざなりで感情が全くこもっていない。

「一子。お前はやはりまだ直つとらんようだな。少し気合を入れてやらんといけんのぉ。大島？」

上村が大島に声をかけるとそれまで黙っていた大島が突然竹刀を振り翳した。問答無用である。

「ヒー！！」

一子の声が土蔵の中に響く。だが大島は機械仕掛けの人形の如く黙々と竹刀を振り下ろした。

「どうして！どうしてなの？」

一子は痛みに耐えられず、ボロボロ涙を流しながら切れ切れに叫んだ。

「どうしてだと？フン！まあいいわ。どうせ最後だ。教えてやろう。勝一はな、今のお前のようにこの大島に叩かれ骨を砕かれて死んだわ。」

その言葉に驚いたのは一子だけではなかった。上村は勝一の死の原因を作ったのは大島だと言い、悪行の全てを大島にひつかぶせてしまったのだ。大島にしてみれば村長という立場の人間から命令され取った行動が、最後の段階になってして全責任を負わされてしまった形になった。ああ！俺は何という馬鹿なことをしてしまったんだ！目の前が白くなって大島の巨体が柳の枝のように折れ曲がりそのまま倒れた。

「ええい！役立たずな男だ！」

上村は大島の手から竹刀をもぎ取り、その勢いのまま再度一子目がけて振り下ろした。ビシイ！！その音と共にグシャと鈍い音がして一子の身体が変形し崩れた。

「ふん！背骨が折れたか。柔やわな身体だ。オイ！大島。起きろ！起きてこのごみを捨てて来るんだ。全く身体ばかりでかくて使えん男だ。いずれお前も処分せにやいかな。オイ！起きろ！」

上村は足で大島の巨体を転がすと、薄っすら目を開けた大島に向かって命令した。

「どうせ用済みの娘だ。勝一と同じくお前が処分しろ。いいな！」  
上村は大島の返事も待たず土蔵を出て行った。一子は背中の痛み  
負けそうになりながらも、はつきりと上村が言った“勝一と同じく  
処分しろ”という言葉聞いた。勝一は殺されたのだ。それを認識  
した途端、一子の意識が遠のいた。

### 第33話

一子が気付いたのはこのベッドの上だった。体中包帯巻きにされおまけに背中が硬い板のようなもので固定されていたので全く身動きが取れない。不安がる一子にビルは日系アメリカ人の通訳をつけた。彼を通して自分と友人の2人で一子を助けた事。加えて勝一も同じように助け、別便でケガの治療のためにハワイに向かった事を伝えた。

「え？勝一が！じゃ勝一は無事なのか？」

思わず良はビルの話を遮った。

「はい。勝一は初め、私を見ると動けない身体を無理に動かし必死に反抗しました。しかし私達の力には勝てず、泣く泣く我々の船に乗りドクターの診察を受けたのです。でも船上での治療には限りがあります。そこで止む無く彼を先にハワイに送ることにしたのです。彼は捕虜になるくらいなら死ぬ、と泣き叫びましたがドクターに鎮静剤を注射され、眠った後船に乗せられハワイに向かったのです。

「そうか！そうだったのか！良かった！良かったなあ一子ちゃん！

！」

良の目からはうれし涙が溢れていた。一子もその事を思い出したのが同じように泣いている。ただ傷が痛むのか、時折顔をしかめている姿がたまらなく愛おしくなり、良は思わず一子を抱き締めていた。もちろん良は兄が妹をいつくしむような感覚で取った行動だったのだが、一子にとっては初めての出来事だったので、そのうるたえぶりとはただ事ではなかった。包帯で覆われていたため誰にも悟られなかったが、一子の身体は恥ずかしさと嬉しさで真っ赤になっていた。

### 第34話

「……リヨウ。話があります。」

ビルはチラッと一子を見ると、良に目配せをして先に立って部屋を出た。一子には聞かせたくない内容なのだろうと、良も静かに彼の後に続いた。普段誰も使用していない部屋に入り、鍵を掛けるとすぐビルは本題に入った。

「私達は任務が終わり次第本国へ帰ります。この戦争は近い将来連合軍の勝利で終わります。しかし戦争を終わらせるためにはきつかけが必要です。そのきつかけを遂行するのはもう少し先になります。でもその前に私達はある事をします。そこでリヨウ、君に頼みたいことがあるのです。一子は大丈夫です。このままハワイに連れて行き、勝一と合流させて治療に専念するよう取り計らいます。私がお願したいことは……」

そこで突然ビルは良の耳を引っ張り、一段と声のトーンを落としてある事を囁いた。その内容に良の顔色が見るうちに青ざめていった。次第に体中が震えだし、話がおわってもあまりの衝撃のため良はしばらくその場から動くことが出来なかった。

「……だから村の人達を君の手で救って欲しい。これは極秘事項だから本来ならそんな事をする必要はないんだが、私はキネヨに命を救われた。そのお礼がしたい。キネヨ1人を救えばいいのかもしれないが、それでは彼女が悲しむだろう。両親、友達も一緒だと気持ちが安らぐ。どうだろう。手を貸してくれないか？」

返事を請うように両肩にポンと手を置かれ、ハッと我に返る良。

「え？今何て？」

「手を貸して欲しいと言ったんだ。」

「手を貸すって何に？」

「君。今まで私の話を聞いていなかったのか？」

「聞いてって。あれ冗談だろ？あんな事本気にする奴なんかいるわ

けないじゃないか。オレをからかって楽しんでるんじゃないのか？」  
良の言葉にビル表情が一変した。それまでの柔和な顔が突如として軍人のそれになった。

「冗談だと！こんな事を冗談で言える人間がいたらお目にかかりたいものだ！手を貸すのか貸さないのか！2つに1つだ！どうする！」

「えっ。そ・それじゃさっきの話は本当なのか？本気でそんな事をやるのか！君たちは人の命を何だと思ってるんだ！」

「・・・私だって人間だ。できればそんなことはしたくない。しかしこれが現実であり、戦争なんだ。さっきの質問の答えをまだ聞いていないが、どうする？」

「どうするって・・・オレにそんな大それたことが出来ると思うのか。」

「出来る、出来ないは聞いていない。やって欲しいんだ。もし出来ないと言っのなら、君をここから出してやる事は出来ないということになる。」

「し・しかし・・・」

動揺する良にビルは更に詰め寄った。だが果たして1週間という短い時間で彼が言うような計画が成功するのだろうか・・・。

### 第35話

「笹崎の奴。どこに行っ たんでしょね。綾子さん、本当に知らないんスか？」

良がいなくなつてから頻繁に元同僚の結城がアパートに訪ねてくるようになった。初めは本当に良を心配しているのだろつといういろ相談に乗ってもらつていた綾子だったが、最近になつて良の安否を気遣うのは表向きで、本当は綾子自身に会いに来ているのではないかと感じてきた。それは別に良いのだが、時折必要以上に心配されると逆に困つてしまうことがあつた。本音を言えば、放つておいて！と叫びたい心境なのだ。しかし元々根が優しい綾子はそれも言えず、ただ悶々としていた。以前量を心配する余り爆発したことはあつたが、普段は決して他人に対して怒りの感情をぶつけたことのない彼女だった。結城に対してもただ静かに微笑むだけ。それをいいことに結城の訪問は回を増すごとに大胆になつていった。

「さあ。私にも分らないんです。」

何度となく繰り返される問答。

「・・・ところで綾子さん。何か困つていることはないですか？僕にできることがあればどんなことでもしますから、遠慮なく言つて下さい。」

「ありがとうございます。でも今のところ何もありませんわ。」

この問答しかりだ。

「そう簡単に言わず。ね？・・・んー。そうですね。例えばガスが漏れているとか、電気が切れているとか、そういったことでも構いませんよ。アレ？そういえば笹崎の奴、時々メール見てくれって言つてたな。ちよつといいですか？」

そう言いながら強引に中に入ろつとする結城を何とか阻止しようと前に立ちはだかる綾子。

「あ！でも大丈夫です。メールなら毎日確認していますから！」

その押し問答に隣の学生が何事か、と顔を出した。バツが悪くなつた結城はまたそそくさと帰って行った。ホツとする綾子にその学生（杉村というらしい）が、『あいつが来たらまた追い払ってあげるから声を掛けて下さい』と言ってくれた。



### 第36話

再び米軍の小船に乗せられて接岸した良は真つ暗な道を神社に向かつて走った。空襲のない星空を見上げ郷愁にひたりたい……。とてもそんな気分にはならなかった。ともかく急いでビルから聞いた恐ろしい計画を正吉達に知らせ、一刻も早く島から脱出させなければならぬのだ。

神社に駆け込むと正吉達が全員顔を揃えていて、血相を変えて飛び込んできた良を驚いた表情で見つめた。

「良さん！今までどこに行つてたの！ずっと捜していたんだから！」いつも冷静な絹代が泣きながら良に抱きついた。

「絹代！」

今回ばかりは正吉の怒声にも動じない。正枝がそつと肩に触れるとようやく絹代は良から離れた。

「おじさん！おばさん！絹代ちゃん！何も聞かずすぐこの島から脱出して下さい！いずれ大変なことが起きるんです！」

肩で息を吐きながら良は一気に捲し立てた。しかし突然訳も分らず島から脱出しろ、と言われて、はいそうですか。と素直に従う人間がどこにいるだろうか。

「良さん。今までどこに行つていたか、という絹代の問いにも答えずそんなことを言い出すとは一体どういう見だね？返答によつては今すぐ君がここから出て行かなくてはならないことになるよ。」

正吉の厳しい顔に少し落ち着きを取り戻した良。改めて呼吸を整えるとそれまでの経緯を語り始めた。

まず第一に、2月の中頃。1人の負傷した米兵を助け、しばらく匿っていたが、その男が突然理由も告げず消えてしまった事。ところが今日しばらくぶりにその場所に行つてみると、その米兵が自分を待っており、自分を伴い彼が乗船している潜水艦に連れて行か

れた事。そこで大怪我を負った一子に会った事。そこで勝一の情報も判明し、一子から間接的に聞いた村長と駐在の大島の2人が彼等に耐え難い屈辱と暴行を加え、そのせいで一子と勝一は生死を彷徨う羽目になった事。そして最後にその米兵からとんでもないことを打ち明けられた事を話した。

「え？ビルが？ビルが生きていたの？それから一子ちゃんと勝一君も！でも生死を彷徨うって一体どういう事なの！」

「一子ちゃんが途切れ途切れに説明したところでは、どういう理由かわからないんだけど、村長とお巡りさんが一子ちゃんを拷問したそうなんだ。そして半死半生の彼女を海辺に捨てたそうだ。同じように勝一も捨てられたらしい。そこをビルが助け、2人は治療のために別便でハワイに行くことになったそうだよ。それよりもビルが言った最後の話というのがね・・・広島と長崎に原子爆弾を落とす計画があり、その予行演習としてこの鼓島で同じような実験を行なうということなんだ。規模的には小さいものらしいが、威力はかなりのもので、もしかしたら島そのものが消滅するかもしれないんだ。ビルとしては自分を助けてくれた絹代ちゃんに恩返しをしないではいられない。だから実験を行なう前に島を脱出して欲しい。それに出来ることなら他の島民も一緒に行動してもらえると都合がいい、ということらしい。分ってくれた？オレが一刻を争うと言った意味が。」

良の切迫した訴えも3人にはあまり効果がなかった。ポカンとした表情で良を見ているのだ。それとも事が重大すぎて掌握しきれないのだろうか？

「・・・村長と駐在さんが・・・」

そうではなかった。正吉には島がなくなるかもしれないという事よりも、上村と大島の所業が信じられないのだった。

「おじさん！島がなくなるんですよっ！村長とか駐在とかいう段階ではないんですっ！」

良はみんなに事の重大さが充分伝わっていないのかと必死だった。

「え？ああ。島ね。・・・良さん。私達には島はあってもなくても同じなんだよ。見てくれ。これが何だか分るかね？」

そう言つて正吉が懷ふしから出したものは、赤い紙に包まれた白い粉だった。

「何ですか？これ。」

「青酸カリだよ。致死量のね。戦争が激化してきた際に軍から1人1包づつ配給になったのだよ。捕虜になるくらいならこれを啗あおつて死ぬという意味だ。だから島民は島から逃げ出すような者は1人もいないと私は信じているよ。たとえ本当に島が無くなるうともね。ただ私としては絹代たち若者だけは助けてやりたいと思うよ。私達は充分生きてきた。ここで死ぬことは悔いはない。良さん。絹代達だけでも救つてやつて欲しい。頼むよ。君に全てを任せる。以前絹代が言っていた君が救世主になるというのは多分この事なのだろう。君の話を聞いてそう思えてきたよ。」

がっちり良の手を握り、任せると落ち着き払つて言つた正吉の目には涙が光っていた。

「青酸カリ・・・」

歴史の時間で習っていたが、実物を目の前にし、更に躊躇なくそれを使うと言つた正吉に、戦争尾とは命を奪うだけでなく、その人の未来をも奪う憎むべきものだと思はされた。

「いやよ！私だけ逃げるなんて！」

突然絹代が立ち上がった。

「絹代。お父さんの命令だ。良さんと行きなさい。行つて日本の、いや鼓島の行く末を確かめなさい。いいね！」

それでも尚、いやいやをする絹代に正枝が静かに諭した。

「お母さんからもお願いするわ。十年後、二十年後の日本をお前の目でしっかり見て頂戴。私達はあの世からお前をいつも見守っているからね。いいわね？」

なかなか首を縦に振らない絹代に正吉が言つた。

「絹代。お前も巫女ならわかるだろう。私はこの神社を守らなければ

ばならない。神社を守るといことは、島そのものを守らねばならぬ、ということだ。その私が島が無くなるからと真つ先に逃げ出して良いものかどうか。本音を言つと私もお前や母さんと一緒に新天地へ行つて将来の日本がどうなるか見てみたいのだよ。だからその夢をお前に託すのだ。いずれあの世で逢つた時、お前が見た日本の将来を私達に教えておくれ。いいね？わかつてくれるね？」

父正吉の言葉にしづしづ頷く絹代。

「そうと決まつたらすぐ支度をしなさい。私達は村の主だつた人達に明日にでも相談してみる。しかし・・・村長と大島さんが・・・由々（ゆゆ）しきことだ。」

良が絹代達と別れ、離れに戻つた時、すでに外は白々と空け始めていた。

### 第37話

村長と駐在の大島が当てにならないと知った正吉は、自分の恩師であり元小学校校長宅を朝一番に訪れた。実験云々の話はあまりにも重大な事柄なので一旦後回しにし、まず一子と勝一の件に重点を置いて村長達の悪行を語った。もちろんそれには米兵の件も話さねばならなかったが。

元校長の白山は、一通り話しを聞くと彼等の所業については思い当たる節があると言った。

白山はこの時代の教育者としては変わり者として知られていた。天皇絶対主義者はないのである。尊敬する人は福沢諭吉とリンカーンであり、愛読書は学問のススメ。よって現存長やその他の皇国主義者達からは疎まれつまはじきの存在だった。しかもそれをあまり気にしないところも彼等からすれば面白くないようで、ことある毎に白山の教育方針に問題があると難癖をつけていた。

「あまり他人の悪口を言うのは本意ではないのだが。」  
そう前置きしてから、

「村長は20歳の頃、旅順の戦に加わった事があると言っておった。人が人を殺したり傷つけたりするのをイヤというほど見てきたから、もう二度とそういうものは見たくない。と私に言ったことがある。しかしね、そう言った彼の目つきはその行為そのものを楽しみ、悦に入っていたように見えたのだよ。旅順で何十人。203高地で何十人も露西亞人（ロシア人）を殺したと自慢げに話していたからね。だから君の言う事もあながち嘘とは思えんね。しかし証拠がない。仮にあつたとしても、村長と駐在の悪事を暴くなど今のご時世じゃムリだろう。私の話をまともに聞いてくれる者などこの島にはおらんし・・・じゃが、一子と勝一にしてみれば無念だっただろうな。その時のことを想うと僕は・・・。」

自ら語ったように今の情勢ではどうにも出来ないことへの悔しさと、

2人の姉弟の不憫さを思い涙する白山。村長達との確執を知っているだけに正吉もそれ以上のことは言えなくなってしまった。

「先生。……もう1つ……重大な話があります。」

「……?……重大?……何かね?一子と勝一の話よりも重大な話などあるものかね。」

「実は……島が……この鼓島が無くなるのです。あ、いやその可能性があると申し上げたほうがいいでしょうか。」

さすがの正吉も言いよどんだ。

「島が……無くなる?……一体どういうことだね?」

### 第38話

「先程申し上げました米兵からの情報なのですが、近々この島の海底において原子爆弾の実験が行なわれるそうです。その破壊力たるや、この島全体を吹き飛ばす位の威力があるとか。そこで被害をなるべく小さくしようとした彼、その米兵ですが、島民を1週間以内に脱出させるよう指示してきたのです。その話を聞いて私はすぐ先生のお顔を思い出しました。私1人の判断ではどうすることもできず、又、村長達の悪事を聞いてからは村長に相談することも叶わず、こうして先生のご意見を仰ぎに参じたのです。私はどうすれば良いのでしょうか？先生。」

この時正吉は白山に教えを請うていた頃の子供に戻っていた。

「正吉。今の話は真の話なのかね？」

白山も教壇に立っていた頃の教師に戻っている。

「はい！」

「うつむ・・・信じられん・・・事が・・・事が大きすぎる。本当の事を言えば島が蜂の巣をつついたような大混乱になる。されど言わねば誰も助からない。・・・お前ならどうする？最初に聞いたお前はどのようにと考えておるのじゃ？」

「私は・・・島と運命を共にしようとして・・・ご神体を守らねばならない立場にありますから。ですが娘だけは逃がしてやりたいと考えております。あの子は島の犠牲にさせたくありませんから。」

「そうか・・・お前は自決の道を選ぶのじゃな。・・・それなら私もそうしよう。生まれ育ったこの島と運命を共にできるのなら本望じゃ。・・・正吉。この話は島民に伏せておいたおいたほうが良いと私は思う。もし本当のことを言ったらお前だけではなく正枝や絹代、その良という青年も自決前に島の人達に殺されてしまうだろう。ここは静かに運命を受け入れる事じゃ。良いな？じゃが絹代とその青年は逃がしなさい。私はこの話を聞かなかったものとして命を運

命に委ねる。お前も帰っていつもと変わらぬよう過ごしなさい。わ  
かったね。」

白山に諭されると正吉も改めて事の重大さに慄おのき、ここは黙ってい  
た方が島民のため、とわが身を納得させ帰宅した。



### 第39話

正吉の口から白山との会話を聞いた良は、みすみす島の人達を見殺しにするのか！と正吉に食って掛かった。しかしパニックになった時、彼等に正吉達がなぶり殺しに遭うかもしれないという白山の言葉を聞くに及ぶとその怒りも急速に薄らいだ。

「私は死ぬのは怖くない。怖いのはむしろその状態になった時の島の人達だ。昨夜、ああは言ったものの、果たして何名の人が脱出せず運命を共にするだろうか。捕虜になるなら自決もするだろう。しかし島が無くなるなどという絵空事のような話を一体何人の人が信じるだろう。しかも島が無くなる程の爆破実験をされるとわかつたら・・・私はそれが恐ろしいのだよ。・・・真実は闇に葬り、私達の記憶からも消し去った方が良いのだ。とにかく絹代にはその真実を告げず、君1人の胸に収めここから一緒に逃げて欲しい。頼む！」

頼むと言われ、良は即答することができなかった。果たしてそれで良いのだろうか・・・その迷いが顔に表れたのか、正吉が更に付け加えた。

「君が悩むことはない。これが今の世の中なのだ。敵国の情報を受けたと知れたら即、スパイの嫌疑がかけられる。そんな汚名を着てまで長生きはしたくない。むしろ潔く、木っ端微塵に吹き飛んだほうがマシだ。」

2人とも押し黙ったままそれぞれの思いを胸に数分間が過ぎた。

その時ガラス窓が微かに動き、一片の紙切れが差し込まれた。正吉がそれに気付き窓を開けると、1人の兵士らしき男が走り去って行くのが見えた。その紙には短い英文がしたためられていた。それは良宛のビルからのメッセージだった。

『計画が変更になった。結構は明日。』

それだけで充分だった。実験が早まったので、早急に脱出しろちい

う意味である。

「おじさん！」

「頼む！絹代を！」

2人の会話もそれで充分だった。即刻正吉は作業所へ絹代を呼びに行き、良は身の回りの品物を取りに離れに戻った。

改めて部屋を見ると、感慨深いものがあつた。ここに来てから2ヶ月余り。いくら物のない時代でも住めば何かしらモノは増える。その中で一番大切にしたいもの。正枝が良のためにと縫ってくれた上着とズボン。それを真つ先に雑嚢に入れた。当初着ていた洋服は擦り切れてしまったし、携帯は電池がなくなった上にどこで落としたのか全く覚えていなかったが紛失してしまったのでそのままにした。誰かが見つけてもこの時代では使い物にならないからだ。とにかく準備万端整った。あとは絹代の帰りを待つばかりだ。

## 第40話

1時間後。理由も聞かされず連れ戻された絹代がブツブツ言いながら家の中に入ると、今度は良に急かされ着の身着のまま再び外へ連れ出された。これが両親との今生の別れとは知らず、絹代の口からは正吉に対する不満が爆発していた。

海岸に着くとおもむろに良は猫の鳴きまねをした。するとどこからともなく一艘の小船が現れた。

「さ！早く乗るんだ！」

そこで初めて事の次第に気付いた絹代。絶対イヤだ！と砂浜に座り込んだ。自分ひとりが助かるのはイヤだ、助かるのならみんな一緒に！というのである。しかし事は急を要するのだ。船を漕いで来たアレックスが“どうしたのか？”と不思議そうな目つきで良を見た。「絹代ちゃん。予定が変わったんだ。本当はオレだってみんなを助けたいよ。でも全てが変わったんだ。さあ！早く乗って！」

そう言つて良は嫌がる絹代を強引に船に乗せ、アレックスに船を出すよう指示した。

「良さん？良さんは乗らないの？一緒じゃないの？」

アレックスに手助けされ船に乗った絹代だったが、良が乗ろうとしないことに不安な声を上げた。

「オレは後の便で行くよ。だから心配しないで。安心して君は行くんだ。一子ちゃんに君の元気な顔を見せてやるんだ。いいね！オレが行く時までになるべく多くの人達を連れて来るよう努力してみるから！さあ！アレックス行ってくれ！」

その声と同時に絹代を乗せた船は沖へ向かって進み始めた。その姿が小さくなるまで良は手を振り続けた。これが絹代との本当の別れになるだろうと思うと、グツと腹の底からこみ上げるものがあつた。

## 第41話

雑嚢の中には大切なシャツとズボンが入っている事を確認し、時計を見ると既に午後3時を回っていた。あまり時間はない。さて、誰に声を掛けようか・・・考えあぐねた末、やはり一度神社に戻るという結論に達した。

再び神社に現れた良を見た正枝の驚き方があまりにも異常だったので、その理由を問いただすと、正吉が白山に呼ばれて出て行ったのだという。それだけなら何故正枝はこんなにいるたえるのだろう。そう思い更に問い詰めると、正吉は出て行く際隠し戸棚に厳重に保管されていた短銃を、自分に気付かれないように持ち出したらしいのだ。白山の呼び出し情を見てからの行動だから、きっとその手紙には何か良からぬ事が記載されていたに違いない、と正枝は泣き泣き付け加えた。白山宅までの道順を聞くと、良はわき目もふらず飛び出した。

白山邸で案内を請うと、出てきた年配の婦人が自分は白山の妻だが、先ほど正吉さんが尋ねて来て2人揃って出かけた、と答えた。その時の様子に何か変わったことはなかったか、と聞くと、特に変わった様子はなかったが、言われてみれば出て行く際に正吉さんが“すみません。奥様。先生をこんなことに巻き込んで”といったにく妙な面持ちで言っていた。今思い返すと変なことを言う正吉さんだな。と感じたとも言った。2人とも特にどこへ行くとは言わずに出かけたらしく、夫人も左程気に留めなかったとのことだった。矢継ぎ早にたたみかけた良の質問に段々と不安になってきたのか、夫人のミキ子は、

「何かあったのでしょうか？」  
と聞き返してきた。

「いや、何でもありません。それより奥さん。白山さんからの伝言

です。なるべく早く北の海岸へ行くように。所持品は風呂敷に着替えを2〜3枚。なるべく急いで！それじゃ！」

良は正吉の言った“事の真相は闇に葬り、絶対島民に知らせてはならない”という意味がようやく飲み込めた気がした。ミキ子と話してみても感じたのである。だから理由も告げず、ただ白山からの伝言だと称して夫人を逃がすことにした。

## 第42話

良は白山邸を出るとまず、駐在所へ向かった。大島に聞けば何かわかるかもしれないと考えたからだ。

ところが・・・あるうことか、既に大島は後方から袈裟懸けに切れ、口から血を泡のように吹き出し白目を剥いて事切れていた。正吉はピストルを所持していたが、刀は持っていなかったので直接手を下したのは白山だろうと判断した。なんてことだ・・・サイアクな事になってしまった・・・その無残な死体を見ているうちに良は腹の底からぐつと突き上げてくるものを押さえきれずその場で吐いてしまった。昨日から何も口にしていなかったせいで、出るものといっても黄色い水だけだったが、それでも何度も吐いた。

フラフラになりながら今度は村長宅に向かった。独身の大島とは異なり、村長宅で事を起こすのは大変だろうと想像したが、行ってみると何事もないようにすんなり中へ通された。書生の話では、校長と神主さんは40分ほど前に来て、今も村長と土蔵の中で話しているとのことだった。2人に用事があるからどうしても会わせてくれとしつこく頼むと、その書生はブツブツ文句を言いながらも良を土蔵に通した。非常用の鈴を鳴らすと中に聞こえる仕組みになっているらしかったが、何度鳴らしても応答がない。なにかあったのかと書生は取って返し、しばらくして合鍵を持ってきた。イライラしながら鍵を開け重い扉を押し開いて中を見た途端、彼はギャツと一声上げるとそのまま腰を抜かした。

## 第43話

続いて良も中を見た。その途端また吐いた。つられるように書生も吐いた。中は凄惨極まりない状態になっていた。

まず目に飛び込んだのが、上村の生首と、首から下の部分。それも半裸の状態で、刀で滅多切りにされ、更にピストルを数発打ち込まれた物体となったものだった。その傍にこめかみを撃って倒れている正吉と、割腹して果てた白山の遺体があった。良のひと声で正吉に戻った書生が慌てて家人を呼びに行った後、良は白山の手にしっかりと握られている紙を見つけた。それを自分のポケットにねじ込むと、誰かが戻って来る前に上村邸を逃げ出した。捕まってはあとあと困るからである。

途中白山邸に寄った。中はもぬけの殻で、ミキ子が良の言ったウソを信じ、待ち合わせの場所の海岸へ行った事が想像できた。こうなったら一刻も早く正枝を連れて海岸へ向かわねばならない。良は再び全速力で走った。

「おばさん！オレと一緒に行きましょう！」

靴を脱ぐのも面倒で、そのまま玄関から駆け上がり居間の障子を勢い良く開けた。そこには正枝が横たわっていた。あの赤い包みを手に握り締め、既に事切れた状態だった。ちゃぶ台の上には良宛の遺書が残されていた。

『正吉の後を追います。絹代を頼みます。』

たったそれだけだったが、正枝には夫が生きて帰らぬことがわかっていたようだった。

「ああ！！」

もう少し正枝のことを考えて行動していたら！それが悔やまれた。まさかこんな事態に陥るとは・・・だが悔やんでもばかりはいられない。上村の家から追っ手が来る前にここを去らなければ！

今度は慎重に守野家の勝手口から外へ出た。既に外は暗くなっ

ていたが良もこの生活に慣れてきたのか、多少暗闇でも灯り無しで歩けるようになっていた。向かうは北の海岸である。

あたりの様子を窺いながら目的地に着くと、指示したとおり、白山ミキ子が良を待っていた。

「良かった！来て下さったんですね！」

小声で話しかけるとミキ子は不安そうにあたりをキョロキョロ見回した。

「主人が参りませんが、どうかしたのでしょいか？」

「ご主人はあとから来られるそうです。先に奥様を逃がしてくれと頼まりました。」

「逃がす？一体どういう事ですか？」

「詳しい説明は後でします。・・・まずは。あれに乗って下さい。」

良が指し示す方向を見ると、小船が一艘いつの間にか現れていた。もちろん漕いでいるのはアレックスであつたが、上手く変装していたので近くから見ても日本人にしか見えない。

「え？これに乗るのですか？乗ってどこへ行くのです？わたくしが女だからと甘く見ないでください！」

さすが教育者の妻だけにミキ子は理にかなわないことはどんなに些細なことでも首を縦に振らない主義らしい。しかし今はそんな悠長なことを言っていられる状況ではない。その雰囲気を感じ、アレックスがミキ子の鳩尾に軽い一撃を当てた。ミキ子の身体は音もなく崩れ、アレックスの腕の中に納まった。彼は良に目配せをすると素早くミキ子を船に乗せ、引き続き良も乗るよう手招きした。

「ダメだ。オレは残る。ここにいなければオレは自分の場所に戻れない。アレックス、計画は何時に決行されるんだ？」

「夜明け前。」

「ならオレは最初にこの地を踏んだ地点に戻らなくてはならない。さあ行ってくれ！行つてその人を助けてやつてくれ！」

その切なる想いが通じたのか、アレックスは無言のまま船を漕ぎ出



した。このまま誰にも見咎められずに行ってくれ！空を見上げた良  
は、今宵が新月であったことに深く感謝した。

## 第44話

その場所にはあれから何度も行っていたので、暗闇の中でさえ楽に行く事ができた。唯一の気がかりは、上村家で夜を徹しての山狩りをするのではないか、という事だった。たとえ上村家の人々に見つからなかったとしても21世紀に戻るかどうかわからないのだ。しかし良はその瞬間に全てを賭けようと思った。草むらに身を潜め、じつと時が来るのを待つ。耳を澄ますと遠くで何やら騒いでいる声がした。おそらくは上村家の人達だろうが、幸いにもこちらに近づいてくる気配はなさそうだった。周囲には誰もいない。たった1人である。それを肌で感じた途端、どっと疲れが押し寄せ良はそのままの姿勢でウトウトし始めた。

ゴゴゴゴ！地鳴りのような震動が直接良の身体を刺激し、彼はハツとして目が覚めた。いつの間にかぐっすり寝込んでいたらしい。時計を見ると午前五時を少し回っていた。

（あの音は何だろう。B29の音にしてはちよつと違う感じがする。・・・もしかしたら・・・あれが？）

不幸にも彼の予感の的中した。次ははっきり身体で感じる音がして、南の海上が一気に盛り上がった。次の瞬間！真つ白な閃

光と共にドーンという大音響が島全体を襲い、たちまち噴煙が巻き上がった。間もなくあたり一面何も見えなくなった。のちに放射能を大量に含んだ雨が降ってきた。その雨は5日間続き、その後止んだ。ようやく太陽が顔を出し、あたりに春の日差しと元の静寂が戻り、全ては元通りになったはず・・・だった。しかし何か違った。・・・その何かとは、鼓島が島ごと跡形もなく消滅していたことだった。

## 第45話

「イテテテテ！何だよいたい！誰だ！こんな所にテーブルなんか置いた奴は！アレツ？ここは・・・えつ。もしかしたらオレの・・・部屋？え？え？戻って来たのか？」

良はあの閃光を見た瞬間、身体がフワツと宙に浮いたような感触を覚えた。それは初めて鼓島へ行ったときと同じ感じだった。だがその後のことは全く記憶になかった。気が付いたら自分の部屋のテーブルに頭をガツンとぶつけて転んでいたのだ。

「や・やった！やったぞ！ああ！なんて嬉しいんだ！こんなに嬉しいのは生まれて初めてだ！うおおおお！！」

ピョンピョン飛び跳ね、やった！を連発する。誰かに見られて変人扱いされても構わない。とにかく現代に戻って来れたんだ！

玄関のドアが開き、誰かが顔を覗かせた。

「だれ？だれかいるの？」

聞きなれた懐かしい声がした。

「綾子か！」

「えつ。誰？」

「オレだ！」

「え？良・・・ちゃん？まさか・・・本当に良ちゃんなの？」

勢い良くドアが開き、すでに泣き顔の綾子が良の身体に飛び込んだ。良は感激に震えながらも抱き締めた綾子の身体がこんなに小さかったのかと初めて認識した。絶対離すまい。良は心に誓った。

「心配・・・したのよ。」

「ああ。」

「本当なんだから・・・」

「ああ。」

「冗談じゃないのよ。」

「ああ。わかつてるよ。」

再会の喜びをじっくり味わった後、良は久方ぶりに風呂に入り、さっぱりした身体で綾子の手料理を食べた。それまでも好き嫌いのなかった良だが、あの時代を経験してからは何でもありがたく思え、出されたものは全部綺麗に平らげた。驚く綾子に食べたくても食べられない時代があつたんだよ。と答えた。

「良ちゃん。なんか・変わった。」

「何が？」

「だって前は私にこんなに優しくなかったもの。」

「え？そうか？同じだけだな。」

綾子に指摘されそう答えたものの、なるほどそうかもしれない、と思った。確かに以前は綾子と会話する際、“ああ”“うん”“違う”その程度の単語しか使っていなかったことを思い出した。（なるほどな。オレは変わった。）そう思った。

「ねえ。これどうするの？」

見ると綾子が手にしていたのは、良が帰ってくる際着ていた服と所持品の雑嚢である。服といってもぼろ雑巾となんら変わらない状態の布と化していたのだが、ついさきほどまでは立派な衣服だったのだ。

「あ、何か入ってる。・・・キャ！な・なにこれ？え？もしかして・・・血？」

そのポケットから出したのは白山が握っていたあの紙切れだった。あの時は無我夢中で白山の手からもぎ取り、自分のポケットにねじ込んだのだが、一体何が書いてあったのだろうか。綾子の手からその紙を受け取ると、血に染まった部分を破らないよう注意して開いた。

それは想像通り、白山の遺書だった。内容は、これから決行することが己れの数十年に渡って積もりに積もった上村への怨念と、巡査大島を含めた一子と勝一の復讐であることが記されていた。最後に大罪を犯すからには生きて帰る意思のないことが付け加えられてお

り、白山、正吉それぞれの名前が血文字で書かれていた。

「ああああ。」

良はその血判状ともいえる遺書を握り締め、綾子の目の前で泣いた。なすすべもなく、ただそつと良の肩に手を添える綾子。彼女は傷ついた良の心を慰める術を模索し、良の身体を抱き締めた。

## 第46話

翌日は日曜日だったので朝から部屋の掃除をしていると、例の如く結城が訪ねてきた。昨夜は良のことが心配で帰れなかったため、綾子はそのままアパートに泊まったわけだが、（当然寝所は別である）まさか9時前に結城が来るとは予想もしなかった2人だった。最近の結城の気持ちの中では良が不在であることが当たり前前で、綾子が制するのも聞かず強引に中へ入ろうとした彼の前に当の良が立ちはだかった。良にしてみれば友人が自分を心配して訪ねて来てくれたのか！と感激の行動だったのだが、結城にとっては下心があつての訪問である。突然の良の出現に驚き、綾子に向かって“あとでまた来ます”とひと言だけ言つて歸つてしまった。するとこれまた当然のように隣の住人が顔を出し、綾子に向かって“大丈夫ですか？”と声を掛ける。綾子も“大丈夫です。いつもありがとうございます。”と答える。何が何だかわからない良は、綾子を問い詰めた。初め答えを渋っていた彼女は、良の執拗なまでの詰問に事実を述べ始めた。

良がいなくなつて少し経つと、結城は良の安否を気遣いつつ自分にしつこく付きまといだした。いわゆるストーカー行為に出た。あまりのしつこさに隣の杉村という学生が結城が来たら追い払つてやると申し出てくれたのだ。良にしてみればその内容は寝耳に水の話だった。確かに綾子は美人で人一倍他人のことを思いやる優しい女だ。しかし自分の留守中に友人である男が綾子を狙ったとは到底信じがたかった。だがもし事実なら、言語道断！断じて許せることではない。さつそく真相を確かめようと結城の携帯に電話をかけたが、相手が良と知つてか指だし音は鳴れど結城は出ようとしなない。やはり綾子の話は本当なのか？更に確かめるべく隣の杉村を訪ねた。すると彼はあっさりとその事実を認め、逆に彼女をしつかり掴まえ、ておかないと大変なことになりますよ。と注意された。

「何て奴だ！今度会つたらただじゃおかねえ！」

部屋に戻るなり良の怒りが一気に爆発した。あまりの剣幕に綾子の方が面食らってしまった。

「どうしたの？変よ。今まで私のことなんて気にも留めなかったのに。ねえ、良ちゃん、変よ。おかしいわ。」

「綾子。オレと一緒になつてくれ！」

突然の言葉に綾子は自分の耳を疑った。

「え？　今、何て言ったの？良く聞こえなかったわ。」

「オレと一緒になつてくれって言っただ！2度も言わすな！」

「え？・・・そんな。そんなことつてあり？・・・だって今までずっと私のことなんか眼中になかったのに、急にどうしたって言っの！結城さんが私に付きまとったから惜しくなったのね？・・・ひどいわ！私は良ちゃんの所有物じゃないのよっ！」

「違う！オレは一子達に約束したんだ。元の世界に戻れたらお前と一緒になるつて。だから奴の件が無くてもオレはお前に申し込むつもりだった。あの時代に行ったからこそお前の大切さが身にしてみた。オレはずっとお前を見ていたように見ていなかった。あの時代に行つて初めて気づいたんだ。オレは小さい頃からお前だけを求めていたんだ。」

じつと綾子の目を見つめる良の瞳は真剣そのものだ。

「じゃ、今まで付き合ってきた女の人達は何だつて言うの？私は都合のいい女じゃないのよ！」

綾子もくじけそうになりながら涙声で精一杯の抗議をする。

「・・・あれは間違いだった。・・・今なら言える。オレはお前だけを愛しているんだと。お願いだ。結婚してくれ。そして子供をたくさん生んで欲しい。頼む！」

必死に懇願する姿に綾子の頑なな心が揺れた。彼女の20年近くの想いがやっ通じたのだ。思い返せば彼女は良一筋に幼稚園から現在まで生きてきた。いわば良以外の男は彼女にとって異性としての対象ではなかった、ということだ。その想いがようやく届いたのだ。

少くくらい焦らしても罪にはなるまい。しかし……心と口とは全く別ものらしい。

「……うん……」

涙でくしゃくしゃになった顔を両手で覆い何度も頷く綾子。

「綾子！」

しっかりと抱き合う人。良の眼前に一子と絹代の笑顔が見えたような気がした。



## 第47話

その後。話はトントン拍子に進み・・・に見えたが、実際そう上手くはいかなかった。早速田舎の両親に連絡し2人が結婚する旨を報告すると、父母はもろ手を挙げて喜んだ。京子に至っては

『あたしは絶対そうなると思っていたのよオ』

などと言う始末。いつぞや上京した際に言ったことなどすっかり忘れていた様子だった。式はいつにする？とか、披露宴はこっちとそっちの両方でやらなくちゃね！とか、果ては式の日取りはこっちで決めるわね。と勝手にまくし立て一方的に電話を切ってしまった。

問題は良自身にあった。帰ってきてから2、3日は平穩無事だったのだが、アパートの近くで道路工事が始まった途端、その音に極度に怯え、パトカーのサイレンが鳴ったとき等は、空襲警報だ！と座布団を頭から被り、押入れに隠れる始末。ついには夜中に突然飛び起きてところ構わず吐くようになった。一緒に住むのは時期尚早と、一旦綾子は荷物を全部自分のアパートに引き払おうとしたのだが、朝、良を訪ねる度に吐又物が散乱しているのを見て彼の身体が心配になり、アパートを全部引き払って良の部屋に引っ越した。

その夜から綾子は、良が布団に入り寝入ったかと思った頃、突然うなされながら飛び起き、その場で吐くのを何度も見るようになった。体中びっしょり汗をかき、何かを追い払うように両手で宙を掻き、ぶるぶる震えながら怯えるのだ。そうかと思えば、突然嬌声を上げる。こんなことが何日も続いて隣近所から苦情が来ないのが不思議なくらいだ。これではどんな強靱な肉体の持ち主でも参ってしまうに違いない。引っ越してから1週間目。堪りかねた綾子は夜が明けるのを待って、朝一番に良を病院に連れて行った。

## 第48話

1日がかかりで検査をしてもらったがどこにも異常は見られなかった。

「でも変なんです!」

真剣に訴えると医師はそこまで言うならと心療内科を紹介してくれた。2人はその足で目指す病院へ向かった。

診療時間は既に終了していたが、受付で必死に頼み込むと、当直の医師佐伯が出て来て快く診てくれた。

診察後、綾子は別室に呼ばれ良の症状について説明を受けた。

「・・・端的に言いますと、笹崎さんは戦争の疑似体験をしたようです。その体験が心に深く刻み込まれ、工事の音やサイレンの音に敏感に反応して、爆撃されるとか人が目の前で無残な殺され方をしたとかいう悪夢に苛まれているのです。しかもその体験がとてモリアルなので始末が悪い。奥さん、何か思い当たることはありませんか?」

突然奥さんと呼ばれ、思わずあたりを見回す綾子だったが、自分のことだと分かると他人の前であるということも忘れ、人知れず赤面してしまった。だが相手が真剣な表情をしているので、綻んだ顔に無理に力を入れ引き締めてから答えた。

「はあ。あると言えばあるのですが。たぶん申し上げても信じていただけるかどうか・・・恐らく信じていただけないと思います。何しろ私でさえ未だに信じられないんですから。」

握っていたハンカチをもみくちゃにしながら綾子は言った。すると佐伯はハハハと軽快な笑い声を上げ、

「大丈夫ですよ。少々のことなら驚きませんから。それに笹崎さんの場合、通常では想像できないような体験をしたようですからね。」

「はあ・・・じゃ・・・先生は時間を遡ることは可能だと思われま

すか？」

「時間？・・・というと、つまり。アレですか？タイムマシンの存在ですか？」

「はあ。つまり・・・ええ、そういうことです。」

「ハア・・・私は100%現実主義ではありませんが、今の科学でそれは不可能でしょうね。・・・では、あなたは笹崎さんが実際タイムマシンに乗って過去に行ってきたとおっしゃるんですか？」

人を馬鹿にしたような表情が佐伯の顔に浮かんだ。

「でも！でも先生は通常の体験じゃないとおっしゃったじゃないですか！あの人は実際時間を遡り、終戦間際の鼓島という島に行つて来たんです！」

やはり信じてもらえないもどかしさに、綾子の目に大粒の涙が溢れ出した。

「確かに。普通ではないと言いました。でもそれは現在の話であつて、そういった非現実的なレベルの話じゃありませんよ。そうですね、例えば。少し前までイラクにいたとか、アフガニスタンに行つて来たとか、そういったことです。決してタイムマシン云々のことではなかったのですが・・・とにかく今の生活環境を変えた方が良いののは確かです。ご主人はいわゆる、外傷性ストレス症候群に陥つておられるので、現在お住まいのところからもつと別な場所へ引越されるのも1つの方法だと考えられます。このまま放つて置かれると心だけでなく身体まで蝕くさまれてしまいますよ。もし心当たりがあるのなら一度そちらへ転居されてみてはいかがですか？」

「転居。ですか？実家が東北なので心当たりはありますが・・・」

「それならなるべく早い方が良いでしょう。紹介状を書きますから、近くの病院に持つて行って継続的に治療を受けて下さい。・・・では待合室で少々お待ちください。ご主人も間もなく薬が切れて気が付かれると思いますから、一緒に帰っていただいて結構ですよ。」

看護師に付き添われ別室を出ると、良も同じように支えられて検査室を出て来た。

紹介状を受け取るまでの間、綾子はいろいろな事を考えた。転居しろとひと言で言われてもそう簡単にできるものではない。どうしたら良いものか・・・しかしまた今夜あの発作が起きるのではないかと想像しただけで綾子の神経はピリピリと音を立てて緊張してきた。どうすれば平穏な朝を迎えることができるのだろうか。

「笹崎さん。」

会計の人に呼ばれお金を支払おうとすると、佐伯医師が脇の診察室から顔を出し、綾子を手招きした。

「毎日あの状態では本人も大変でしょうが、あなたも相当疲れているように見えますね。民剤を処方しますから、寝る前に2錠、ご主人に服用させてあげて下さい。そしてなるべく早く環境を変えてください。良いですね。」

綾子の気持ちを察したのか、機転を利かせた佐伯が良のために睡眠薬を出してくれた。これがあれば久しぶりに良も綾子も安心して眠れるというものだ。ホッとして佐伯に礼を述べ会計を済ませると、玄関前で待機していたタクシーに乗り、2人はアパートに直行した。

## 第49話

薬が効いたのかその夜は悪夢に苛まれることなく、無事朝を迎えることが出来た。綾子は学校があつたため、良のことが気がかりではあつたが時間通り登校した。その後、1人になった良を結城が訪ねてきた。

良は結城の顔を見た途端、ぐっと両手に力を込めた。ひと言でも発したら殴ってやろうと思つたからだ。しかしあまりにも結城が落胆している。そう見えてその手を緩めた。

「どうしたんだ、一体。まあ入れよ。」

日中は体調も良かったのでいつもと変わらぬ対応が出来た。

「何かあつたのか。おまえらしくないな。」

慣れぬ手つきでお茶を出し、話を切り出した。

「・・・笹崎。・・・オレ・・・お前に誤らなければならないことがあるんだ。」

結城の声は今にも消え入りそうなくらい小さかった。しかも異常なほど震えている。

「何だ。・・・綾子の事か?・・・まあ待て。・・・やつぱりそうか。オレも今度お前の顔を見たら2、3発ぶん殴ってやろうかと思つてたんだ。けど・・・やめた。お前のそんなシヨボくれた姿を見たらそんな気無くなつた。・・・でもお前、いつから綾子のことを?」

「・・・お前がいなくなつた後、いろいろな手を尽くして捜すうち彼女と接する機会が増えたる?それでいつの間にかそうなつてたんだ。」

「そう・・・か。それを聞いたら尚更殴れないな。全部オレのせいだもんな。悪かつたな。心配かけて。それから　　ありがとう。」

会社を辞めた後までオレのことを気にかけてくれて。そんなことしてくれるのはお前だけだもんな。本当に嬉しいよ。」

感謝の言葉と共に肩に手を掛けると、結城の身体は小刻みに震えて

いた。膝に置いた両手にポタポタと涙が落ちた。

「いいや。おまえに・・・そんなこと言ってもらえる資格なんか・・・俺にはない。だって・・・お前のいないのをいいことに泥棒猫のようなマネをして・・・俺って男は・・・友達の資格なんて・・・」

「そんなことない。それを言うならオレなんて人間として失格だ。助けられたはずの人間を助けられず、一人こんな所に逃げてしまっただから。」

「笹崎？・・・お前、何かあったのか？」

「・・・え？ああ。いや、何でもないよ。オレ自身の問題だ。・・・で？会社のほうはどうなんだ？上手くいってるのか？」

「ああ。可もなく不可も無くてとこさ。相変わらず課長は毎日小言の材料を見つけるのに奔走してるよ。」

「そうか。・・・お前も大変だな。まあ頑張れよ。オレも新しい仕事探すから。」

「ああ。何かあったら連絡してくれよ。俺、すっ飛んでくるから。」  
「ありがとう。期待して待ってるよ。お前がすっ飛んでくる姿をね。」

その後しばらくの間2人はいろいろ語り合った。殆どが会社にいたころの思い出だったが。そして結城は帰って行った。直後、それが合図だったかのように突然道路工事の音が聞こえてきた。と同時に落ち着いていたはずの発作が起きた。

## 第50話

夕飯の買い物をして綾子が帰宅すると、部屋の隅でガタガタ震えながらしゃがみこんでいる良の姿があった。

「良ちゃん！」

買ってきたものが床に散乱したが、そんなことはお構いなしで必死に良の身体を氣遣う綾子。

「綾子！」

良も綾子の姿を見て安心したのかその細い体にしがみついた。

「もう大丈夫よ。大丈夫だから・・・」

しばらくの間、子供をあやすように良の背中を撫でていると、ようやく落ち着いたのか良の呼吸が平常に戻った。それを確認し、綾子は良の身体をゆっくりと横たえた。そして静かに立ち上がり、ことさら元気な声で言った。

「さてと。私は夕ご飯の支度をするからね！良ちゃんはテレビでも見てて。すぐ食べられるようにするからねっ！」

床に散らかった品物を片付け、流し台の前に立った綾子はもうダメだと思った。これ以上ここにいたら良の身体は本当にダメになる。そう思った。田舎に帰ろう！ついに綾子は決心した。

夕飯を食べながら綾子は何気なくその話を切り出した。

「ねえ良ちゃん。一度、田舎に帰らない？おじさんやおばさん、おじいちゃんにも私達の事を報告したいし。ね？そうしましょう？」

発作で体力を使い、思考能力が低下していた良には綾子の言葉に異論を唱える気力さえないようだった。静かに首を縦に振ると、機械的に食べ物を口に運んだ。その姿に綾子は小さくため息をついた後、改めて気を取り直し、その日学校であったこと等を楽しそうに話して聞かせた。

## 第51話

明後日からゴールデンウィークが始まった。それを利用し、良と綾子は実家のあるG県へ出かけた。新幹線でG駅まで行き、バスで約2時間。山間やまあいの小さな村が2人の故郷だ。

すでに連絡しておいたので、良の父、新一がバス停まで迎えに来ていた。

「ただいま。」

「おかえり。疲れただろう。お前達が帰ってくるっていうんで叔父さんや叔母さんたちが朝早くから集まってきてるんだ。もう半分宴会状態だよ。」

新一はうんざりしたようにため息をついた。

「ホントですか？わあ、懐かしいわあ。ねえ？良ちゃん。小さい頃何かある度、親戚中集まって宴会みたいなことやってたわよね。．．ね？」

両親を早く亡くしている綾子にとって親戚といえるのは即ち、良の伯父、伯母であり、彼等の子ども達が従兄妹達だった。

口数の少ない良を気遣い綾子はことさら元気に振舞った。しかし両親にはまだ良が会社を辞めたことと、一種の心の病に冒されている事は知らせていなかった。

バス停から車で約6分。その間車窓から見える景色は2人が上京したときと全く変わっていなかった。田畑ばかりの風景だが、良の目には何故か真新しいものに映ったようだ。ふと小さく、『鼓島だ』と呟いた。もちろん新一も綾子も良の声は聞こえなかった。

家に着くと、何かあったのか異様に慌しい。どうしたのかと聞くと、おじいちゃんが急に倒れ、救急車で隣の病院に運ばれたのだという。すぐ3人は追いかけるように再び車に乗り込み指定された病院へ向かった。



## 第52話

病院に着き受け付けで病室案内を請い、部屋に行った3人はそのまま棒立ちになった。救急車で運ばれたというので生死の境を彷徨っている状態を想像していた彼等だったのだが、当の本人はケロリとしたもので、ベッドに起き上がりアイスクリームを頬張っていた。看護師に

『お孫さん夫婦が帰って来られるので庭の草刈をしていたところ、脱水症状を起こして倒れたんですよ。何も心配いりません。2、3日もすれば元通りになります。担当の先生があとで詳しい説明をしますからそれまでお待ちください。』とにっこり笑って事も無げに言われ、啞然とする3人。

「お義父さん！」

「じいちゃん！人騒がせなことしないでくれよ！」  
新一と良が同時に叫ぶ。

「いやあ悪い悪い。わしもな、まさか草刈をしていてこんな大事おおごとになるとは思ってもいねえがただよ。ワシが一番びっくりしただよ。すまん、すまん。」

「まったく！人を何だと思ってるんだ！」

良の怒りはなかなか収まらない。

「良ちゃん。おじいちゃんもなりたくなつたわけじゃないんだから、そのへんで許してあげて。」

たまりかねて仲裁に入った綾子の取り成しで良は不承不承黙った。

「おお！さすが綾ちゃんだ！今が良を尻に敷いでいんのがい？いやあ、良い事こつだ！ふおつふおつふおつ。」

百万の味方を得、調子に乗る年寄りに4人部屋ということも忘れ、再び新一と良の怒りが爆発した。

「お義父さん！」「じいちゃん！」

「うつせえなあ！こつちは今朝から何も食えないでイライラし

てるんだ！静かにしろよ！」

斜め向かいに寝ていた若者が2人を見て怒鳴った。

「すみません。ほらおじさんも良ちゃんも謝って。」

強引に頭を下げさせると、キラツと良の目の片隅に光が入った。その若者が手にしていたコンパクトミラーに太陽光線が反射して光ったのだ。次の瞬間、なりを潜めていた良の発作が起きた。今度の発作は今までのものとは比べ物にならない程すさまじいものだった。額や腕から一拳に脂汗が吹き出し、動物の咆哮のような叫び声を上げ、のた打ち回りながらあらゆるところに身体をぶつけた。その声を聞きつけた看護師が駆けつけ、良の身体を押さえつけようとしたがその暴れ方が激しく、連絡を受けた医師が3人がかりで鎮静剤を打ち、ようやく落ち着いていた。しかし気がついてまた暴れ出さないと限らないので、一旦身体をベッドに拘束した。その後、こうなりたいきさつを聞きたいと担当医の木村に新一と綾子はナースステーションに呼ばれた。ワシも行くと祖父の勝和まさかずも同行した。勝和と新一まさかずにしてみればこんなことは前代未聞。何が何だかわからない、見当もつかないと声を揃えた。そして綾子の番になった。彼女は言うべきかどうか迷った拳句、隠し通せるものではないと、それまでの経緯を話し出した。それでも恐らく100%信じてもらえないだろうと前置きすることは忘れなかった。

## 第53話

「私も全部把握しているわけじゃないんです。旅から帰って来てからの良ちゃんは、その間の出来事を一度も口にしたことがないし、私もあえて聞くことはしませんでした。話す時期が来たらこちらから言わなくても自分から話してくれるだろうと思ってましたから。」

そこで綾子は一呼吸おいた。

「・・・あれは2月の終わりでした。用事があつて私、良ちゃんに連絡を取ろうとしたんです。でも全然携帯が繋がらなくてイライラしていました。すると2日くらいしてから突然良ちゃんから電話があつたんです。今、鼓島という島にいる。その島についてどんな些細なことでもいいから調べてくれ。という内容でした。一体何なの？と理由を聞くとうとしました。けれど一方的に切られてしまった聞けなかったんです。それから私はその意味も解らず鼓島という馴染みのない名前の島について調べ始めました。手っ取り早いのはホームページで調べることだと思い、パソコンを開いて検索してみると、その島は終戦直前、海底火山の爆発で消滅したことがわかりました。ところがそこで情報が途切れてしまったのです。困った私は校長に相談しました。あ、予め言うのを忘れてましたけれど、私小学校の教師をしているんです。校長のご友人が地質学を専攻している、とのことでその先生を紹介していただき、その方から1冊の本を戴きました。著者はウィリアム・カーペンターという元・海軍兵士でした。日記と口述をもとに夫人が原稿を書き、書籍として出版したもので、その中に鼓島のことについての記述がありました。ところがその日記に『RYO』という名前の日本人が出てくるのです。彼についてはとても流暢な英語を話し、身長は自分より10CMは高い、すなわち178CMくらいだろうとのことでした。私はまさか、と自分の目を疑いました。それからまた数日後、良ちゃん

から連絡があつたからその事を話すと、それはオレのことで今オレはその鼓島にいる。そのウィリアムとは昨日会って話したと言つたんです。私は信じられませんでした。だって今こうして話している相手が60年前に消滅してしまつた島にいるなんてどうして信じられますか？最後に良ちゃんはいつ戻れるかわからないから、会社に退職届を出して欲しいと言いました。翌日私は良ちゃんの言う通り退職届を会社に出しに行きました。課長さんからこれ以上無断欠勤したら解雇扱いにするところだつた。と厭味を言われましたが、何とか穏便に辞める事ができました。

それから2ヶ月後のある朝、私は良ちゃんの部屋を掃除しようとしてみると、良ちゃんがまた何の前触れもなく戻っていました。私はもうただ驚いてしまつて・・・でも・・・2、3日してまたアパートに行つてみると、部屋中吐いたものが散乱していてももの凄い臭いがしていました。とりあえず掃除をしたのですが、また次の日も同じで・・・心配になつてその日からアパートに泊り込んでみると夜中にさっきのような発作が起きて、ものすごい声を上げたり暴れたり。決まつて最後は吐くんです。でも吐けば気持ちが悪く着くのか、その後は何事もなかつたように眠るんです。うわ言でB29とか空襲だとか、オレが悪かつたとか意味不明なことを言つて。そのたび汗をかくから何度も着替えをさせないといけなくて・・・これじゃいけないと思つて病院に連れて行つて検査をしてもらつたところ、外傷性ストレス症候群だから生活環境を変えた方がいい。つまり引つ越したほうが良いと言われました。それで連休を利用して一度田舎に帰つてみようと言つて誘つて連れて来たんです。

先生。良ちゃんは生の体験として戦火を潜り抜けて来たんです。今のままだと心身ともにおかしくなつてしまします。何とか助けてあげて下さい。お願いします。」

信じがたい話に3人はうまい言葉が見つからない。

「・・・僕は疲れたから部屋に戻るよ。」

そう言つた勝和の顔はなるほど青ざめている。すぐ看護師が傍に寄

り、身体を抱えるようにして病室に連れて行つた。

腕を組んで話を聞いていた木村は、綾子の目を見ながら言った。

「・・・話としては面白いですが、到底信じられないことです。ですが、あの発作を目の当たりにしたら100%ウソとは言い切れませんね。それにあなたの目は作り話をしているようには見えない。

ウソをついた人は目を見ると何となくわかるものです。でもあなたは違う。まあタイムトラベル云々は別として、笹崎さんが実体験として戦場にいたことはほぼ間違いはないでしょう。そのあたりから心のケアをしていかなくてもなりません。おじいさんの方はすぐ退院できると思いますが、お孫さんはしばらく入院してもらって様子をみることにしましょう。それでよろしいですね？」

綾子と新一の2人に異存があるはずはなかった。ナースステーションを出た2人は、良が寝ている病室に行き、拘束された姿を見て言葉交わすことなくただ泣いた。

## 第54話

帰宅した新一と綾子から良の入院を聞かされた母京子は、あたかもそれが綾子に責任があるかのように責め立てた。新一が庇ったせいでその怒りに拍車がかかり、金輪際綾子に笹崎家の敷居をまたがせないという始末だ。仕方なく綾子はその夜1人淋しく病院近くのホテルに部屋を取った。しかしその淋しさよりも良の身体のこと が心配で眠れぬ夜を明かした。

翌朝。あまり食欲はなかったが、食べなければ身体が持たないとホテル内のレストランでトーストとコーヒーを胃に流し込んでみると、新一が慌しく駆け込んできた。昨日の京子が取った非礼の侘びと、それを阻止できなかった自分の不甲斐なさを訴えたかったようだ。

「おじさん。もういいんです。おばさんの言う通り、私がつとちやんと良ちゃん健康管理をしていればあんな風にならなかったんじゃないかと思うから。私の方こそおじさんやおばさんに申し訳なくて。夕べあれから反省したんです。本当にごめんなさい。」

「何を言うんだね。悪いのは私だよ。みんな綾ちゃんに任せっきりにしてしまって。おばさんもね、あの後、私の説明を聞いて早とちりして綾ちゃんにとんでもないことを言ってしまったと反省してね。ホテルの玄関先まで一緒に来たんだけど、どうしても綾ちゃんの顔を見ることが出来ないって言ってね、外で綾ちゃんの許しが出るのを待つてるんだ。」

「えっ。おばさんが?!」

それを聞くと綾子は手に持っていたトーストの半切れを下に落とし た。しかしそれを拾おうともせず慌てて外に出た。

車の前でしょんぼり立っている京子の姿を見つけると、綾子は傍に駆け寄り「ごめんなさい!おばさん!」

そうひと言言っ たきり京子の胸にすがって泣いた。

「私の方こそ悪かったわ。ごめんね！何も知らずあんた1人を悪者にして。ごめんね！ごめんね！」  
その光景を傍らで見ていた新一はホッと胸を撫で下ろしていた。

## 第55話

そのまま病院へ直行した3人は木村医師を訪ねた。幸い木村は当直だったようで3人の訪問を快く受けた。木村の話では鎮静剤が効いたとみえて、昨晚の良は発作も起こらずぐっすりと眠ったようだった。朝一番の巡視の際には拘束も解かれ、朝食も何事もなかったように平らげていた。身体の調子も良好だということだった。

部屋に行くとなるほど木村の言ったとおり、顔色も良く3人を見ると「やあ！」と笑顔で迎えた。

「やあ！つて良。あんた！」

「ど・どうしたんだ。母さん。そんなに怒って。ハハア。父さんまた何かやらかしたろ。オレやだよ。いつもそのとばかり受けんのオレなんだからな。つてまたそのとばかりを受けるのは綾子なんだけどさ。で、どうしたのさ。そんなに慌てて。」

良の声には屈託がない。

「どうしたつてみんなあんたのせいじゃないの！あんたが入院したなんて聞いたもんだから、母さん、綾ちゃんの監督不行き届きだつて言っちゃったじゃないのよ！ホントにどうしてくれんのよ！全くホントにこの子はもう！」

涙で顔をくしゃくしゃにしながら泣き叫ぶ京子を優しく労わる綾子。

「綾子。お前あんまり母さんを甘やかすなよ。それなくても父さんは尻に敷かれてるんだからな。」

「それを言わんでくれよ。ま、まあそれはホントのことなんだけどな。はははは。」

新一の乾いた笑いは座を白けさせるには充分だった。

「それよりじいちゃんの具合はどうなんだ？オレ発作が起きてあの後のことは全くわからないんだ。」

「発作つて。じゃああんたは自分がそうなることを知ってるの？」

「ああ。知ってる。それも鼓島から帰って来てからだ。・・・」



あれは悲惨な体験だった。」「  
思い起こすのが辛いのか良はポツリポツリ搾り出すように話し出した。

去年の九月頃、初めてあの声が聞こえた。というところから始まり、鼓島という名前からパソコンで検索しようとしたところディスプレイから突然光が出て自分を包み込み、気付いてみると60年前の鼓島にいた事。そこで知り合った一子、勝一、絹代という3人の少年少女、ウィリアムとの出会いから村長、駐在所巡査の悪事。そして戦時下であるという緊迫感の中でも肌で感じたのどかな風景人情感、優しさ。最後に白山と絹代の父、正吉の復讐劇。その悲惨極まりない場面の直面しどうすることもできず、ただ嘔吐し、何も考えられず、気づいたらその場から逃げ出してしまっていた事。絹代の母正枝を救えなかった自分に腹立たしい思いをしたこと。唯一の救いは白山の妻だけは助ける事が出来た事。そして・・・閃光と大地を揺るがすほどの地鳴りと共に再び気づいたときは元の部屋に戻っていたことなどをなるべく詳しく語った。しかし原爆の実験材料となって鼓島が犠牲になった事実は省いた。真実があまりにも恐ろしく、口にすることが出来なかったからだ。加えて白山、正吉2人の復讐劇の段は自分でも驚くほど興奮し、身体がブルブル震えてくるのがわかった。あの光景を思い出すたび吐き気がする。上村の生首が胴体と切り離され、白目を剥いた目がこちらを向いて・・・オエ！！突然良の口から朝食べたものが吐き出された。ブザーを押すとすぐ看護師が駆けつけて来た。すぐに脈を取り血圧を測った。家族の方は外に出ていてくださいと言われ、廊下に出る3人。そのあとすぐ木村医師が走ってきた。

## 第56話

待つこと40分。ようやく許可が下り、病室に入ると既にシーツや布団は新しいものと取り替えられ鎮静剤を打たれた良がスヤスヤ寝入っていた。その姿に3人はホッと一息ついた。すると木村医師がナースステーションに来て下さいと彼等を促し、先に立って廊下に出た。

「さっきまでは何ともなかったのに一体どうしたんですか？」腰掛けるや否や、木村医師はイライラした様子で切り出した。突然起きた発作の原因を知りたいということだ。新一と京子はあまりのことに動転し、パニック状態になり説明ができそうもないので代わって綾子が答えることになった。良が鼓島での体験を自ら話したのはこれが始めてのことだったので、彼女はひと言も聞き漏らすまいと必死で耳を傾けていたため、ほとんど忠実に良が言った事を木村に述べる事ができた。話が終わると木村は眉間にしわを寄せ、何かを考えあぐねている様子だった。やがて3人をぐるりと見渡すと、発作の起きる状態がどういう時なのかおおよそ見当がついた。その状況に少しづつ身体を慣れさせていく治療をしましょう。と言った。3人に異論があるはずもなくただ、宜しく願います。というほかなかった。

その足で勝和の部屋へ行くと、何やら様子がおかしい。具合が悪いのかと聞いてみてもなんでもないの一点張り。布団を頭から被りガタガタ震えているのだから、何でもないはずはないのだが、医者と呼ばうとする不機嫌になる始末だ。年寄りのわがままには付き合っていないわ！と実の娘である京子がまず匙を投げた。新一と綾子は義理の仲なのでそう無碍にもできず、ただオロオロするばかりだ。隣のベッドに寝ていた患者が言うには、昨夜からずっとその調子でせつかく出た朝食にも手を付けず、そのまま戻してしまっただそつだ。食後の検温に看護師が来た際には、何が何でも今日中に

退院するとダダをこね、看護師を困らせた挙句またこの格好になつたらしい。

その時、午前の回診時間がきて医師が病室に入ってきた。

「佐々木さん。今日退院したいそうですね。ではまず血圧を測らせてください。」

142の85。・・・良いですね。食事は？（看護師から説明を聞いた後）あ、そう。わかりました。そういうことなら退院しても大丈夫でしょう。でもいいですか。お宅に戻ったら今日1日は安静にしていして下さいね。・・・じゃ、のちほど会計の方から連絡がありますから、それまでここでお待ちください。では佐々木さん。お大事にして下さいね。」

3人の心配を他所にいと簡単に退院許可が下りてしまった。慌ててお金の心配をする京子を尻目に当の勝和はバツと起き上がり、自らサツサと帰り支度を始めた。あまりの元気よさに呆氣に取られる3人。

ともかく会計を済ませ4人は帰宅した。ところが安静にしないとダメよ、という京子の声にも耳を貸さず、勝和は自室に引き籠もり呼ぶまで絶対誰も部屋に近寄るなどピシャリと戸を閉め切ってしまった。ホントに年寄りのわがままには付き合っていられないわ！と勝和の勝手にさせておいて京子は隣近所の手前、一応退院祝いをすることにした。しかし綾子は良の身体が心配でいても立っても居られず急いで病院に戻った。

## 第57話

病室の目に立った綾子は、握ったドアノブに力を込め気持ちを引き締めてノックした。返答がない。恐る恐るドアを開

けるとスヤスヤ寝入っている良の姿が目に入った。ホッと一息ついて中に入るとベッド脇の椅子に腰掛けた。その寝姿を見ているうちに疲れが出たのか綾子はそのまふうたた寝をしてしまった。

「……子……綾子。」

誰かに呼ばれたような気がしてハッと目を覚ますと、良がじつと自分を見ていた。

「え？あ、ごめんなさい。呼んだ？　あら？私寝てたの？いやだね。良ちゃんの顔を見てたらとても気持ち良さそうで私もウトウトしちゃったんだわ。ごめんなさい。……どう？気分は。」

「……話があるんだ。」

いつになく真剣な面持ちの良に綾子の顔が翳った。

「え？……なに？」

「……ああ……」

「なに？どうしたの？」

「う……ん。……あの……さ。……俺達のこと……なかったことにしたいんだ。　オレがこんなじゃお前が苦勞するだけだしな。……お前にはオレよりふさわしい男がいる。だからオレのことなんか早く忘れて良い男を見つけた方がいいと思うんだ。」

一方的に、それも唐突に別れ話を切り出され、言葉もなくじつとうなだれる綾子。両膝にポタポタと涙が零れ落ちた。そのまましばらくの間微動だにしなかったが、やがてゆっくりと顔を上げた綾子の視線が良のそれとぶつかった。

「……なんだ……もつと悪い……知らせかと……思った……わ。そんなことだった……のね。……初めからわかってたじゃない。そんなこと。……良ちゃんにふさわしい人は私じゃないって。……」

いいのよ。気にしないで。・・・謝らないで！！謝られたら私みじめになるわもの。・・・でもおじさん達にはもう少し、黙ってましょ。・・・だって私達・・・これから友達ってことには変わりはないんだものね？・・・ね？」

ところどころよどみながら言い終えるにつこり笑う綾子。

「すまない。でも。お前それで良いのか？」

「良いも悪いも良ちゃんがそうしたいと言えば私はそれに従うだけよ。だって私のためにそう言ってくれたんでしょ？だったら私には何も言う事はないわ。・・・さあ、ゆつくり休んで早く良くなつてね。」

毛布を掛け直している手が小刻みに震え睫毛に涙が光る。

「ごめんな。」

しかし今の良にはそれしか言葉が見つからない。

「何言ってるのよ。　それより私、先生に聞き忘れてたことがあったからちょっと行って来るわね。ちよつとの間待っててね。」

静かに病室を出るとトイレに駆け込み、綾子は泣いた。他人の目があったため、声が外に聞こえないようにと念じながら。

「綾子。」

お互いの気持ちが自分のことのように解る2人は、互いを大切に想う余りいつも意地を張ってしまう。しかし別れを切り出す以外、彼女に何もしてやる事が出来ないのだ。綾子もまたそれを甘んじて受け入れる事で良の負担が軽くなると考えた。2人ともそれが解るから愛おしいのだ。

## 第58話

回診の時間となり木村がいつものようにやって来た。普段通りの受け答えをしたつもり良かったが、そこは餅は餅屋のたとえどおり、木村にはお見通しのようだった。

「何か心配事があるようですね。表情を見ればわかります。一応私も医者ですからね。・・・察するに綾子さんとの事でしょうか。」

どうやら図星のようですね。・・・この病気は傍で力になってくれる人が必要なんです。できれば彼女に力を貸していただきたいと考えていたのですが・・・ムリでしょうかね？」

「先生。なるべく誰の手も借りず治療したい、というのはダメですか？」

「え？ええ、まあ無理・・・というわけではありませんが・・・お勧めできることではないですね。ご家族の方の協力なしでは不可能に近いでしょう。私としては綾子さんが適任だと思っていたのですが・・・」

その時、2人の会話を入口で聞いていたのか当の綾子が飛び込んできた。

「せ・せんせい！私、大丈夫ですっ！やります。やらせて下さい！」  
「綾子！」

「おお！あなたが協力してくださるなら百人力です。・・・それではナースステーションにいらして下さい。細かいことを相談しましょう。」

惘然とした顔の良を残し、2人は出て行った。

説明が終わると木村は満足気に綾子を送り出した。病室に戻った彼女は窓の方を向き自分い背中を向けている良に向かって呟いた。  
「私はもうあなたの婚約者でも彼女でもないわ。ただの幼馴染みよ。その幼馴染みが苦しんでいるのを見て見ぬフリはしたくないの。だから良ちゃんも友人の手を借りることに何も負い目を感じなくていい。」

いのよ。私はこれまで充分笹崎家の方々にお世話になってきたわ。これはその恩返しよ。あなたが直ったら私はもうあなたに近づかないから安心していいわ。私の最後のわがままだと諦めて協力させて欲しいの。いいわね。」

一旦口にすると誰の言う事も聞かない性格は良に対しても同じだ。ことに（良の）病気に關することだけに始末が悪い。だが良も意地っ張りの性格なので、ありがたいと思つても素直に言葉にするのはプライドが許さず黙したままだ。するとそれを肯定と受け取った綾子は、早速行動を起こした。

「えつとまず・・・病氣の原因を探ること・・・これはもうわかつてゐるから済みね。・・・次は・・・と・・・」

木村医師の指示を細かく記した手帳を見ながらひとり言のように呟く綾子に、良は背中を向けたままぶっきらぼうに言つた・

「・・・お前がもらつた本を書いたウイリアム・カーペンターの昭和20年以降の消息と交友關係を調べればいいだろう。」

「えつ?・・・ああ、そうねえ。えつ!じゃ、いいのね?私がやつても。わかつたわ。早速調べてみるわ!」

協力を許された安堵感から嬉し涙を流しながら綾子は吉報を待つてね!と言ひ残し、軽快な足取りで病室を出て行つた。ドアがバタンと閉まると良は1人呟いた。

「悪いな。オレのために。」

## 第59話

笹崎家に顔を出した綾子は、調べたいことがあるからと勝和の退院祝いに集まった隣近所の人達に挨拶もそこに足早に東京へ戻った。

ゴールデンウィークも終盤だったこともあり本の元保有者、高木とコンタクトが取れ、速攻で会うことになった。

教えられた住所をたどって自宅に訪ねると、高木は待つてましたとばかりに綾子を中へ招き入れた。令夫人も同席していたので（秘書を兼務しているらしい）安心して勧められたソファに腰掛けた。グッドタイミングで紅茶とケーキが出てきた。

「さあどうぞ。お口に合うかどうかわかりませんが。」

「ありがとうございます。でも先生。突然押しかけてご迷惑じゃありませんでしたか？」

「なんの、なんの。あなたのような美しい方の訪問ならいつでも大歓迎ですよ。・・・それで・・・あの本について何か尋ねたい事があるとか。私に出来る事ならどんなことでもお教えいたしますよ。」  
傍に控えている夫人を気にかける風もなく、綾子を誉める高木。夫人もまたそんな高木の様子をニコニコと微笑みながら見ているので、かえって綾子の方が萎縮してしまった。

「大丈夫ですよ。私達はお互いを認め合った夫婦ですからね。で？話というのは？」

高木に促され、少しずつ緊張が解けていく綾子。

「はい。あの、実は・・・あの本を書かれたウィリアム・カーペンターという人の終戦後の消息と交友関係を知りたいのです。先生ならご存知ではないかと、ご迷惑と承知の上お訪ねしたのです。」  
必死な顔付きで訴える。

「おやおや。何かと思えばそういう事でしたか。消息と交友関係ねえ。・・・ちょっと待ってくださいよ。」



高木は数ある蔵書の中から一冊の本を取り出した。「ああ、これだ。」と満足そうに呟くと再び元の椅子に腰掛けた。

「これはですね、あなたに進呈した本の言語版。つまり翻訳される以前の原本です。ここに何か書いてあるかもしれない。・・・ええと、いつでしたか？・・・昭和20年以降？　つまり1945年ですね。　終戦後ですか　ええと・・・ああ。ありました。194

5年10月2日。私達はハワイに着いた云々というところですね。え？あ、既に読んだ？ああそうですね。・・・うん。・・・ああ。ダメですね。あとは和訳されているものと殆ど変わりませんね。消息ねえ・・・消息・・・　あ！そうだ！この人に聞けば解るかもしれない！電話番号は・・・と。　ああ、これだ。」

既に本は夫人の手に。代わってアドレス帳が高木の手に渡されていた。阿吽の呼吸である。高木はアドレス帳を見ながら、とある出版社に電話をかけた。

「・・・私は桃連<sup>とうれん</sup>大学の高木という者ですが、酒井さんはいらつしゃいますか？・・・ええ。私の担当の酒井守君です。はい。

おお！酒井君。丁度良かった。連休だから休みかと思ったよ。ちょっと調べてもらいたいことがあるんだが。・・・以前、君のところで出版したウイリアム・カーペンターというアメリカ人が書いた『私の海軍時代』という本があったろう。その作家について調べてもらいたいんだ。あ、いや、プロフィールというものではなく、終戦後の消息やその後の交友関係・・・（チラツと綾子の顔を見て）で宜しいかな？・・・あ、いや。こつちの話だよ。　そうそう、その2点を調べて欲しいんだよ。・・・え？わかってるよ。・・・次回は君のところを優先するよ。　大丈夫。約束するよ。・・・じゃ、なるべく早く頼むよ。」

時折綾子に確認しながら高木は出版社に調査を依頼し、簡単な世間話をして受話器を置いた。

「良かったよ。酒井君がいてくれて。こういったことは餅は餅屋でね。出版社に頼むのが一番なんだ。彼なら大丈夫だ。内緒だけれど

ね、私の担当の中では彼が一番信用がおけるんだ。あとは寝ながら果報を待てばいい。」

「申し訳ありません。私が面倒なことをお願いしたばかりに先生にご迷惑をおかけしてしまつて。」

「とんでもないよ。私の方こそあなたのような見目麗しい女性に頼りにされて得をした気分ですよ。それに私もその後のカーペンター氏に興味が湧いてきましたからね。一挙両得というのはこのことですよ。」

ウインク付きの賛辞に思わず赤面してしまう綾子。高木にはそれが日常茶飯事のように、そういうキザなセリフをサラツと言つてしまえるところが宮下の言わんとする高木がモテる所以のようだ。

「そんな。私美人じゃありません。……。」  
益々赤くなる。

「何という事ですか。あなたが美しくなければ世の中で美しい人などそうはいませんよ。あなたと結婚する男がうらやましい。ねえ？」  
今度は夫人に同意を求める高木。夫人は夫人で、

「全くその通りですわ。私など主人を取られるのではないかと最初にお目にかかった時から心配しておりましたもの。」

とすかさず夫の意見に同調する。しかしその言葉には嫉妬などという下世話な感情は微塵も感じられない。

「ほらね。あなたはもつとご自分に自信を持つて良いんですよ。」

高木の優しい言葉に良との破綻が思い出され、綾子の目からポロポロと涙がこぼれた。それを見た夫妻は事情を知らないだけに自分達の言動が綾子の心を傷つけてしまったと勘違いし、大慌てで謝罪した。

「……申し訳ありません。先生方のせいではありません。……ちよつと悲しいことを思い出してしまつて。……ごめんなさい。……少しの間……。」

そう言つたとき綾子は両手で顔を覆い肩を震わせた。夫人がそつと肩を抱き、自分の方に引き寄せた。幼い頃両親を亡くした綾子は、

ずっと他人に甘えることなく育ってきた。確かに笹崎夫妻は親代わりになって非常によく面倒を見てはくれたが、それでも本当の父母ではなかった。そのせいか綾子は決して一線を越えて2人に甘えたりすねたりするようなことはしなかった。謂わば優等生を演じていたのだった。それが高木夫人の醸し出す雰囲気、彼女の心に甘えたいという感情が芽生え、その胸を借りて泣いてしまうという失態をしてしまったのである。それに対し夫人は何も言わず、ただそつと頭を撫でてくれた。部屋には暖かな日差しが差し込み、カッコウの鳴き声が聞こえていた。

## 第60話

静寂を破つたのは電話の呼び出し音だった。受話器を取ろうとする夫人を高木が制し、自ら電話に出た。かけてきたのはやはり酒井だった。

「おお！待っていたよ。それでどうだったのかね・・・ん？・・・ほう！それはそれは・・・そうだね。連絡先を教えてもらえればこちらから電話するよ。・・・それと君から紹介されたと言って差し支えないだろうね？・・・そうか。それはありがたい。ではここで待っていていいのかね？・・・そうか。・・・ではよろしく頼むよ。・・・じゃ、後ほど。」

高木の表情からその内容が明るいものだということが察せられた。

「先生！」

綾子の問いかけに高木はVサインを見せ、

「さすがは大手出版社だけのことはあるね。短時間でカーペンター氏の孫という人物を見つけてくれたよ。何でも彼はアメリカで出版社の社長をやっているそうで、酒井君の会社とも懇意にしているらしいよ。早速連絡を取ってくれるそうだ。ここで待っているように言われたから、申し訳ないがもう少しここで私達年寄りの顔を見て辛抱していてくれないかね？」

高木は穏やかな笑みをたたえながら言った。

それから待つこと更に2時間。ようやく電話が鳴った。

「はい。高木・・・おお！酒井君。待っていたよ。ん？おお！そうか！え？これから？それでは申し訳ないよ。え？・・・そうか。いやあ、それは悪いね。じゃ、その時にまた。」

受話器を置いた高木は、不思議そうな面持ちで自分を見つめる2人の顔を見た。

「実はね。驚いちゃいかんよ。・・・酒井君の話だと、その孫という

人がこれから日本に来るというんだ。知り合いの人と一緒にね。いや、酒井君が連絡したからというのもあるらしいが、その知人が来日するので付き添って来るというのが本来の主旨なんだそうだがね。その人がだよ。酒井君の電話で私達と直接会ってくれることになったんだよ。日にちと時間がまだはつきりしないからわかり次第また連絡をくれるそうだ。」

高木の一言一句が綾子にはセンセーショナルな出来事だった。交友関係どころか一発で身内という人物にぶち当たったからだ。その上わざわざ来日して面会までしてくれるというのだから、綾子でなくとも驚きの一言に尽きるというものだ。

「だからね、日時がはつきりしたらすぐ連絡するから、申し訳ないがそれまで首を長くして待っていて下さい。いいですか？」

高木の申し出に返事もできずただ首を縦に振る綾子だった。

## 第61話

悶々とした気持ちのまま3日が経った日の午後。学校から帰ろうとした綾子の携帯が鳴った。見ると相手は高木だった。

「はい！．．はい！私です。え？本当ですか？これから会って下さるんですか？　はい！すぐ伺います！場所は．．はい。エターナルならわかります。はい。えっと　今4時ですから一時間後には行けると思います。はい！ありがとうございます！」

電話の前後でこれだけ表情の変わる人も珍しいといえるほど綾子の顔付きは違った。駅までの1キロを短距離ランナーも驚くほどのスピードで駆け出した。このときばかりは後先を考える余裕などなかった。案の定、駅に着いた時の彼女の髪はボサボサ、身体はフラフラの状態だった。それでも約束の時間の15分前にホテル・エターナルに到着すると、落ち着かない様子のままロビーで高木達を待った。高木以外の人達の顔を知らないで彼に来てもらわなければ前に進めないのである。

ジャスト5時。エレベーターのドアが開き4人の人物が降りて来た。まず高木と酒井とおぼしき男性が出て来た。次にアメリカ人の若い男性ともう1人、東洋系の顔をした老婦人だ。

「やあ、綾子さん。お待たせしたね。何だかとても疲れているようだが大丈夫ですか？．．．．．　そうですね。じゃ、簡単に紹介しましょう。綾子さん。こちらが酒井君。こちらが吉川綾子さんだ。．．そしてこちらがカーペンター氏の孫でコンチネタル出版社社長、ゲイル・カーペンター氏。若いがなかなかのやり手でね、年は34歳。まだ独身だそうだよ。こちらの女性はミセスロドリゲスだ。．．．もちろんレッキとした日本人だよ。」

高木から紹介されやや赤くなりながら3人に挨拶する綾子だったが、東洋系の女性だと見た老婦人が日本人だったことと、カーペンター

氏の孫なる人物があまりにも若いのに驚いた。

「日本の方、だったのですか？」

「ええ。わたくしは日本で生まれ終戦後アメリカ人と結婚し、現在はニューヨークに住んでいます。この子、ゲイルに無理を言って今回連れて来てもらいました。」

静かな笑みをたたえた老婦人には、誰もが親しみを感じさせる何かがあった。

カフェテリアに落ち着いた5人は、こうして出会うことになったいきさつを語り合った。

綾子の事情は高木と酒井から一通りカーペンター氏に伝えてあったものの、ロドリゲス夫人が来日することになった事情を3名は知らなかったため、話題の中心は必然的にそちらに重点が置かれた。しかし何故か夫人は多くを語らず、とにかくカーペンター氏の知人を捜しているという人物に会わせてくれの一点張りだった。これではいつまでたつても埒が明かない、ということになり、急遽、翌日綾子が2人を良の待つ病院へ連れて行くことで落ち着いた。

子ども達には申し訳ないと思いつつ綾子は一旦学校へ戻り、まだ残っていた学年主任を通して2日間の休暇願いを出した。ここ三日ばかり暗い表情だった綾子だけに校長も快く許可してくれた。

## 第62話

翌朝。東京駅10時16分発、MAXやまびこに乗った3人は、一路Z市に向けて出発した。ゲイル氏は何度も来日し、そのたび新幹線を利用していたので全く驚かなかったが、夫人は終戦後60年の歳月を経て初めて帰国したため、その感激ぶりは大変なものだった。窓から見える風景に、『この日本をお父さんとお母さんに見せたかった。』と涙ながらに何度も呟いていた。

11時56分。Z市到着。通常ならバスで目的地まで行くところなのだが、都合よくバスが出ている都会と違い、田舎はあと数時間待たなくてはならない。綾子はちょっと見栄を張りタクシーを使うことにした。バスは安いが時間がかかる。タクシーは高いが早い。一長一短である。とりあえずタクシーに乗る前に病院に電話をして良に（カーペンター氏とロドリゲス夫人の来訪を）伝えようとしたが、突然勝和の具合が悪くなり、（良が）外泊していると看護師に教えられ、真っ直ぐ笹崎家に向かうことにした。

タクシーの中でも夫人ははしゃいでいたが、段々と田舎道に入ると極端に口数が少なくなり、村に着いた時にはひと言も喋らなくなっていた。あまりの豹変ぶりにゲイル氏も心配を隠しきれず、何とか気持ちを奮い立たせようと試みたが、その努力の甲斐もなく、夫人の顔は益々暗くなっていた。

その後笹崎家に到着した彼らは、重苦しい雰囲気のまま中へ入った。

「おじさん！おばさん！綾子です！」

「綾ちゃん！」

良の父、新一が疲れた表情で偶然出てきた。

「おじさん！おじいちゃんは？具合が悪いつて看護師さんに聞いて真っ直ぐここに来たんです！どうなんですか？おじいちゃんは！」



「ああ。退院してからずっと部屋に籠もりつきりだっただけだね。今朝急に苦しみだして、救急車を呼ぼうとしたんだけど、おじいちゃんがどうしても嫌だて言うものだからそのまま部屋で寝かせてるんだよ。往診してもらったら時間の問題だろうって。ああ！もつとちゃんと注意してたらこんなことには！」

まるで勝和の危篤が自分の責任でもあるかのように落ち込む新一。

「おじさんのせいじゃないわ。だからそんなに自分を責めないで。

大丈夫よ。きつとおじいちゃんは元の元気なおじいちゃんに戻るわ。だから安心して待ちましよう。ね？・・・ところで良ちゃんは？良ちゃんは帰ってますか？」

綾子の問いに答えるかのように奥から良が現れた。ハッとお互いを見つめ合う2人。一瞬その場の空気が変わったかに見えたのだが、後方からキャッ！という叫び声に容赦なく2人は現実引き戻された。

## 第63話

何気なく声の主を見る良。しかしその表情に変化はない。それに比べドリゲス夫人はまるで幽霊でも見たかのように両手で口を押さえ、大きく見張った目からは涙が溢れ出し身体がブルブル震えている。

「良……さん？」

「え？……なぜオレの名を？」

そこで初めて良は夫人の傍に近寄りじつと顔を見つめた。やがて夫人の震えが伝染したかのように良の身体もワナワナと震えだした。

「……き……きみは……まさか……いや……そんなはずはない……そんなことがあるもんか！」

「良さん……そのまさかよ……」

「え？それじゃ……き……ぬよ……ちゃん？　ンなことがある……はず……」

ガタガタ震えながらもしっぴかり頷く夫人。一体どうなっているのか綾子達にはさっぱりわからない。

「良さぁん！！」

「絹代ちゃん！！」

突然夫人が良に抱きついた。良もその身体をしっぴかり受け止めた。ワンワン泣き出す夫人と良を見つめますます困惑する3人だったが、明らかなのは初対面のはずの2人が実はそうではなかったということだった。加えてかなり親しい関係だということがその言動からうかがえた。彼等の思惑をよそに、良達2人はただ、

「良かった！生きていたんだね！」

「はい！生きていました！」

と何度も繰り返すことで何もかも分かり合えたようだった。

「お取り込み中申し訳ないが。良、いったいこれはどういう事

か説明してくれないかね。」

たまりかねて新一が口をはさんだ。

「ああ・・・あんまり驚いたから・・・さあ絹代ちゃん。中に入つて。」

まるで恋人同士のような感覚で絹代の肩を抱き、初めてその存在に気づいたかのようにゲイルを見ると良は更に驚いた。

「ビル！・・・まさか・・・そんな！」

「ビル？違います。私は彼の孫でゲイル・カーペンターと申します。」

ゲイル氏は流暢な日本語で答えた。金髪に青い目のアメリカ人が上手に日本語を話したので今度は新一が驚いた。

「いやあ、あんた日本語上手いねえ！うちの人達は英語が堪能だけでもあんたは逆だ。いやあ、たまげたなあ！」

方言丸出しの新一に目もくれず、良は熱っぽい目で絹代を見た。

「孫？ 若いときのビルに生き写しだ。・・・絹代ちゃんもそう思わないかい？」

その姿に綾子はこれまでにない程悲しい気持ちになった。良が婚約解消を言い出した本当の理由はこれだったのかと、改めて自分達に未来はないのだと思い知らされた気がした。確かに夫人は良よりもずっと年上だが、恋愛沙汰に年令は関係ないのだということ、そして半信半疑だったタイムトラベルが現実起こったことだということとが綾子の心を締め付けた。その心の葛藤を察したのか、ゲイルが優しく綾子の肩を抱き寄せそつと耳元で囁いた。

「大丈夫。あなたには僕がついていきます。心配しないで。」

「さあ、とにかく中へ入って事情を説明してくれ。」

その場の空気が読めない新一のひと声で4人はそれぞれの想いを秘めながら家の中へ入った。

## 第64話

「良！おじいちゃんが呼んでるわよ！」

さて事情を説明しよう。という段になって京子がイライラしながら居間に入って来た。

「あら！お客様？　まあこちらは？」

いくつになっても京子は女性である。まず目に飛び込んだのが超イケメンのゲイルだった。

「おばさん。こちらはロドリゲス夫人。こちらはゲイル・カーペンターさんです。」

良と絹代、綾子とゲイルの取り合わせの事情を知らない京子にとってこの光景はかなり異様に見えたようだ。

「母さん、じいちゃんが呼んでるんだろ？」

「え？ああ、そうよ！早く行ってやって。」

「わかった。」

手をつないだまま良は絹代を伴い、勝和の部屋へ向かった。

「じいちゃん。入るよ。」

絹代の手を取り勝和の枕元に近付くと、弱々しく目を開けた勝和は見知らぬ女性の存在を認めた。

「誰じゃ。」

しかし声にも力がない。

「お客さんだよ。アメリカからのね。　絹代・ロドリゲスさんというんだ。」

「キヌヨ・・・キヌ・・・そう・・・あのお人もキヌヨという名じやった。・・・神社の絹代さんと同じ名じゃ・・・」

勝和がふと漏らしたひと言は、絹よに大きな衝撃を与えた。微動だにせずじつと勝和の顔を見つめていたが、突然

「まさか！　　そんな・・・そんなことが・・・」

と呟くと片手でこめかみを押さえ、良の身体にもたれかかった。

「絹代ちゃん！どうしたの！何が起こったの！」

「・・・良・・・さん。　まだわからないの？・・・あなたのお祖父さまは・・・あの勝一君なのよ・・・」

震える声で絹代の口から出た名前に、良は「え？」と言ったきり、祖父と絹代の顔を呆然と見比べた。と同時に勝和の目が大きく開き、眼光鋭く絹代を見つめた。やがてほうつと大きなため息をつくと再び目を閉じた。その目尻から大粒の涙が頬を伝って流れ落ちるのを絹代は見逃さなかった。

あの勝一が自分の祖父？！そんな偶然がいくつもあつてたまるものか！そう叫びたい気分だった。それに祖父の名前は勝和だ。そんな訳はない。絹代は頭がおかしくなったのか？そうとしか考えられない。きっとそうなのだ。絹代の方が変なのだ。混乱し何も考える余裕のない良に向かい、勝和が静かに語りかけた。

## 第65話

「どこから話せば良いかの・・・そう・あれは・・・」と前置きしてから

「・・・ビルがいなくなり良さんと絹代さんがあの祠ほらで話をしているのを聞いた僕は、すぐ駐在所へ走った。東京が空襲に遭うと叫ぶと駐やっ在は初め、ただのたわ言だと全く取り合ってくれなかった。けんもほろろに僕を追い払った。ところが何日かすると急に僕を呼び出し村長宅へ連れて行った。そこで・・・村長と駐在に東京空襲の情報源を吐けと拷問された。しかし僕は黙っていた。すると今度は良さん、つまりお前のことを教えろと言われたのだ。だが僕はこんな奴らに良さんのことは絶対言うもんかと更に黙った。業を煮やした村長はついに本性を現し・・・僕の右足を叩き潰した。・・・僕の右足はそれ以来どんなに手を尽くしても元通りにはならなくなった。今でも足を引きずるのをお前は知っているだろう。・・・その後、意識の無くなった僕の身体を駐やっ在は海岸へ運び・・・捨てたのだ。

どのくらい時間が経ったのかわからない。誰かが僕の身体に近付き、何か耳元で囁いた。薄っすらと目を開けた僕の目にビルとアレックスの顔が映った。2人は僕を助けようとしてくれたのだが、当時の僕は志願して軍に入ろうとしていたほどの愛国主義者だったから必死で彼等に抵抗した。だが所詮子供の力。本格的な訓練を受けた2人に敵うはずがない。大きな袋に入れられた僕は気を失ったまま船に乗せられ、やがてハワイへ送られた。そこで専門的な治療を受け、退院許可が下りたのが終戦後の9月10日だった。入院中に日本がポツダム宣言を受諾し、戦争が終わった事を知った僕の心は荒んでいた。何もかも良さんの言う通りになったことを知った僕は、退院しても行くところがなく、活気に溢れたハワイの裏側へ堕ちていった。半年以上も入院していたお陰で言葉は日常会話なら普通に話せるようになっていたから、何の問題もなかったが、日本人とい

うだけでハワイ人にはパールハーバーを連想させ、現地人からはかなり迫害を受けた。そんなある日。偶然に土産物店でアレックスに会った。彼は儂をずっと捜していたらしく、強引にある家に連れて行った。そこはビルの実家で、丁度休暇を取って帰宅していたビルと再会し、姉の一子の死を知った。日本からハワイに行く途中死んだということだったが、その頃の儂は悔しいとか悲しいとかそういった感情は微塵も感じなかった。あるのは楽しければいい。それだけだった。その姿を見たビルは、これではいけないと友人達に手を回し裏の世界から儂を救ってくれた。その後ニューヨークへ行かないかと誘われ、アメリカ本土に渡った。いい忘れたがビルは軍隊の任期を終えてニューヨークの新聞社に勤めていた。そういった関係で儂も同じ会社に入り、真面目に勤め始めた。しかし根っからの放浪癖が身体に染み付いていたのか、2年もすると同じ場所にいるのが苦痛になってきた。苦痛というよりも、日本が恋しくなったのかもしれない。また突然行方をくらました儂は、貯めたお金を全部持ってハワイ行きの船に乗り、日本へ帰ってきた。その頃の日本は焼け野原から少しづつ復興しようという気合があった。しかし何をするにしても儂には戸籍がなかった。どういう理由かわからんが、既に鼓島は無くなっていたから、近くの役所ちまたに行って戸籍を作ってもらった。当時はそれが可能じゃった。巷には戦災孤児が溢れていたから自己申告すれば新しい戸籍を作ることができたのだ。しかし村長と駐在の存在を恐れた儂は本名を名乗ることができず、それでも自分の名前を残したくて佐々木勝和と付けた。勝は勝一の勝、和は一と繋がることからそうしたのだが、それでも安心できず少なくなった金を持って上野から汽車に乗った。そこで偶然隣り合わせになった人と親しくなり、その人の家があるこの村に来た。ここは冬が長く厳しい寒さが続く所だが、しつこいほど人情深いところだった。彼等に触れるうちに儂はこの地に骨を埋める決心をした。土地の女性と結婚し、京子が生まれた。京子は姉の一子に良く似ていて、姉が生きていたならどんな風になっていたろうと何度も想像した。

こんな山の中だが僕は京子に小さい頃から英語を習わせた。日米の平和の架け橋となつて僕を助けてくれたアメリカに少しでも恩返しをしてもらいたかつたからだ。その気持ちはお前にも受け継がれたはずだ。

どこまで話したかな・・・おおそうじゃつた。成長すると京子は東京に出たいと言つた。僕に反対する理由がなかつたから快く送り出したのじゃが、一年もせんうちに新一君を連れて来て結婚すると言ひ出した。これには僕は反対だつた。そうじゃろう？日米の架け橋に！と願つていた娘が普通の嫁になりたいと言ひ出したんじゃからな。じゃが既に京子のお腹にはお前がいた。仕方なく2人を一緒にさせ生まれたのがお前じゃ。名前は良と名付けさせた。無論60年前のあの良さんから取つたものだ。しかしまさかお前があの時の良さんだつたとは・・・病院でお前の告白を聞いた時の僕の驚き・・・あまりの衝撃に身体中をナイフで切り付けられた気分だつた。あの時の状況は今でも言葉にできない。冷静さを欠いた僕は、すぐ退院するとわがままを言つて京子達を困らせた。しかしあの時の僕は普通ではいらなかつたのだ。帰つて来ても落ち着かず、部屋に閉じ籠つてしまつた。頭の中は真っ白で“まさかそんな事があるはずはない！現実ならこれは天罰だ。僕のそれまでしてきた事へのむくいだ！”僕の身体は言葉の鎖でがんじがらめになつた。・・・良・・・僕はお前に謝らなくては鳴らない。あれからずつと僕は後悔し続けた。お前を非国民と呼び、その言葉を信じなかつたことだ。心の中では謝りたいと思つていた。生きているうちに会うことが出来たならどんなことをしてでも謝罪したいと思つていた。・・・すまない・・・許してくれ・・・

ひと言ひと言に全身の力を込め、振り絞るような声で語りきるや安心したのか勝和、いや勝一は静かに目を閉じた。

「じいちゃん！」

「勝一君！」

2人同時に叫んだが、傍に付き添つていた医師が勝一の脈を取り、瞳孔の開き具合を確認すると冷静な判断を下した。



「17時12分です。」

「うわ　　！！」

良の叫び声に新一達、家の中にいた全員が勝一の部屋に押しかけた。  
「おじいちゃん！」

1人娘だった京子は良を押しつけ勝一の枕元に近付きまだ暖かい顔に自分の顔を押し付け必死に父を呼び続けた。良は絹代を促し廊下へ出た。そこには青白い顔をし、目に一杯涙を溜めた綾子と、その肩を優しく抱き寄せるゲイルの姿があった。

「良ちゃん・・・」

心配そうに声を掛ける綾子の顔を見て、とつさにゲイルを振り払い綾子の手を強引に引っ張り外に出る良。それは自分でも説明のできない行動だった。

「どうしたの？おじいちゃんの側に付き添ってあげなくていいの？」

綾子にも良が取った行動の意味がわからない。

「あの男は何なんだ！それに何だ！あの態度！お前もお前だ。あんな男に肩を抱かれて嬉しそうに！」

どうしようもない怒りを爆発させる良。

「ど・どうしたの？ゲイルは私を心配してくれただけよ。私だって嬉しそうな顔なんてしていなかったわ！それにもう私達恋人でも何でもないんだからそんな風に言われる筋合いはないわ！他の人が見たら変に思うわよ！」

綾子もまたいわれのない怒りをぶつけられ精一杯反論した。

「うるさい！オレはな・・こんなときに人前でイチヤイチヤしているお前たちが許せないだけだ！」

「イチヤイチヤ？　何をそんなにイライラしているの？まるで自分の持ち物を取られてヤキモチを焼いている子供のようだよ。・・それともおじいちゃんに何か言われたの？それから絹代さんとは一体どういう関係なの？私にだってそのくらい聞く権利はあると思うわ。」

必死に自分の感情を抑え、良の怒りを静めようとする綾子。内心は絹代に対する嫉妬で己の身体を焼き尽くさんばかりだというのに。  
「ヤキモチだと！誰がお前なんかヤキモチなんか焼くもんか！バカバカしい。それに彼女とのかを――お前に説明する必要はない！」

それにもかかわらず良の怒りは収まらない。そればかりか益々エスカレートするばかりだった。

## 第6話

「それは私から説明いたしましょう。」

その時、物陰からゲイルに付き添われた絹代が現れた。

「絹代ちゃん、いつの間に・・・」

「最初からあなた方の話を聞いていましたよ。」

穏やかな微笑みをたたえ、良から綾子に視線を移す。

「あなたがアヤコさんでしたのね？昨日紹介された時は全然気づかなかったのですが、今日良さんと60年ぶりに再会して思い出しましたわ。と言つてもあなた方にとってはほんの2、3ヶ月前の出来事なのでしょうけれどね。」

今度は良に視線を向け、フツとため息を漏らした。

「良さん。私達に約束したでしょう？正直におなりなさいな。あの時の気持ちを思い返してアヤコさんに本当の気持ちをぶつけなさい。私達に聞かせてくれた“君のために捧げる歌”私は一生忘れませんよ。・・・アヤコさん。信じてもらえないかもしれないけれど、私は女学生の頃、良さんと出会ったのですよ。もちろんその時は良さんが救世主として私達の前に現れたと信じていたから、まさか違う時代の人だとは思わなかったの。それに良さんには心に決めた女の人がいたから初めから私達は問題外だった。私と友人の一子ちゃんはずっとく良さんにその女性の名前を言えと迫ったわ。そしてとうとう“アヤコ”という名前を聞き出したの。当然私達2人はその見た事もない女性に嫉妬したわ。その時良さんは自分の時代に戻れたら必ずそのアヤコという女性に結婚を申し込むと約束したのよ。どうですか？良さん。その約束、守っていただけますか？」

ほこ先を自分に向けられた良は、下げた両手でこぶしを作りじつとうな垂れていたが、悲しそうな目を絹代に向けた。

「・・・ダメなんだ。今のオレには・・・あの約束は守れない。」  
言うが早いかその場から逃げるように家の中に駆け込んだ。

哑然とする3人だったが、いち早く綾子が我に帰った。

「申し訳ありません・・・」

「え？いえ。でもどうなさったの？良さん。」

「はい・・・実は・・・」

綾子は良が戻って来てからの様子を2人に掻い摘んで話した。その中には自分達の破局も含めざるを得なかったため、その件に関しては事実のみを挿入した。説明が終わると絹代とゲイルはとてもシヨツクを受けたようで、絹代は両手で顔を覆い、ゲイルは空を仰いで十字を切った。

「　　そういう訳で良ちゃんは私のためを考えてくれているのだと思います。だからあまり責めないで下さい。お願いします。」

深く頭を下げる綾子に優しく手を差し伸べる絹代。

「良さんがあなたを選んだ理由がわかりましたよ。あなた方は比翼連理のようですね。・・・大丈夫。きっとその病は治ります。あなたが傍についている限り、きっと。」

暖かい言葉に頭を垂れた綾子の身体が小刻みに震えた。

## 第67話

「綾ちゃん！綾ちゃん！どこにいるの！」

苛立った京子の声に3人は玄関の方を見た。家の中から京子がエプロン姿で叫んでいるのが見えた。そして綾子を見つけると一層声を張り上げた。

「何してるの！おじいちゃんのお葬式の準備があるのよ！隣組の 사람들이そろそろ来る頃だからあんたも手伝いなさい！何をすれば良いかわかってるわね！おばあちゃんの時と同じにすればいいんだから！さあ！早くして！」

追い立てるように綾子を家の中に入れると、初めて気づいたように絹代とゲイルの存在を認めた。

「あら、お客様にとんだところを見せてごめんなさいねえ。何しろ急にとりこんでしまつて。さ、さ、中にお入りください。お父さん！ほら、お客様のお相手をして！全く気が利かないんだから！」

京子の怒鳴り声に新一が転がるように外に出てきた。その姿を見たゲイルが小声で「My God」と呟いた。

「すみません。気が付かなくて。母屋は京子と綾ちゃんに任せて、離れに行きましょう。申し訳ないですが今日はそちらにお泊り下さい。」

「新一さん。私は60年ぶりに親友の弟に会つたのですよ。その弟が亡くなつたのに平気な顔でお客様していられません。私も何かお手伝いさせて下さい。それがご迷惑なら勝一君の傍にすることをお許し下さい。お願いします。」

「親友の弟？どういうことですか？それにショウイチとは一体誰のことです？」

事情を知らない新一には何のことだかさっぱりわからない。説明するのも面倒なので、絹代は端的に言った。

「あなたのお義父さんは私の親友の弟だったのです。ですから傍に

いさせて下さい。」

「え？し・しかし・・・京子が何と言うか・・・あいつは看護婦を志していただけに気が強くて・・・時々ホントに困るんですよ。」

「え？看護師？あなたの奥様は看護婦になりたかったのですか？」

「そうですよ。それが何か。」

一子も同じく看護婦になりたいと夢見ていた。それが志半ばで死んでいった。絹代の目には優しい一子の笑顔が浮かんだ。

「か・ずこ・・・ちゃん・・・ううううう」

「My dear 泣かないで・・・新一さん。事情は全て良が知っています。絹代おばさんをショウイチさん、つまりあなたのお義父さんの枕元に連れて行ってください。お願いします。」

優しく絹代の身体を支えながらゲイルは新一に言った。

「良が？そ・それなら京子も文句は言わんでしょう。・・・わかりました。こちらへどうぞ。」

親日に案内され絹代が家の中に入って行くのを見届けると、ゲイルはひとまず新一が用意した離れに向かった。

## 第68話

2日後。勝和の葬儀はしめやかに滞りなく執り行われた。絹代とゲイルは勝和の昔からの知人という形で紹介され、殆ど遺体の傍から離れることなく控えていた。しかし良にとって勝和という存在が単なる祖父ではなかったということがあまりにも大きすぎ、葬儀の間中ずっと放心状態のままだった。見かねた綾子が時々声を掛けるのだが、それに対する返事もままならぬ有様だった。

葬儀も無事終わりこれ以上休暇の延長は無理という日になって、綾子は新一夫婦に婚約解消とこれからすぐ帰京しなければならない旨を告げた。ゲイルも一旦帰ると言い出したため、どうせなら一緒に行こうという話になった。

新一はもとより京子の驚きといったらなかった。破綻した原因を作ったのは自分だと泣いて綾子に詫びた。しかし元々それが理由ではなかったので、京子の謝罪は暗くなっていた綾子の心を更に重くした。

「おじさん、おばさん。これで縁が切れたという訳じゃありませんから、何かあつたらすぐ飛んできます。それにさつきから言ってるように、こうなったのはおばさんのせいじゃないですからそんなに謝らないで下さい。良ちゃんと私は元々縁がなかった。それだけですから。ね？ それじゃ、私、行きますから。良ちゃんをお願いします。」

「笹崎さん。絹代おばさんを宜しく頼みます。僕は仕事がありますから一度東京へ戻りますが、来週また来ます。その時まで小母をお願いします。じゃ、綾子さん。行きましょう。」

ゲイルに肩を抱かれ、あらかじめ頼んでおいたタクシーに乗り込むと、一度も後ろを振り返らず綾子は去って行った。

## 第69話

ゲイルに守られるように去って行った綾子の姿を母屋の2階から見ていた絹代は、焦点の定まらぬ目を天井に向けている良に向かつて言った。

「・・・そうね。・・・私達は戦争の後、生きて行くことだけで精一杯で他の事なんて考える余裕なんかなかったわ。・・・本当に・・・今思い出すだけでも鮮明にあの光景が目に残るよ。そして両親との別れ・・・私は父や母を思うと何故あの時強引にでも連れて逃げなかったのかって自分で自分が許せないの。今でもそれは後悔しているわ。せめて母だけでも一緒に逃げなかったんだろうってね。・・・でもやっぱり60年の歳月は長かったんだと思うわ。その歳月がああ悲惨な戦争のショックを少しづつ和らげてくれたのかもしれない。亡くなってしまった人は二度と帰って来ないし、今さら戦争を恨んでも起きてしまったことを愚痴ったからってどうにもならないでしょう。・・・そうは言ってもね、まだ完全に立ち直ったわけじゃないの。私でさえそうなんだから、あなたにとってはついこの間の出来事だったのですもの、そんな風に気が抜けたようになっても不思議はないのかもしれないわ。・・・けれどそれではいつまでもたっても前へ進めないのよ。・・・失ったものが大きかったからといって後悔しても何も始まらないわ。良さん。しっかりして頂戴！あの時のあなたに励まされて私はこうして今まで生きてこれたのよ。勝一君だっけとそうだったと思うわ！だから今度はあなたが自分を取り戻す番よ！」

良の肩を掴み、正気を取り戻そうと絹代はグラグラ揺すった。しかし良は精気のない目を絹代に向け、

「わかってるんだ・・・でも・・・身体がいうことをきかないんだ・・・」

とポツリと呟き目を閉じた。その片方の目から涙が一筋こぼれ落ち



た。

## 第70話

慌しい状況の中で笹崎家は初七日を迎えた。移民者であった勝和、もとい勝一には親戚と呼べるような縁者がいなかったため、遺品を整理しようとした京子は机の引き出しに入っていた良宛の手紙と汚れた布袋を見つけた。

京子からそれらを受け取った良は、まず袋を開けてみた。それは勝和がことのほか大事にしていたもので、いたずらに触るうものなら烈火の如く叱られたものだった。

「こ・これは！」

それは無くしたと思っていた電池の切れた携帯電話だった。しかも錆びていてその殆どが腐食していた。一体何故祖父がこれを？急いで手紙を開けてみると、日付は5月1日。つまり勝和が退院した日になっていた。その日帰宅した勝和は部屋に引き籠もり誰も寄せ付けなかったと新一がこぼしていた。

『良へ。私はこの手紙を退院した日に書いています。良。良。』

まさかお前があの良さんだったとは。青天の霹靂とは恐らくこのことを言うのだらう。お前が生まれたとき、良さんのようになってほしくて付けた名前のお前が、まさか本人だったとは。私はその事実<sup>い</sup>に身体が震え、とても入院などしていられなかった。ことにお前の発作を目の前で見てしまった今となっては。罰が当たったと思っ<sup>た</sup>た。

良よ。私はお前に謝らなければならぬことが3つある。1つはお前を非国民呼ばわりしたことだ。そう叫んだ私は敵国兵に助けられ、のうのうとブザマに命を永らえてきた。戦争が終わり、60年を生きてきた現在<sup>いま</sup>、お前の言った意味がようやく理解できた。それがずっと私の心の中で汚点となっていた。2つ目は袋の中身だ。私はお前の電話を盗んだ。お前がビルを捜しに絹代さんと出かけた隙に、部屋へ忍び込み盗ってしまった。秘密の場所に隠し、村長た

ちに拷問され捨てられた後、半死半生のままビル達に支えられ、それを取りに戻った。その後の私の人生はその電話が唯一未来への希望となった。だが盗んだという事実は年ごとに私の心に重くのしかかってくるようになった。3つ目はお前の発作を目の当たりにして何も出来ない自分の存在だ。あの光景は死んだのちも絶対忘れないだろう。今もこうして目を閉じるとお前の苦しむ姿がはつきりと瞼に浮かぶ。戦争は私に多くの傷を残した。拷問されたのも元はといえば戦争が引き起こした産物だ。しかしお前の傷は違う。心の中の戦争だ。私にはどうすることもできない。それが悔しい。本当のことを言っても誰も信じてはくれないだろう。知っているのは私とお前の2人だけなのだから。時が解決してくれる傷もあるが、一緒に苦しんでくれる人がいれば直る傷もある。お前には綾ちゃんがいるあの娘なら大丈夫だ。どんな事があっても離してはならない。もしお前達の間ミゾができるような出来事が起こったなら、時を置かず、謝って仲直りすることだ。“ごめんなさい”このひと言が言えず私は今日まで来てしまった。良よ。言ってしまった後悔より言わぬ後悔の方が大きい事を覚えておくがいい。あの娘がいると思えば私も安心して姉さんのところへ行ける。私にはわかる。自分の命が尽きかけている事を。良。すまなかった。私は60年間ずつとお前に謝り続けてきた。悔恨の日々を過ごしてきたといつても過言ではない。良よ。反省は美德だ。しかし後ろを振り返ってはならない。また絹代さんや校長夫人を助けてくれたお礼も言っただ。私はあの時誓った。いつか再びあの良という人に巡り会うことがあったなら直接言おうと。“ごめんなさい”そしてありがとうと。

そこで文章は終わっていた。最後の2行は泣いていたのだろうか、紙がボコボコになり、文字がかなり乱れていた。そこには直接言いたいと思いつつそれでも尚それを言えずに悶々とした勝和の気持ち溢れていた。だが目を落とす間際に勝和はすまなかったといったその時の祖父の心中はいかばかりだったろうか。

「じいちゃん！」

勝和の切なる想いが良の心に巣食っていた無気力を溶かし、両目から涙となってボロボロ流れ落ちた。

## 第71話

「良ちゃん！」

ちょうど初七日で帰って来た綾子が良の絶叫を聞きつけ部屋に飛び込んできた。

「どうしたの！良ちゃん、しっかりして！」

「ウツ！」

綾子が良を抱き起こしたとき、彼女が身に付けていたペンダントが太陽に反射し、光を放った。とつさに綾子はぐっと身構えた。・・・しかし何も起こらない。確かに反射した光が良の目を襲ったはずなのに。良の身体には何の変化も起きなかったのだ。

「良・・・ちゃん？」

「あやこ・・・」

「ま・待つてて。」

何を思ったか綾子は部屋を飛び出し、家族が見ている中、納屋から草刈機械を引っ張り出してきた。

「さあ！良ちゃん！エンジンかけてみて！私には力がないからあなたがやって！さあ！早く！」

綾子は無理やり機械を良に押し付けた。そこで初めて彼女の意図を理解し、良は恐る恐る紐を引いた。しかし力が足りなかったのか機械はビクともしない。2回、3回・・・5回目にしてようやく機械はいうことをきいた。ブルブルブル！工事現場の音にはまだ程遠いがそれに近い音がし始めた。

5秒、10秒・・・長い1分が経った。いつもなら音が聞こえたと同時に、長くても30秒以内には発作が起きていた。ところが2分、3分。ついには5分が経った。しかし何も起こらなかった。綾子の異常な行動に家中の者が良の部屋に集まってきた。一部始終を見ていた彼等だったが、いっこうにその行動の意味がわからない様子でお互いの顔を見合わせている。ただ1人、絹代だけがその意

味を解し涙ぐんでいた。そうとは知らない良と綾子は大泣きしながら抱き合って喜んだ。そのかたわらには命の恩人である草刈機械が大きな音を響かせ横たわっていた。

## 第72話

その夜。絹代は綾子と一緒に戻って来たゲイルを交え、改めて良と綾子に戦後の自分を語った。良い事も悪い事も決して口にしたことのない絹代だったが、良の目に精気が戻ったのを見てようやく自分の戦後が終わったと実感したからだった。

「まず初めに綾子さんに謝らなければなりませんね。今回私が帰国したことであなたに大変悲しい思いをさせてしまいました。本当にごめんなさい。ゲイルから指摘されるまで全く気が付かなかったわ。私は今でもアレックスを愛しているから、誤解を招くような行動を取っていたなんて少しも感じなかったの。・・・そうね・

・あれは60年前。私は実家が神社だったこともあって、小さい頃から巫女をしていたの。ある日、枕元にご神体が現れて不可解なお告げを聞いたの。『近いうちに鼓島にとてつもない大惨事が起こる。助けを呼びなさい。強く念ずれば必ず救世主が現れる。なれどその者の言動を努々（ゆめゆめ）疑うではない。信ずれば必ず助かる。』

それだけを言うとしてとご神体は消えてしまった。私はそのお告げに沿ってその日から毎日念じたわ。時にあまり強く念じすぎて気を失った事もあった。けれどその甲斐あってようやく返事が返ってきた。そしてさほど時を置かず良さんが現れたの。私は良さんを見た刹那、この人だ！と六感で感じ、これで助かる！と叫んだわ。ただ1つ、私の予想と違ったのは、救世主となるべくその人が時間を超えて来た未来人だったということね。でも最初に良さんを見つけたのは私の友人の一子ちゃんと彼女の弟、つまり勝一君だった。私達は良さんから戦争終結が近いこと、更に終戦後の日本がどうなるのかを教えてもらいました。私達2人は最初から良さんを救世主だと信じていたから、良さんの口からでた言葉は全て現実にかかることだと確信していました。ところが勝一君は軍国主義の申し子のような子でしたから、真っ向から良さんの言った言葉に反発し、非国民

と呼び近付かなくなってしまう。そのうち勝一君が行方不明になり、姉の一子ちゃんも行方がわからなくなりました。悲しかったけれど当時はそんな感傷にいつまでも囚われていられません。でも私は良さんに全幅の信頼を置いていたから何が起ころうと心配することはないと信じていました。あまりにその想いが強すぎて父に咎められたくらいでした。嫁入り前の娘が1人の男に深入りしてはならない。しかも良さんは自分の世界に帰るべき人であり、お前がいくら恋焦がれてもどうにもならない。決して好きになっ  
てはいけないと……」  
そこで絹代は一息ついた。



## 第73話

あの時の厳しい顔をした父は友人から聞いていた父親像そのものだった。万民を救う神主がそんなことを言うなんて・・・私の目には父が俗物に落ちたように見えたわ。いつときの感情で私は憤慨したけれど父は私の奥底にある感情の変化を見抜いていたのね。その時すでに私は良さんを愛し始めていたから。そして良さんが来てから2ヶ月ほど経った日。突然鼓島が核の実験地になっていることを知らされたわ。すぐ島を脱出しろと言われて強制的に海岸に連れで行かれ、米兵の待つ軍艦に乘せられた。そこで一子ちゃんに再び巡り会ったの。既に死んでいたと思っていた一子ちゃんに会って私は涙が枯れるのではないかと思う位泣いたわ。でも彼女の身体は拷問にかけられたせいでボロボロだった。同じことが勝一君の身にもおこっていたらしのだけれど、その時の私は一子ちゃんに会えた喜びでそこまで考える余裕はなかったの。その他、船に乗ったのは乳の恩師夫人だけだったわ。私達3人はお互い身を寄せ合ってじっと時が過ぎるのを待っていました。人工的に核爆発を起こさせるのですから軍艦はかなり遠くまで避難していたと思います。それまで米兵に張り詰めていた緊張感がある時を境に溶け、周囲がザワザワし始めました。私達には言葉が理解できませんでしたけれど、何か重大な事件が起きたのだろうという事は察知できました。それが鼓島消滅なのだろうか？と半信半疑でしたがさすがにそのことは夫人と一子ちゃんには言えませんでした。悲しみを大きくし、傷口に塩を刷り込むようなことをして一体何の得があるのでしょうか。ただ私は島に残った良さんのことが気がかりでなりませんでした。なぜ強引に連れて来なかったのだろうと後悔が残りしました。以後60年私の心の中に消えない傷となっておりまして。その頃の日本は男女七歳にして席を同じうせず。という基本理念がありました。良さんはそんなことを全く気にしていない方でした。当然ですわね。そん

な理念があつたなんて信じられないくらいずっと未来から来た人なの  
ですもの。

## 第74話

その後一子ちゃんはハワイに行く途中亡くなってしまいました。私は島から脱出後、何くれとなく氣遣つてくれたアレックス・ロドリゲスとハワイで結婚し、しばらくそこに滞在しニューヨークに渡りました。校長夫人はハワイでみやげ物店を手伝つて生計を立てられるようになっていましたし、本人の希望もあつてそのままの地に残しました。ハワイ滞在時に勝一君に再会しましたが、あまりの変わりように心臓をわしづかみされた気分になつてしまいました。心が荒んでいたのでしょうか。でもビルとアレックスのお陰で何とか立ち直つた彼をビルはニューヨークに連れて行き、自分の勤める会社に就職させたの。けれどそれも2年が限度だった。勝一君はまた私の目の前から忽然と消えてしまった。・・・でもまさか日本に戻つていたなんて。今でも信じられない・・・良さん。あの時あなたが歌つてくれた“君のために捧げる歌”は今この時アヤコさんに歌つてあげるのがふさわしいと思うわ。私は何十年も経つてからアレックスに日本語で覚えさせたのよ。もちろんセリフも付けてねだからあなた方はこれから幸せを掴まなくてはならないのよ。一子ちゃんや勝一君のためにもね。それにね、良さん。アヤコさんをこのまま放つておくとゲイルが横からさらつてしまふわよ。彼はね、今まで本気で人を好きになつたことがなかったの。でもアヤコさんに対しては本気のようにですからね。早く彼女を掴まえないと大変なことになりますよ。ゲイルはビルの孫ですけれど、子供のいない私達夫婦を本当の親のように慕つてくれましてね、私達の近くに住んでくれてしょっちゅう行き来しているから毎日が幸せなのです。だから、鳶に油揚げをさらわれないように注意して下さいね。

フウ・・・生きていて本当に良かった。あの時良さんに助けてもらわなかったら私はこんなに幸せな日々を送る事ができなかったのですからね。あなたには感謝しきれないくらいですよ。さつ

きも言いましたが、今度はあなたの番です。一子ちゃんや勝一君のためにね。・・・今では年が逆転してしまいましたけれど、良さんは永遠に私のお兄さんです。妹からのお願いです。どうか幸

せになってください。今回、日本の出版社の方がビル交友関係を調べているとゲイルから聞いて、矢も盾もたまらず日本へ行きたいと言ったのは私です。彼は単なる付き添いのはずでしたが、日本へ来たことで理想の女性に巡り会い本当に嬉しいと言っておりまして。

ゲイル、そうよね？・・・私は初七日が済んだらニューヨークへ戻ります。アレックスつたら私がいないと淋しくてたまらないと電話で泣きながら訴えていたの。早く帰って来てくれつつあるさいのよ・・・あの頃良さんが持っていた携帯電話。当時はおもちゃにしか見えなかったけれど、今は老若男女みんなが持っているものなのね。・・・本当に便利な世の中になったわ。でもその便利さ

と引き換えに私は何を失ったのかしら。・・・何か大切なものを無くしたような気がする・・・わ・・・」

話し終えた絹代は肩の荷が下りたのかハンカチでそつと目頭を押さえた。その後を引き継いだ形でゲイルが祖父ウィリアムの自分に託した想いを吐露した。

「・・・祖父は僕の父にRYOという名前を付けて鼓島で出会ったRYOのような人間にしたいと考えていました。けれど父は根っからのニューヨークで祖父の教育方針にはことごとく反発したのです。そこで祖父は孫である僕に白羽の矢を立てたのです。両親とも仕事が忙しく、家にいることが稀だったこともあり、僕の養育はほとんどこの絹代さん夫婦に委ねられていましたからそれが容易だったのでしょう。小さい頃から聞かされていた鼓島の話やRYOという人物は僕の心の中に深く刻み込まれましたが、まさか現実に起こったことだとは信じてはいませんでした。絹代さんから良という人は私達の世界の人間ではなく、未来から来た人なのだとそれこそ耳にタコができるくらい聞かされていましたからね。面と向かってそんな作り話、誰が信用するものか！とは言えなかったというの

が本音でしたけれど。でも本当の事だったのですね。今の僕の気持ちを何と表現したらいいのかわかりません。それにアヤコさんに出会ったことも僕の心を動かしました。でも絹代さんの話を聞いた今となつては良さんとアヤコさんの未来に幸あれと祈るばかりです。どうかアヤコさんを幸せにしてあげてください。お願いします。」絹代とゲイルの切なる願いに良のささくれ立った心にゆるやかな日差しが染み込んでいった。

## 第75話

1週間後。東京に戻った良は、病院で再度検査を受けた。その結果が更に1週間後の今日わかるのだ。良は綾子と共に主治医である佐伯の診断を受けるべく病院に赴いた。

「笹崎さん。結果から申しますとですね、70%〜80%の割合で元の状態に戻ったと申し上げて間違いはないと思われます。あの状態からこんなに早く元の状態に戻るなんてとても信じられませんが、ほぼ間違いありません。恐らく奥さんの看病のお陰でしょうね。感謝すべきですよ。笹崎さん。」

それまでの2人の葛藤を知らない佐伯は単純に綾子のお陰だと口にしたが、あえて良は反論しなかった。確かに綾子の存在が良の病を治す要因を作ったことに違いはないのだから。しかし隣に座っている綾子には佐伯の言葉が不満だったようだ。何か言おうとしたが、良が黙ったままなので言葉を無理に飲み込んだように見えた。

その後、これから先の治療方法をアドバイスされ2人は病院を後にした。

「どうした。何か不満でもあるのか？」

帰る道すがら、黙ったままの綾子にそのわけを尋ねると、

「不満もなにも良ちゃんの病気が治ったのは私のお陰じゃないわ。それなのにあの先生ったら私に感謝しろだなんて。ひどいわ！」

やはり佐伯の言葉に怒っていたのだ。

「ひどいもなにもないさ。オレだってそう思ってる。おそらくお前には一生頭が上がらないよ。」

「えっ。一生？ あのね！確かに友達ではいるつもりよ。でも一生面倒見るというのは無理な話だわ。未来の良ちゃんの奥さんが聞いたら絶対ただじゃすまないことよ！わかってるの？100%怒るわ

よ。 そんなこと言うもんじゃないわ・・・」

最後の言葉はひどく淋しげに聞こえた。

「何を言ってるんだか。」

「え？何よ。 じゃどういう意味なの？」

「どういうって。 お前な、オレ達一緒になるだろう。 未来の奥さんてお前のことじゃないのか。 それとも別にいるっていうのか？ オレには全く心当たりがないけどな。」

「え？何ですって？ 良ちゃんこそ変な事言わないよ。」

「お前、オレと一緒にするのがそんなにイヤなのか？」

「え？だって私達は一生友達のままだって・・・え？いつ戻ったの？」

「いつってじいちゃんの初七日の日さ。 お前気付いてなかったのか？」

「気付いてって・・・良ちゃん、何も言わなかったじゃない！だから私これからずっと友達のままだって自分に言い聞かせて・・・たのに・・・そんなこと言うなんて・・・！」

「おま、泣くな！ひとが見てるだろう！泣くなって！」

人目も憚らず泣き出した綾子の手を素早く取り早足で歩き出す良。

「・・・まあ、今回はオレが悪いかな。」

「かもですって！もう！絶対良ちゃんが悪いわよ！ 泣くなだなんてよくも言えるわね！」

「わかった。 わかったから・・・謝るよ。 オレが悪かった。 この通り。」

急に立ち止まり良は頭を下げた。 通りすがりの人がジロジロと2人を見て行く。

“言わぬ後悔より言った後悔だ。 先に謝って仲直り” 良の脳裏に祖父勝和の言葉は響いた。

「もうやめて。 こんなところで。」

「許してくれるのか。」

「わかりました。 許します。 だからもう頭を上げて。」

他人の視線を真っ向から受け、恥ずかしさの余り綾子は真っ赤になっ  
っている。しかし良はどこふう風といった具合でニヤニヤ笑いな  
がら頭を上げた。

「なら安心だ。お前が本気で怒ると閻魔大王も尻尾を振って逃げて  
行く位怖いからな。」

「ひどいわ。まるで私が世の中で一番恐ろしい人間みたいな言い方  
して。」

そこで一旦言葉を切り、改めて綾子は良に向かい合った。

「……良ちゃん。……私にだけ教えて。おじいちゃんとの間  
に何があったのか。それとどうして私とのこと元に戻す気になっ  
たのか。」



## 第76話

「掛けようか。」

目の前の公園にベンチを見つけると、良は綾子を促し腰かけた。

「……前に鼓島で出会った3人の少年少女の話をしたことがあったろ。一子、絹代、勝一。ゲイルと一緒に来たのがその時の絹代ちゃんだったことはお前も聞いたはずだ。そして、まさかと思ったけど、オレのじいちゃんが勝一だったんだ。」

「えっ。それってどういうこと？意味がわからないわ。」

「だから、鼓島で出会った2人と60年の月日を隔てた今、また出会ったんだ。」

「えっ？そ、そんな。あり得ないわ。そんな奇蹟みたいなこと。」

「オレだつて最初は信じられなかった。時間を遡る事だけでも非現実的なのに、60年も年月があるのに携帯が通じたり。でもじいちゃんが大事に持っていた布袋、お前も見たことがあっただろ。いつかオレがいたずらにあれを持ち出そうとしてもものすごく叱られた。あの袋。あの中味がこれだったんだ。」

あれ以来、良は壊れた携帯を肌身離さず持っていた。

「これって……良ちゃんの携帯？ だけど……」

「そう。腐ってるんだ。じいちゃんが子供の頃盗んだ。と、オレ宛の手紙に書いてあった。」

そう言いながら良は勝和の手紙を綾子に見せた。

「……良ちゃん。」

予想はしていたものの、やはり読んでいる途中からその目には涙が溢れ出していた。

「オレ、その手紙を読んでじいちゃんの60年という月日の重さを感じた。じいちゃん。いや勝一はずっと悔恨の中で生きてきた。そうと知ってオレの心の中にあつた何かが砕けたような気がした。そ

の時お前の存在がオレの中で膨れ上がったんだ。・・・ゲイルが・・・奴の会社の日本支社で働かないかって誘ってくれたんだ。オレそこに世話になろうと思う。じいちゃんが死の間際に話してくれたおふくろに託そうとしていた夢を叶えてやりたいんだ。日本とアメリカの架け橋になるっていう夢をさ。そう決めた。・・・だからその夢を叶えるためにはどうしてもお前が必要なんだ。これは理屈じゃない。お前じゃないとダメなんだ。わかったか。これが復活の理由だ。

「

「良ちゃん。本当に私でいいの？」

「何度も言わせるな。」

綾子の涙顔をまともにみることができず、顔を真っ赤にしながら良は先になって駆け出した。そしてつと立ち止まると、真っ青な空を見上げ呟いた。

「一子ちゃん。勝一。これでいいんだよな。いつかまたどこかで巡り会えたなら絹代ちゃんも入れて4人で酒でも飲もうな。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4897e/>

---

いつか きっと

2010年10月11日23時39分発行